

早稲田大学審査学位論文  
博士（スポーツ科学）

**明治期から現代に至る競技としての剣道の形成過程の研究**

**—型の術理と競技スポーツ性との対抗関係をめぐって—**

**A historical study of the developmental process of kendo  
competition from the Meiji era to the present day**

**—Focusing on the conflict relation between  
techniques and thought in the kata, and competitive sport aspects,  
of kendo—**

2020年1月

早稲田大学大学院 スポーツ科学研究科

佐藤 皓也

SATO, Koya

研究指導教員： 志々田 文明 教授

# 目次

## 序章

- 第一節 本研究の目的と背景 ..... 1
- 第二節 先行研究と本研究の課題 ..... 4
- 第三節 研究方法と本研究の意義 ..... 18
- 第四節 用語と本研究の構成 ..... 19

## 第一章 競技剣道の幕開けと展開

- 第一節 競技剣道の幕開け：竹刀打ち込み稽古の登場と発展 ..... 23
- 第二節 旧制高校と校友会雑誌 ..... 30
- 第三節 旧制高校の校風：武士的精神・指導者 ..... 38
- 第四節 学生剣道の勃興と対抗試合 ..... 48
- 第五節 学生たちの剣道観 ..... 55
- 第六節 学生たちの技術とその精神：勝利への工夫 ..... 65

## 第二章 戦前における競技剣道の展開：有効打突をめぐって

- 第一節 戦前における有効打突の変遷 ..... 85
- 第二節 有効打突の刃筋に対する考え方の変遷 ..... 87
- 第三節 日本剣道形の制定と普及 ..... 89

## 第三章 戦後における競技剣道の展開：有効打突をめぐって

- 第一節 戦後における有効打突の変遷 ..... 101
- 第二節 有効打突の刃筋に対する考え方の変遷 ..... 105
- 第三節 撓競技と剣道の関係 ..... 107
- 第四節 日本剣道形の取り扱い ..... 109

第四章	戦後における競技剣道の展開：“剣の理法”をめぐって	
第一節	“剣理剣道”と“あてっこ剣道”	112
第二節	剣理剣道の刀法論及び心法論：“あてっこ剣道” 否定の論理	118
第三節	刀法の技術と方法：柳生新陰流の袋竹刀操法から	128
第四節	剣理剣道とあてっこ剣道の相克：あてっこ剣道の 論理	133
第五節	あてっこ剣道の是正に関する議論	143
終章		
第一節	成果	151
第二節	課題	154
	引用・参考文献	155
	資料	165
	謝辞	197

# 序章

## 第一節 本研究の目的と背景

本研究の目的は、明治期から現代に至る競技としての剣道の形成過程を探究することを通して、剣道における競技スポーツ性と型の術理の対抗関係を解明することにある。

“競技スポーツ性”とは試合で勝利志向の強い剣道観及びそれに付随する竹刀操作の技術及び剣道の審判規定や試合方法に対する工夫を指し、“型の術理”とは日本刀の操作法に裏打ちされた剣道観や技術性を指す。

本研究の目的に至る背景には三つある。一つ目は筆者の純粋な動機、二つ目は社会状況、三つ目は先行研究（第二節）である。

本研究に着手した純粋な動機は、2007（平成19）年の剣道試合において、筆者（当時高校生）は審判員から自身の剣道を“あてっこ剣道”と指摘されたことにあった。審判員は、“一本”と判断される“有効打突”をとろうとする筆者の姿勢が不十分だとしてこの言葉で表現したのである。当時の筆者は、剣道界にあてっこ剣道とそうでない剣道とがあると認識してはいなかった。しかし大学進学後も剣道を続けているうちに2つの剣道の違いを明確にしたいという思いが強くなった。そして、日本剣道形や剣術の形稽古（柳生新陰流）に取り組むようになり、あてっこ剣道とは異なる身体感覚を覚えるようになった。そうした過程で、剣道には競技スポーツ性と型の術理の両方が対抗しながら併存しているのではないかと考えるようになった。これが本研究の動機である。

社会状況において今日、武道は日本文化を象徴するものとし

て、国内外を問わず広く認知されているようである。例えば、日本を代表するサッカーや野球のチーム名に“サムライブルー”や“侍ジャパン”などといった名称が使われている。また、2003（平成15）年にはハリウッド映画“ラストサムライ”を観て海外で多くの武道ファンが現れ武道ブームとなった。最近では刀剣を擬人化したオンラインゲーム（“刀剣乱舞”，2015年サービス開始）の影響によって刀剣に興味を示す“刀剣女子”も増えている。こうした大衆文化が引き金となって武道を始める人口が急増したともいえる。

しかし、武道が普及すれば、様々な問題も発生する。武道がスポーツの枠組みで捉えられている以上、例えば、オリンピック種目となった柔道では、組めば日本人に負けるから組ませないように戦う、あるいは反則でポイントを取得し勝ちを得るという方法に終始し、見事な技による一本を目指す柔道を見ることが難しくなっている傾向にある。また、相撲ではルールで禁じられていないにも関わらず、横綱である白鵬の張り手やかち上げを“汚いとか醜いと感じる人”や“張り手やかち上げをやる回数が多いことに不満を持つ人”もいる<sup>1</sup>と報じられている。

これは、チャンピオンシップに見られる剣道も同じような現象が見られる。相手の打突部位に“あてさえすればよい”とする価値観に支えられた剣道の稽古・試合の方式、いわゆる“あてっこ剣道”といわれる現象が浮上した。つまり、前述した武道には正しいあるいは正しくないと言われる性質がある。

2012（平成24）年から、武道は中学校における保健体育の必

---

<sup>1</sup> 不詳（2018）『日本経済新聞』，7，6，日本経済新聞社。

修教材となった。教育基本法が 1947 (昭和 22) 年の制定以来、59 年ぶりに改正され、その教育目標には「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛する」態度を養うとの表現を盛り込んだ<sup>2</sup>。この目標を実現するための一環として、武道は中学校の保健体育で必修化されたのである。したがって、スポーツの側面をも有する武道はその文化的で伝統的な側面、いわゆる“武道の独自性”がより一層求められるようになった。

このような武道に対する考え方や社会状況から、筆者は剣道の正否を決定する性質は何かという問い持ちながら競技としての剣道文化の形成過程に着目した。この形成過程に着目する理由は、剣道には三つの文化性<sup>3</sup>があり、競技として剣道が発展するなかでその正否が問われてきたからである。

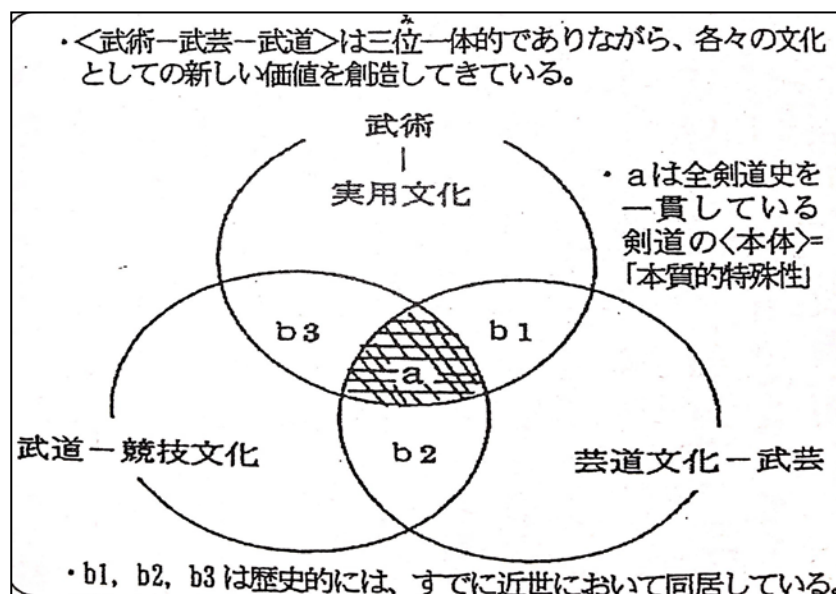


図 1 剣道に伴う文化性

<sup>2</sup> 不詳 (2006) 『読売新聞』, 12月15日, 読売新聞社。

<sup>3</sup> 加賀谷誠一 (2007), 『剣窓』, 4月号, 全日本剣道連盟, p.14.

“実用文化”とは、戦国時代の真剣勝負の場において相手の攻撃に対して護身あるいは戦闘で殺傷する身心技法<sup>4</sup>を追求したこと，“芸道文化”とは江戸時代という平和な時代を迎えて，“剣術”が殺し合いの方法としてではなく，自分自身を鍛える手段に変わったこと，“競技文化”とは真剣勝負の場から江戸時代中期（十七世紀中頃）に考案された竹刀と防具を使用して安全かつ自由に勝負ができる場へと変わった<sup>5</sup>とされる。すでに剣道文化に伴う価値は明治期以前に出揃っていたことになる。

## 第二節 先行研究と本研究の課題

日本剣道の技術性に関する歴史研究では“競技スポーツ性”と“型の術理”をめぐる研究がなされてきた。前者では，試合で勝利志向の強い剣道観及びそれに付随する竹刀操作の技術及び剣道の審判規定や試合方法に対する工夫が論じられ，後者では，日本刀の操作法に裏打ちされた剣道観や技術性が論じられてきた。しかし，これら相互の関係については，これまで本

---

<sup>4</sup> 大保木によれば，身心技法とは技法において，身と心が不可分の関係にあるという意味で使用される。心身ではなく身心とするのは，身が先に鍛えられ，その後心は深められていくことを指すという（大保木輝雄，2017，10月の聞き取り）。本研究でも，剣術・剣道の技法には有効打突の要件のように「充実した気勢，適正な姿勢をもって竹刀の打突部で打突部位を刃筋正しく打突し，残心あるもの」（剣道試合・審判規則・第12条）といった心法，刀法が含まれているのでそれを総称する意味で技法とは記さず，身心技法と示す。

<sup>5</sup> 作道正夫（2007），『剣窓』，4月号，pp.14-17.



格的研究がなされてこなかった。以下では、このような研究史について説明し、本研究の観点を明確にする。

## 1. 武道の人文学的研究

武道の研究史を人文学的研究の視点から概観し、本研究に関わる先行研究との関係から課題を明らかにする。なお、人文学的研究の視点からの武道の研究史については、榎本鐘司がまとめている<sup>6</sup>ため参考にする。

日本武道学会が設立される1968(昭和43)年以前において、武道に関する人文学的研究は、体育史や芸能史の一領域として行われてきた。例えば、西山松之助の『家元の研究』(1959)や今村嘉雄の『十九世紀における日本体育の研究』(1967)などがある。

武道の基盤的研究には『日本武道全集』(1966-1967, 全7巻)、同著をもとにした『日本武道体系』(1982, 全10巻)がある。これらを刊行したのは、今村、岸野雄三、小笠原清信、石岡久夫、入江康平、島田貞一といった名だたる研究者たちであった。これらの研究と並行して渡辺一郎は『明治武道史』(1971),『武道の名著』(1979),『近代武道史研究資料集』(1980-1988)など続々と武道文献史料を刊行した。

武道学会設立後には、杉江正敏が『アサヒスポーツ』,『体育と競技』などの雑誌を整理、分析し、武道学会で発表した(1973

---

<sup>6</sup> 榎本鐘司(2009)『現代スポーツ評論21』, 創文企画, pp.120-127.

－1997)．本節が参照した榎本の論考以降に，上記の成果の一部が『写真と記事でたどる武道の近代史』(2017)として日本武道館より出版されている．

こうした武道の基盤的研究をもとにしながら，武道の研究は実践的認識に基づく研究が中心となって行われてきた．中林は“武道における精神性とは何か”を正面から研究し，武道は“術や技の鍛錬，修行あるいは習熟と直接関連する”という実践的認識を強調した．言い換えれば，身体に即して身体で自覚するという認識である．

一方，近年において武道の全体像をとらえる手がかりとなる研究には酒井利信の『日本精神史としての刀剣観』(2005)，本節が参照した榎本の論考以降には，寒川恒夫の『日本武道と東洋思想』(2014)，中嶋哲也の『近代日本の武道論：〈武道のスポーツ化〉問題の誕生』(2017)などがある．

すでに榎本も指摘しているように2000年代以降，古流武術に伝承されてきた特殊な技法の研究が注目されはじめてきている．例えば，今日では魚住孝至・吉田鞆男他「日本の武道文化の成立基盤-新陰流と一刀流剣術の研究を通じて」(2014)，立木幸敏「小野派一刀流における切落の由来について－三重および五点を参考に」(2016)などの論文がある．

以上，武道の人文科学的研究は資料の発掘とその整備、同時に若い研究者の輩出によって発展することになる．2000年以降，資料に基づく歴史的研究は細分化して展開していった．

## 2. 競技としての剣道の形成過程に関する研究

本研究のテーマである競技としての剣道の形成過程に関する研究は、1970（昭和 45）年以降から活発に行われてきた。先に示した武道の基盤的な研究以降に行われ始めており、競技としての剣道研究は上記の研究をもとになされたことがわかる。競技としての剣道の基盤的研究は中野八十二の「剣道の技術史」（『スポーツの技術史』、1972、大修館）によってなされた。同著の目的は、剣術から剣道に至る技術史を概観することにあつた。具体的には、“叩合技法の時代”，“刺突技法の時代”，“斬撃技法の時代”，“近世の打突技法”，“近代の打突技法”，“現代の打突技法”に分けて概観している。

1970（昭和 45）年以降は中野の研究と並行して剣道におけるルールの基盤的な研究が行われた。村山輝志・国分国友が著した『剣道試合審判規定：規定の変遷史』（1975）には、1884（明治 17）年から 1969（昭和 44）年までの剣道ルールがまとめられている。その後、村山は 1976（昭和 51）年に剣道と柔道のルールの性格を探究した論文「審判規定の変遷からみた武道（柔・剣道）の性格」を発表した。当該論文では武道における実戦的ルール<sup>7</sup>が中心となっており、「このルールを補充し、できるだけ公平に、しかも安全にスピードある試合を展開させるために、技術的，形式的，強制的性格ともいふべきルールが改正，

---

<sup>7</sup> 相手を一撃のもとに制するという技術を中心にしたルールを指す。[村山輝志（1976）「審判規定の変遷からみた武道（柔・剣道）の性格」武道学研究 9，p.16]。

増補されてきた」<sup>8</sup>と武道のルールを総括している。

これらの研究がもとになって、競技としての剣道の形成過程に関する詳細な研究が始まった。筑波大学の修士・卒業論文集では、長尾進（1982）「剣道における有効打突基準の変遷について：打突部位の問題を中心に」<sup>9</sup>、田中美和（1983）「剣道における掛声の効用についての一考察」などが挙げられる。

その後、中村民雄は中野の研究を踏襲するかたちで「武道の技術史研究序説」（1991）を発表し、単に技術に着目するのではなく、文化との関わりのなかで技術に着目することを示した。また、中村はそうした研究の一環として剣道の技術史をまとめた『剣道辞典：技術と文化の歴史』（1994）を著した。

2000年代になると、剣道研究の成果は『剣道の歴史』（2003）として集約された。『剣道の歴史』とは2003（平成15）年に全日本剣道連盟（以下、全剣連）が刊行したものである。当時の会長であった武安義光は、全剣連による初の剣道史であり、剣道の普及と発展のために共通の歴史的認識を持つという意図で刊行した<sup>10</sup>と述べている。これ以降も競技としての剣道の形成過程に関する詳細な研究は続けられ、今日に至っている。例えば、矢野裕介の「1900年前後における剣術の体操化過程にみる胴技の変容：小沢卯之助らの武術体操法に着目して」

---

<sup>8</sup> 村山輝志（1976）「審判規定の変遷からみた武道（柔・剣道）の性格」武道学研究 9, p. 16.

<sup>9</sup> この長尾の研究はのちに、「近世・近代における剣術・剣道の変質過程に関する研究 面技の重視と技術の変容」（明治大学人文科学研究 所紀要, 1996）としてまとめられている。

<sup>10</sup> 武安義光（2003）『剣道の歴史』, 全日本剣道連盟, pp. 2-3.

(2014), 坂本太一の「剣道における技の体系の変遷過程に関する研究:竹刀に着目して」(2015)などが挙げられる。このような研究史の延長線上に本研究は位置づけられる。

### 3. 剣道における競技スポーツ性と型の術理に関する研究

前述のように競技としての剣道の形成過程を取り扱う研究は多く蓄積されているが、競技スポーツ性と型の術理に関する研究はそれほど多くはない。

#### (1) 競技スポーツ性

筆者が見た限りでは、浅見裕による剣道の競技スポーツ性についての研究「体育教材としての剣道に関する研究(その1):剣道のスポーツ化関連して」<sup>11</sup>(1979)が出発点になるだろう。

浅見は、現代剣道の機能と価値を明確にするために、「戦後、剣道が復活するためにスポーツ化を図った過程」<sup>12</sup>を論じ、「そこに潜む学校体育で弊害となる問題点」<sup>13</sup>を明らかにした。浅見の意見は、①戦前の剣道が抱えていたマイナス特性は斬切動作にあり、その反省に立って戦後のスポーツ剣道があること、②撓競技時代(1950-1954)は「斬切と密着した打撃技術を、安易なあてっこという打撃技術でもよいとして、技術のレベル

---

<sup>11</sup> 浅見裕(1979)「体育教材としての剣道に関する研究(その1):剣道のスポーツ化関連して」。岩手大学教育学部研究年報, 39, pp. 85-97.

<sup>12</sup> 同上, p. 89.

<sup>13</sup> 同上, p. 91.

を引き下げた」<sup>14</sup>とする認識にあり、戦後の撓競技にあてっこが悪影響を与えたとの認識を示している。また、③剣道界指導者らの現代剣道スポーツ化反対論及び技術主義（エリート主義乃至貴族主義）への批判、そして、④現代剣道の技術追求の立場は、2点（稽古過程の重視と試合・勝敗重視）に集約される。

1980年代以降、大塚忠義らは浅見の研究を発展させ、歴史的な跡づけを始めた。大塚忠義が行った一連の研究は以下のとおりである。いずれも“高知大学教育学部研究報告”として発表されたものである。

- 大塚忠義（1984）「近代剣道批判 第2部ルール形成過程の考察その1－昭和2年規程以前の剣術の意味と思想性－」。
- 大塚忠義（1986）「近代剣道批判 第2部ルール形成過程の研究その2－大日本武徳会の試合と昭和二年規程の思想性と構造に関する研究－」
- 大塚忠義（1989）「近代剣道批判 第2部：ルール形成過程の研究その3－虚構的技術の発展と規定の二重構造による軍事的再利用の研究－」
- 大塚忠義（1990）「近代剣道批判 第2部：ルール形成過程の研究その4－現代剣道の理念とルール形成過程の研究－」
- 大塚忠義（1990）「近代剣道批判 第1部：現代剣道の技術をめぐる状況と剣道論」

---

<sup>14</sup> 同上， p. 93.

こうした一連の研究は『日本剣道の歴史』（1995）にまとめられた。大塚は主に近代という時代を対象として剣道の競技スポーツ性を探究した。大塚は、戦後の試合審判規則はあてっこ剣道を是正するために改訂され続けたが、あてっこ剣道を克服できなかったとの事実認識に立って以下の点を立論した。①「竹刀と真剣（刀）ならびに技術の修練と人間の修養という二重構造によって仮想された虚構の剣道理念」<sup>15</sup>こそ見直されるべきである、②その見直しのためには、「刀の技術と思想」<sup>16</sup>を根拠とする「真剣思想」<sup>17</sup>を越えた現代剣道の確立にある。ここで大塚は剣理剣道の思想が抱える問題を明確にして問題解決の方向性を指摘した。具体的方法については『剣士に告ぐ』（2005）で競技ルールの見直し案を提示した。

大塚の研究を補い、発展させたものには坂上康博（1998）「剣道の近代化とその底流：三本勝負を中心に」が挙げられる。坂上は、真剣勝負の伝統及び実践的修身科（剣道は競技ではない）という観念が明治期以降の剣道の競技としての合理的な発展、剣士たちが存分にその実力を出し合える試合方法の創出をさえぎったと結論している。近年において、坂上は「GHQ占領下における剣道：規制、存続、スポーツ化、芸能化の諸相」（2016）を発表し、剣道史においてこれまであまり語られてこなかったGHQ占領下の剣道実践の諸相を探究している。

同じく大塚研究を発展させたものとしては、木寺英史の研究

---

<sup>15</sup> 同上， pp. 87-88.

<sup>16</sup> 同上， p. 56.

<sup>17</sup> 同上， p. 56.

『日本刀を超えて』（2014）がある。木寺は“竹刀は刀”であるとする「日本刀代用論」<sup>18</sup>について正面から取り扱った。現代剣道はスポーツであるから一次的目的は試合で勝つことにあ  
るが、そこで開発された技は“剣の理法”に適さないとして否定される現実を指摘する。否定する側（剣理剣道）が「竹刀は日本刀の代わりである」<sup>19</sup>という信念に立っている点を、木寺は「日本刀代用論」<sup>20</sup>として批判した。その上で竹刀による技法には刀の技法とは別の視点から現代剣道の在り方を追求する。

## （2）型の術理

日本刀の操作法に裏打ちされた剣道観や技術性に関する代表的な近世の研究がある。それは榎本の「幕末剣道における二重的性格の形成過程：競技性の顕在化および伝統性と競技性の折衷」（1988）が挙げられる。ここでいう伝統性とは剣道において“競技化できない部分”を指す。榎本は近世後期（1830年以降）の“長竹刀の流行を契機”として、試合打込試合（撃剣）の技術体系が確立し、真剣操作を前提とした技術（剣道の型にみる術理）と竹刀操作（競技スポーツ性）の分化が進んだことを歴史的に実証した。

一方、修士・卒業論文レベルでもこうした視点は扱われるようになる。例えば、酒井利信（1986）「現代剣道における打突技術に関する一考察：斬るという技術・意識を中心に」では、

---

<sup>18</sup> 木寺英史（2014）日本刀を超えて、スキージャーナル、p. 3.

<sup>19</sup> 同上、p. 10.

<sup>20</sup> 同上、p. 10.



竹刀で“斬る”という技術はどのようなものなのかを“刃筋”や“手の内”，“刀剣観”などをキーワードとして探究している。

近年では剣道の型の術理と競技スポーツ性，さらには芸道性に着目した大保木による剣道の技術と歴史に関する包括的研究がある。それが大保木の「剣道：その歴史と技法」(『武道』，2015－2017，三年間二十五回にわたった連載)である。大保木は形稽古と現代剣道における身心技法の乖離を埋める観点から“剣道の理念”制定者の思想のルーツを探り，日本剣道史を俯瞰する中でその中核思想(剣術の“一刀”，“機をみて”，“身を捨てる”)を示し，それが「剣の理法」<sup>21</sup>に含意されることを仮説的に提示した。これは剣理剣道とあてっこ剣道の両者へ活かすために示めされた理論であり，大保木はあてっこ剣道を剣理剣道へ向かうための過程<sup>22</sup>として捉え，必ずしも否定していない。

以上の先行研究(1)から(3)をみたとき，競技としての剣道の形成過程を考察するために5つの時代区分を設けた。第一期は竹刀打ち込み稽古の開始から撃剣の誕生まで(1711年から1868年)，第二期は明治維新から初めて剣道専門家が出場した全国大会である昭和天覧試合<sup>23</sup>まで(1868年から1929年)，第三期は戦争が続き，結果的に日本が敗戦するまで(1929年か

---

<sup>21</sup> 大保木輝雄(2017)『武道』，2月号，日本武道館，p.110.

<sup>22</sup> 大保木氏への聞き取り 2018.3.23.

<sup>23</sup> 昭和天覧試合とは，昭和天皇の即位を記念して，皇居内の済寧館において開催された全国大会であり，初めて剣道専門家が参加した。剣道専門家とは，生活の大部分を剣道の修行にあて，質・量ともに一般の剣道家をはるかに凌駕するほどの稽古をしていた人物を指す(戦前には剣道専門家という部門や呼び方があった)。

ら 1945 年), 第四期は敗戦後の剣道禁止から剣道の理念制定まで (1945 年から 1975 年), 第五期は剣道の理念制定 (1975) 以降である。

#### 4. 各観点の先行研究

これまで正面から取り扱われてこなかった, 剣道の競技スポーツ性と型の術理とが対抗しつつも併存していく過程について, 明治維新以降現代に至る剣道史を精査して, 次の三つの観点から解明する。

観点 1: 戦前における学生剣道界の剣道に対する取り組みの実態はどうであったか。(第 1 章)

観点 2: 剣道競技の目的である有効打突の思想はどのように変遷してきたか。(第 2 章及び第 3 章)

観点 3: 剣道において勝利至上主義的な剣道と批判されてきた“あてっこ剣道”と全日本剣道連盟制定の”剣道の理念”にそった“剣理剣道”とはどのように対抗してきたか。(第 4 章)

観点 1 について, 戦前の学生はどのように撃剣に取り組んだのか。二高の剣道学生だった庄子は, 学生剣道界は「大正末期から昭和初期にかけて極めて活発な動きを示し」<sup>24</sup>, 「学生剣道連盟が逆に武徳会をリードするような結果を来し」<sup>25</sup>たと評価している。大塚忠義らは, 学生の活躍を, 「武徳会や専門家が剣道の競技化に消極的であった」<sup>26</sup>のに対して「剣道の技術

---

<sup>24</sup> 庄子宗光 (1966) 『剣道百年』, 時事通信社, p.147, .

<sup>25</sup> 同上, p.152.

<sup>26</sup> 大塚忠義, 坂上康博, 宇都宮伸二 (1990) 『のびのび剣道学校』, 窓

的発展と競技化の先端を担ったのは学生や OB たちであった」<sup>27</sup>とさらに掘り下げ、剣道専門家の指導内容を鵜呑みにせず、「専門家とは違う自分自身の生活や人生の中で自らの剣道」<sup>28</sup>を考えたと彼らの感性及び知性とその主体性を評価している。杉江正敏は、剣道の競技化について「敗戦による GHQ の指導によってのみ進展したのではなく戦前にその萌芽と流れが存在し、学生の試合を中心に自主的に現在に近いところまで到達していたという認識が必要であろう」<sup>29</sup>と総括している。具体的には学生が「スポーツ的試合方法（対抗戦・リーグ戦・トーナメント法・三審制）」<sup>30</sup>の摂取を試みたと評価されており、学生によって剣道の競技スポーツ性が台頭したといえる。

吉村哲夫はこうした戦前における学生剣道の理念は「現代に通じる“審判の公明性”と“競技化”の追求」<sup>31</sup>にまとめることができるという。しかし、旧制高校の学生たちが学生剣道の理念形成に果たした役割について言及した研究はほとんど見られない。剣道の競技化における文化的葛藤に悩んだ様々な領域の人々の行動については、大塚<sup>32</sup>、坂上康博<sup>33</sup>の研究で主に武徳会など剣道界の指導者側を中心に行われてきているが

---

社， p. 35.

<sup>27</sup> 同上， p. 35.

<sup>28</sup> 同上， p. 35.

<sup>29</sup> 杉江正敏（2003）『剣道の歴史』，全日本剣道連盟， p. 24.

<sup>30</sup> 同上， p. 24.

<sup>31</sup> 吉村哲夫（2003）『剣道の歴史』，全日本剣道連盟， p. 109.

<sup>32</sup> 大塚忠義（1996）『日本剣道の歴史』，窓社， pp. 21-153.

<sup>33</sup> 坂上康博（1998）『日本文化の独自性』，創文企画， pp. 157-194.

学生剣道界についてはその重要性が指摘<sup>34</sup><sup>35</sup>されつつも未だ本格的な研究はなされてこなかった。そこでここでは、旧制高校の中でも東西の両雄的立場にあり、東西で対抗試合の先駆けとなった一高と三高を取り扱い、競技スポーツ性と型の術理について考察した。

観点2について。第二章で検討した三つの氣勢、姿勢、刃筋は1927（昭和2）年、大日本武徳会（1895年結成、以下、「武徳会」）が制定した「大日本武徳会剣道試合審判規定」（以下、「昭和2年規定」）で初めて示された。その後、この規定は1945（昭和20）年の日本の敗戦に至るまで続き、氣勢、刃筋、姿勢は1953（昭和27）年における戦後の最初の規定に引き継がれた。

有効打突の制定に関する研究成果には大塚のものがある。大塚は戦前における武徳会の規定について、その規定のほとんどが「競技化に伴って発生」する競技者の「卑怯な振る舞いを防止」<sup>36</sup>するためだったと述べている。このことは戦前の社会状況や、武徳会が規定した剣道のルールによって導き出されたものである<sup>37</sup>。

戦後における最初の有効打突は、「科学化の方向」を「中断」

---

<sup>34</sup> 小沢幸正（1978）「旧制高校剣道と旧制富山高校剣道」、『旧制高校史研究』，16号，p.53.

<sup>35</sup> 大保木輝雄，数馬広二，長尾進（2002）『関東学生剣道連盟五十周年記念誌』，関東学生剣道連盟，pp.9-35.

<sup>36</sup> 大塚忠義（1995）『日本剣道の歴史』，窓社，p.34.

<sup>37</sup> 大塚忠義（1984）「近代剣道批判 2—ルール形成過程の考察 1—昭和2年規程以前の剣術の意味と思想性」，高知大学教育学部研究報告。

<sup>38</sup>し、当時の剣道家が感覚的に戦前と同じ規定を用いたという。いまだ研究の余地があるとすれば、大塚が取り扱っていない技術に対する考え方、すなわち刃筋にみられる型の術理についてである。本研究では刃筋にみられる型の術理に着目しながら、競技スポーツ性との関係を考察した。

観点3について。前述した浅見、大塚、木寺、大保木の研究から明らかのように、あてっこ剣道を巡る問題が指導者間で否定的に議論されているにも関わらず、そのこと自体が論文レベルで究明されていない。したがって、あてっこ剣道自体に焦点を絞って競技スポーツ性と型の術理について考察した。

## 5. 本研究の課題

以上から本研究の課題は5つある。

- ① 竹刀打ち込み稽古の開始から撃剣の誕生まで（1711年から1868年）の競技スポーツ性と型の術理の関係
- ② 明治維新から初めて剣道専門家が出場した全国大会である昭和天覧試合まで（1868年から1929年）の競技スポーツ性と型の術理の関係
- ③ 戦争が続き、結果的に日本が敗戦するまで（1929年から1945年）の競技スポーツ性と型の術理の関係
- ④ 敗戦後の剣道禁止から剣道の理念制定まで（1945年から1975年）の競技スポーツ性と型の術理の関係

---

<sup>38</sup> 大塚忠義（1984）近代剣道批判 2-ルール形成過程の考察 1-昭和2年規程以前の剣術の意味と思想性、高知大学教育学部研究報告。

### ⑤ 剣道の理念制定(1975)以降の競技スポーツ性と型の術理の関係

このような課題を踏まえて、本研究は欧米諸国からスポーツが本格的に輸入される<sup>39</sup>明治期以降から現代の剣道に焦点を絞って、剣道における型(日本剣道形)の術理と競技スポーツ性(試合)との対抗関係を競技としての剣道の形成過程から探究する。

## 第三節 研究方法と本研究の意義

本研究は主に文献による目的の解明を試みた。本研究は先に示した三つの観点を通して、明治期から現代に至る競技としての剣道の形成過程を探究し、剣道における型の術理(日本剣道形)と競技スポーツ性(試合)との対抗関係を解明することにある。本研究のポイントは三つの観点を正面から取り扱うことにあり、ここに本研究の独自性がある。また、本研究は①武道論分野への貢献、②学校教育への貢献が挙げられる。

①について。武道論分野においては武道の技術史、思想史という側面に対して新たな知見(学生剣道の諸相、有効打突の思想、あてっこ剣道と剣理剣道の問題)を加えることができる。さらに、本研究の知見は戦前・戦後の剣道史を包括的に把握し、剣道に対する考え方や社会的評価、普及状況を解明することに繋がるだろう。

②について。学校体育は生涯にわたる「豊かなスポーツライ

---

<sup>39</sup> 中嶋哲也(2017)『近代日本の武道論』, 国書刊行会, p.15.

フ」<sup>40</sup>の構築に寄与することを目標としている。その一環として「スポーツの意義や価値」<sup>41</sup>を理解させることが求められている。そのためには「スポーツの文化的特性や現代のスポーツの発展」<sup>42</sup>（従前の「スポーツの歴史，文化的特性や現代のスポーツの特徴」<sup>43</sup>を含む）についての知識を獲得させる必要がある。本研究は“スポーツの文化的特性や現代のスポーツの発展”に関する知識の幅を広げ，深めることができると考えられる。

#### 第四節 用語と本研究の構成

##### (1) 用語

本研究で主に使用する用語には，“剣術”，“撃剣”，“剣道”，“競技スポーツ性”，“型の術理”，“剣理剣道”，“あてっこ剣道”，“対抗関係”がある。

① “剣術”，“撃剣”，“剣道”について。撃剣という用語は剣術の意味で日本書紀に見える。江戸中期に竹刀打ち込み稽古が始まるとその稽古方式をも撃剣と呼んだ。剣術を指す言葉にはほかに兵法があったが，近世に入り剣術が主に用いられた。明治期には剣術の意味で撃剣の語が使用されたが，1919（大正8）年以降剣道の語が使用されるようになり今日に及んだ。本研究ではこうした実態を踏まえて文脈によって適宜使い分け

---

<sup>40</sup> 文部科学省（2018）『高等学校学習指導要領解説 保健体育編 体育編』，p.6.

<sup>41</sup> 同上，p.15.

<sup>42</sup> 同上.

<sup>43</sup> 同上.

た。

② “競技スポーツ性”とは試合で勝利志向の強い剣道観及びそれに付随する竹刀操作の技術及び剣道の審判規定や試合方法に対する工夫を指し，“型の術理”とは日本刀の操作法に裏打ちされた剣道観や技術性を指す。

また、型と形について源了圓によれば、形とは人間の意識的・無意識的な動作によってつくられるものであり、型は思考錯誤を繰り返しているうちに無駄なものがすっかりなくなって、機能性、合理性、安定性があり、そして一種の美がある<sup>44</sup>という。本研究ではこれに従って、“型”を使用し、定められた手順に従って行われる一連の身体動作を示すと定義する。洗練された動きのパターンを型と表記するが、その型にいたるための稽古は形稽古と表記する。

③ 剣理剣道とあてっこ剣道について。剣理剣道とは、日本剣道形に即して示さるようになった剣の理法に基づく剣道を指す。一方、あてっこ剣道とは打突部位に“あてさえすればよい”とする価値観に支えられた剣道の稽古・試合の方式、そのような意識と定義する。

④ 対抗関係とは競技スポーツ性と型の術理が併存しながらどちらかが強くなったり弱くなったり、一貫して併存していることを含めた関係を指す。

---

<sup>44</sup> 源了圓（1989）『型』，創文社，p.14.



## (2) 本研究の構成

本研究の構成は以下の通りである。

- 第一章 戦前における競技剣道の展開：旧制高校を中心に
  - 第一節 競技剣道の幕開け：竹刀打ち込み稽古の登場と発展
  - 第二節 旧制高校と校友会雑誌
  - 第三節 旧制高校の校風：武士的精神・指導者
  - 第四節 学生剣道の勃興と対抗試合
  - 第五節 学生たちの剣道観
  - 第六節 学生たちの技術とその精神：勝利への工夫
  
- 第二章 戦前における競技剣道の展開：有効打突をめぐる
  - 第一節 戦前における有効打突の変遷
  - 第二節 有効打突の刃筋に対する考え方の変遷
  - 第三節 日本剣道形の制定と普及
  
- 第三章 戦後における競技剣道の展開：有効打突をめぐる
  - 第一節 戦後における有効打突の変遷
  - 第二節 有効打突の刃筋に対する考え方の変遷
  - 第三節 撓競技と剣道の関係
  - 第四節 日本剣道形の取り扱い
  
- 第四章 戦後における競技剣道の展開：  
“剣の理法”をめぐる
  - 第一節 剣理剣道とあてっこ剣道
  - 第二節 剣理剣道の刀法論及び心法論：

“あてっこ剣道” 否定の論理

第三節 刀法の技術と方法：柳生新陰流の袋竹刀操法から

第四節 剣理剣道とあてっこ剣道の相克：

あてっこ剣道の論理

第五節 あてっこ剣道の是正に関する議論

# 第一章

## 競技剣道の幕開けと展開

## はじめに

本章では、①江戸中期から江戸後期（1711－1868）、②明治維新から昭和天覧試合（1868－1929）までを対象とし、当該時期における型の術理と競技スポーツ性の対抗関係を明らかにする。

### 第一節 競技剣道の幕開け：竹刀打ち込み稽古の登場と発展

#### 1. 庶民剣士の時代：なぜ庶民は剣術家になれたのか

日本の歴史学者は江戸時代の多面性（「環太平洋の時代」、「漂流の時代」、「世論政治の時代」、「庶民剣士の時代」<sup>1)</sup>）を指摘する。多面性の一つに庶民剣士の時代がある。

日本の剣術は刀剣の文化として発展してきた。古代の刀剣は信仰の対象として存在したが、10世紀における日本刀の形成・使用以降、刀剣は弓箭と並んで兵（武器）の権威のシンボルの一つとして考えられた。騎射に次いで武芸の中心にあった剣術は、戦乱が収まった“元和偃武”の江戸時代にいたって戦国期以前の実戦的な実用性の追求から剣術を求道的に追求する芸道として発展する。

平川新は『武術英名録』（1860）を取り上げ、庶民剣士の活発な活動実態を明らかにした。庶民剣士とは、百姓剣士（在村の剣術修行者）と町人剣士（城下町などに住む剣術修行者）を合わせた呼び名である。

1700年代、江戸幕府は百姓や町人の脇差事情をほとんど把

---

<sup>1)</sup> 平川新（2008）『日本の歴史』、12巻、小学館、p. 24.

握しておらず、これに加えて百姓や町人は剣術を禁止されていなかった。1800年代になると、幕藩領主の財政が厳しくなっていく。領主は御用金（借上金）や献上金を裕福な百姓や町人に勧め、金額に応じて特権を与えられた。これに伴い武士身分を示す帯刀（二本差し）は一部の町人や百姓の間で増えていった。

百姓による武芸の稽古の禁止は1805（文化2）年であり、江戸の町人が武芸の稽古を禁止されたのは1843（天保14）年のことだった。しかし、ほとんど効果はなかった。それは江戸幕府が、意外なほどに世論（民意）に神経を使い、対立する世論を合意に導くことに腐心していた<sup>2</sup>からだという。したがって、幕府はいかにも厳しく武芸の禁止を取り締まったようなイメージがあるが、禁止は“教諭”程度にとどまった。一方、他流試合が本格的に解禁されるのは天保年間（1830－1844）であるが、竹刀打ち込み稽古（後述）が開始されると安全性が保障されたこともあり、江戸中期以降、他流試合は次第に広まった<sup>3</sup>という。ここにも“教諭”にとどまった影響がみられると推測する。

こうした江戸時代の制度や庶民剣士の活動実態のなかで、竹刀打ち込み稽古が広まり、武士階級のみならず町人や百姓のような新しい担い手が登場する。

## 2. 竹刀打ち込み稽古の登場

江戸時代初期から正徳年間（1711－1715）に至る以前は形稽古を主としたが、それは次第に「形式を尊重するあまり、華美

---

<sup>2</sup> 同上， p. 20.

<sup>3</sup> 酒井利信（2010）『日本剣道の歴史』，スキージャーナル， p. 180.

となり，遊芸化の傾向がみられる」<sup>4</sup>ようになった。正徳年間（1711－1716）に，現代の剣道で使用するような面・小手，竹刀の改良がなされた<sup>5</sup>。正徳年間（1711－1716）において第八代・長沼国郷は第七代・山田光徳と共に形稽古を補完するため，面・小手，竹刀を改良した<sup>6</sup>。宝暦年間（1751－1763）には一刀流の中西忠蔵が面・小手に胴を加えて面にも改良を施した<sup>7</sup>。まさに宝暦年間は一刀流が竹刀打ち込み稽古の「採用に踏み切った時期」<sup>8</sup>であった。竹刀打ち込み稽古という中西忠蔵の「面白キ」<sup>9</sup>発明は，次第に「是ニテコソ劔術ナリト思キ込，我モ我モト面小手シナヘヲ用意シテ，是ヲ出精スルコト盛」<sup>10</sup>になったとあるように，中西派一刀流の門人たちは盛んに竹刀打ち込み稽古を行ったという。その後，竹刀打ち込み稽古は次第に勢力を広げ，多くの流派に採用されていった<sup>11</sup>。

竹刀打ち込み稽古が始められて約 100 年後，稽古を指導した中西派一刀流四代目中西忠兵衛子正は，竹刀と竹具足（防具に相当）を用いて稽古する一刀流兵法者の現象に疑問を持っていた。「今世ニ一刀流ト称スル兵法遣ヒヲ見ルニ，多クシナヘヲ持，鉄面ヲ掛，竹具足ヲ用キ，互ニ合氣ヲ用キテ，我打タレマ

---

<sup>4</sup> 杉江正敏（2003）『剣道の歴史』，全日本剣道連盟，p. 9.

<sup>5</sup> 大保木輝雄（2016）『武道』，9月号，日本武道館，p. 97.

<sup>6</sup> 長尾進（2018）『武道』，7月号，日本武道館，pp. 31-32.

<sup>7</sup> 大塚忠義，坂上康博，宇都宮伸二（1990）『のびのび剣道学校』，窓社，p. 11.

<sup>8</sup> 大保木輝雄（2016）『武道』，9月号，日本武道館，p. 97.

<sup>9</sup> 中西子正（1822）「一刀流兵法鞆袍起源考」。（渡辺一郎（1979）『武道の名著』，東京コピー出版，p. 158）

<sup>10</sup> 同上.

<sup>11</sup> 大塚忠義，坂上康博，宇都宮伸二（1990）『のびのび剣道学校』，窓社，p. 11.

「ジ敵ヲバ打ント志シテ，日々ニ打合テ大汗ヲ流ス者ヲビタダシ」<sup>12</sup>と，互いに気をぶつけ合って（合気），打たれまい打とうと専心する，つまり勝負の結果にこだわることを実戦（切り合い）の観点から問題視しており，この時期に既に当てさえすればよいとする実態があったことがわかる．当時の状況について，大保木は『一刀流兵法鞆袍起源考』（中西子正，1822）をもとに次のようにまとめている．

中西忠蔵の時代には道場に通う弟子も多く，稽古に精を出すものも多かったが，その稽古は，流儀の意味もわからず，形だけを繰り返し，肝心の勝負には程遠く，素人にも劣る様相であった．それ故，面小手を着用し竹刀をもって，お互いに思い通りに打ちあいを見せてみた所，様々な構えや形のほぐれ効果もあり，未熟の兵法使いの相手位にはなるような力がついていた．この自由に打ちあう方法が中西先生の工夫だと勘違いし，多くの弟子が集まり稽古に精を出していた．しかし先生は，それらの弟子たちに一刀流の“本明の位”に導こうとしたが真意を会得するものは誰もいなかった．しかしながら，自ら問題意識をもって取り組む者もあるので，彼らには組（組太刀）を教え，竹刀を好む者には竹刀打ちを教えた．なかには両方を学ぶものもあった<sup>13</sup>．

このことから形稽古のみを行う者，竹刀による稽古のみを行う者，両方を行う者がいることがわかり，実践者の価値観に即

---

<sup>12</sup> 中西子正（1822）「一刀流兵法鞆袍起源考」．〔渡辺一郎（1979）『武道の名著』，東京コピー出版，p.158〕

<sup>13</sup> 大保木輝雄（2017）『武道』，2月号，日本武道館，p.117.

して行う稽古の仕方が窺われる。一方、打たれまい打とうと専心して大汗を流すという竹刀打ち込み稽古の意味については木刀による形式的教授や師弟の個人的関係から脱し、人々をして安全な自分の道であり、大汗を流すほど楽しいものであった<sup>14</sup>と考察されている。さらに、このことが武士階級のみならず町人や百姓のような新しい担い手を登場させた<sup>15</sup>という。

### 3. 竹刀打ち込み稽古の発展

1800年代に入ると剣術において流派間の交流や情報交換はさらに進み、竹刀や剣術道具の製作法も進化し、弘化期(1845-1848)頃までには今日の剣道に相当する技術体系が作られていった<sup>16</sup>。例えば、江戸の師範をことごとく打ち破った大石進は長竹刀を作成し、剣術道具を改良した<sup>17</sup>。大石の長身から繰り出される諸手突きや左片手突き、胴技は面技と小手技を中心とする江戸の剣術家の弱点をつく結果となった<sup>18</sup>。

現在の踏み込み動作や引き揚げに相当する技術、勝敗に関わる一本という言葉が確認されるのも1800年代である。長尾は踏み込み動作について、武藤為吉(神陰流)が師の加藤田平八郎に宛てた書簡(1849)や千葉周作の門で学んだ高坂昌孝(北辰一刀流)の著作(1884)から“飛び込み”、“踏み込み”という表現は走り込むようなものではなく、あくまで“一足”で踏み込むもので、「のちの踏み込み足に近い技術と考えられる」<sup>19</sup>

---

<sup>14</sup> 大塚忠義(1995)『日本剣道の歴史』, 窓社, p.11.

<sup>15</sup> 同上, p.11.

<sup>16</sup> 長尾進(2018)『武道』, 11月号, 日本武道館, p.38.

<sup>17</sup> 同上, p.45.

<sup>18</sup> 中村民雄(1994)『剣道辞典:技術と文化の歴史』, 島津書房, p.100.

<sup>19</sup> 長尾進(1996)「近世・近代における剣術・剣道の変質過程に関



とし、1800年代以降、「剣術がより安全性を高めたことによってはじめて出現してきた技術」<sup>20</sup>と位置づけている。一方、引き揚げにおいても、幕末からそうした現象はある<sup>21</sup>。勝敗に関わる一本という言葉は、勝小吉による次のような文脈で登場する。勝小吉とは勝海舟の父であり、忠也派一刀流の鵜殿甚左衛門に剣術を習った人物である。

或日、少し気ぶんがいゝから、寒稽古に出たら、小林も来ていて、「俺様、一本願ひたい」とぬかすから「見る通り、久しく不快でいま月代もすらず居る位だが、せつ角の事だから一ぼん遣ひましやう」といつて遣つたが、先忒本つゞけて勝つたら、小林が組付いたから、腰車に掛てなげてやるとあおのけにたおれたから、腹を足にておさへて、のどをつゐてやつた<sup>22</sup>（勝小吉、1843）

まさに小吉の腕っぷしの強さが窺われる文脈である。この文脈では、小吉と小林（中也派一刀流・近藤弥之助の内弟子）が勝負する様子が描かれており、小吉が小林に対して有効な技を二本続けて取得し、勝利している。

1850年代以降、ペリー来航（1853）に始まる欧米世界からの外圧と百姓一揆が激化する。そうした状況下で幕府は戦力強化をはかるために講武所を設立した。

---

する研究：面技の重視と技術の変容」、明治大学人文科学研究所紀要，p.5.

<sup>20</sup> 同上，p.6.

<sup>21</sup> 中村民雄（1994）『剣道辞典：技術と文化の歴史』，島津書房，p.88.

<sup>22</sup> 勝子吉（1843）『夢酔独言』，p.66.（勝部真長編，2015，『夢酔独言』，講談社）

講武所については、1) “講武所規則”、“掟”をどう捉えるか、2) 剣術の実用性をどう捉えていたのか、3) 講武所の組織がもたらしたものは何かという三つの観点から次のようにまとめられている<sup>23</sup>。

1) について。①実戦を重視し、“形”ではなく“試合”のみに限定したことによって“流派”の存在自体を否定することになった。②竹刀の長さを“三尺八寸”に限定したのは、当時流行していた長竹刀の防止策によって実戦からの乖離を防いだ。③小川町に移転した後は、武士としての道(武道)が強調され、修養的な旧来武術の復興が意図され、国内における内憂対策のための武力組織として企図されていた。

2) について。①講武所が行った試合は武士の体力、胆力を強化する体錬的效果をもたらす。②講武所専門職の人材が、將軍警護という“実用”に適するように組織化され、“奥詰”職が新設され、講武所の精鋭集団(60名)が登用された。

3) について。①競争原理を徹底したことにより、人事も実力による人材登用が進行した。②武術上覧が御目見以上の旗本だけでなく格式の低い御家人にも聞かれることにより、將軍や幕閣との距離が近くなり、武術による人材登用の道が聞かれた。③剣槍柔の専門家集団が配置された遊撃隊の多くは幕府の崩壊により武術を断念せざるをえない境遇となり、明治以降の武術界に姿をみせることはなく、多くの人材を失い、武術文化の水準維持が下降した。④竹刀の長さを統一し、試合を人に見られるものとして演出したことなどは、明治以降の剣道の近代化に貢献した。

---

<sup>23</sup> 大保木輝雄(2016)『武道』、6月号、日本武道館、p.86.

こうした状況で撃剣が普及し、明治期以降の剣道に向かう契機となった。

## 第二節 旧制高校と校友会雑誌

### 1. 旧制高校の誕生

明治維新の文明化政策によって一時下火となった撃剣（剣道）は、1877（明治 10）年の西南戦争終結後に実戦的実用性が再評価されると警察に導入された。撃剣の普及を担ったもう一つの要因が 1886（明治 19）年の中学校令によって発足した旧制高等中学校に入学した学生たちであった。この年から翌年にかけて第一高等中学校以下、第二、第三、山口、第四、第五、鹿児島を冠する七つの高等中学校が設立され、1894（明治 27）年に高等学校令が公布されるとほぼ全てが高等学校と改称した。その後高等学校は全国各地に設置されていき昭和初年には 28 校の設置を見た<sup>24</sup>。旧制高校ではスポーツが盛んであり、後に一高の事例でみるように撃剣のクラブ活動も学校開設後まもなくして行われたと思われる。撃剣及び柔道など武道の全国的統括団体となる大日本武徳会（以下、武徳会）が設立されたのは 1895（明治 28）年であり旧制高校は武徳会などと影響し合って剣道史を作っていくことになる。明治後半になると、中学校体育教科として“柔術”，“撃剣”が採用され、学校での撃剣普及の度合いが強くなっていく。なお本論文では原則として高等中学校と高等学校の時代を併せて旧制高校とし、ナンバーの冠を付す場合には第一高等学校を一高という様に各校を略記

---

<sup>24</sup> 秦郁彦（2003）『旧制高校物語』，文春新書，p. 86.

した。

1873（明治6）年，ベースボール（野球）が一高の前身である開成学校に紹介されるとたちまち大流行となった<sup>25</sup>ようにボートレースなどの対抗競技形式のスポーツが隆盛となった。撃剣の最初の対抗戦は，1901（明治34）年の，三高（京都）と四高（金沢）との試合である。一高（東京）は二年後に二高（宮城）との有志試合を行っている。

近代競技スポーツは，競技規則によって競技する対戦者双方に競技の公平性と勝敗決定の客観性を保証することによって対戦者を真剣にさせて勝敗を競わせる。勝敗に対する真剣さは対抗試合<sup>26</sup>において昂進されるので学生を刺激し応援にかりたてた<sup>27</sup>。しかし撃剣はその出自を刀剣による斬り合いに置くため刀剣や実戦の思想，礼式・作法などの伝統的な文化的属性があり，競技スポーツとは大きな差があった。一方，明治期の剣道界の動向において，1880（明治13）年に山岡鉄舟<sup>28</sup>が春風館を興すと，その精神修養道的な色彩を帯びた指導は著名な剣道家に影響を与えて多くの門人を生んだ。無刀流は剣道に

---

<sup>25</sup> 国民新聞運動部編著（2000）『日本野球史』，ミュージアム図書，p.4.（同名原著，1929年）

<sup>26</sup> 日本国語大辞典によると試合（仕合）と競技は同意である。本稿では原則として競技をもちいたが資料引用で仕合が用いられている場面では仕合を使用するなど場面に応じて使い分けた。

<https://japanknowledge.com/library/>（2019.6.7アクセス）

<sup>27</sup> 明治23年の第一高等中学校対白金クラブの試合の六回に柔道部の一団が現れ，グラウンド脇に陣取って怒声罵声をあげている。[国民新聞運動部編著（2000）『日本野球史』，ミュージアム図書，p.82.]

<sup>28</sup> 1880（明治13）年に山岡鉄舟は無刀流の開祖となり，1884（明治17）年に小野業雄から一刀流を学び一刀正伝無刀流を開いた。

よる人間形成を志向しており，その武士的思想とともに一高を中心に旧制高校の剣道のみならず戦後の剣道理論にまで影響を与えた<sup>29</sup>といわれる．資料については一高の「校友会」<sup>30</sup>と三高の「嶽水會」がそれぞれ独自に発行した『校友会雑誌』と『嶽水會雑誌』を検討した．併せて両校それぞれの対戦相手であった二高，四高，五高，六高の関係資料，また特に四高の対戦高であった富山高等学校 OB の資料を検討した．以下では本節が主に用いる資料の書誌的情報を説明する．

## 2. 校友会雑誌の書誌的情報

以下，表 1 は一高及び三高における雑誌の書誌的情報である．左には一高を，右には三高を示した．

表 1 一高及び三高における雑誌の書誌的情報

紹介項目 / 高校名	一高	三高
校友会の発足	1890（明治 23）年	1894（明治 27）年
発行期間と号数	○校友会雑誌：1890（明治 23）年 1 号－1940（昭和 15）年 371 号 ○護国会雑誌（改題）：1941（昭和 16）年 1 号－1944（昭和 19）年 7 号	○嶽水會雑誌：1899（明治 32）1 号－1940（昭和 15）年 134 号 ○1 ヶ月あるいは 3 ヶ月に一度発行

<sup>29</sup> 長尾進（2019）『武道』，7 月号，pp. 38-44，2019.

<sup>30</sup> 校友会は普通名詞であるが一高はこの名称を固有名詞として使用した．

	○1ヶ月あるいは3ヶ月に一度発行	
判型	縦 22 cm A5(縦 21 cm)	縦 21 cm (A5)
構成	内容は主に「論説」,「思潮」,「創作」,「雑録」,「文苑」,「批評」,「雑報」,「部報」「附録」等で構成.	左にほぼ同じ.
発行団体	第一高等学校校友会	第三高等学校嶽水會
一号あたりの 頁数	一号あたり, およそ 100 から 120 頁	左に同じ.
雑誌の役割	○自校の考え方や活動 状況を学校内外に示す 媒体.	左に同じ.

項目ごとに一高と三高を比較すれば,発行期間は一高の方が三高よりも9年早く発行し,4年長く刊行している.号数において一高の雑誌は合計378号あり,三高(134号)の約3倍である.判型,構成は両校ともにほぼ同じである.

一高は母校の雑誌を,「我同窓が平素懐抱せる思想言行」を反映する「寫眞」<sup>31</sup>であり,「我校現在の位地」や「校風」を知るための「媒介者」<sup>32</sup>と位置づけている.

同様に三高は母校の雑誌を,「盛んに其活達なる抱負を呼號し,尚進んで其學餘の研鑽を公にすべき唯一の貴重なる雑誌」

<sup>31</sup> 鐵笛劍俠(1895)『校友会雑誌』,47号,p.49.

<sup>32</sup> 臨南子(1895)『校友会雑誌』,51号,p.66.

と位置づけている。加えて、三高では「第一高等中學校ノ校友會雜誌ト，東西對峙相迫スル」，三高の雑誌は「天下に公示せるものなれ。苟も夫れ一高等學校の機關誌なり」<sup>33</sup>と一高を意識して編集，発行している。このことは三高の判型や構成が一高とほぼ同じことから窺える。

### 3. 校友会雑誌における武道関係記事の整理

一高の武道系の校友会には、「撃剣部」,「柔道部」,「弓術部」があり，三高も同様である。以下の表2は，一高と三高における武道関係記事の情報である。なお，両雑誌における武道関係記事は必ずしも毎回，雑誌に記載されていない。

表2 一高及び三高における武道関係記事の情報

書誌情報/高校	一高	三高
掲載期間	○「撃剣部」…1891(明治24)年～1926(昭和元年)年 ○「柔道部」…1891(明治24)年～1924(大正13)年 ○「弓術部」…1891(明治24)～1923年(大正12)年	○「撃剣部」…1899(明治32)年～1920(大正9)年 ○「柔道部」…1899(明治32)年～1932(昭和7)年 ○「弓術部」…1905(明治38)年～1930(昭和5)年
掲載回数	○「撃剣部」…74回	○「撃剣部」…30回

<sup>33</sup> 南海(1902)嶽水會雜誌, 15号, p.90.

	<ul style="list-style-type: none"> <li>○「柔道部」…113回</li> <li>○「弓術部」…90回</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○「柔道部」…31回</li> <li>○「弓術部」…18回</li> </ul>
主な構成	<ul style="list-style-type: none"> <li>○「～部報」,「～大会」,「～部寒稽古」というタイトルで構成.</li> <li>○主に試合の実施,結果と考え方.</li> </ul>	左に同じ.
武道系部活動の掲載状況	雑誌に武道系の部活動が掲載されはじめてから,ほとんどが巻末の「雑報」あるいは「部報」の中で掲載されている.	左に同じ.
主な変化	<ul style="list-style-type: none"> <li>○「撃剣部」は「剣道部」と途中で名称を変更することなく,最後の記事が掲載される1926(昭和元)年まで一貫している.</li> <li>○「弓術部」は「弓道部」と名称を変更することなく,最後の記事が掲載される1923(大正12)年まで一貫している.</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○1899(明治32)年から1900(明治33)年まで,撃剣部と柔道部は「撃剣柔道部」として活動していたが,1901(明治34)年に分離.</li> <li>○1911(明治44)年以降は「撃剣部」から「剣道部」と名称を改めている.</li> <li>○1921(大正10)年以降は,「弓術部」は名称を「弓道部」と変更.</li> </ul>



まず、構成と掲載位置についてである。主な構成は両校ともに「～部報」、「～大会」、「～部寒稽古」というタイトルで掲載され、その中身は部の活動状況と考え方を記述している。また、掲載回数では両校ともに「柔道部」が「剣道部」や「弓術部」に比べて多く、掲載位置はほぼ巻末の「雑報」あるいは「部報」の中で掲載している。

次に記事タイトルの変化についてである。一高では「撃剣部」と「柔道部」は最初から独立している。一方、三高では雑誌の発行当初、「撃剣柔道部」(1901年に分離)として活動しており、ひとつの校友会として確立していなかった。記事タイトルにおいて両校では最初から「柔道部」を用いている。これは1882(明治15)年に講道館柔道が創設され、数年後に古流柔術を席卷し、急速に柔術界を柔道界に塗り替えたことによる。一方、一高の「撃剣部」と「弓術部」は名称を改めていない。一高の部史が記載された『向陵誌』(1930, 1984)によると、同校は1926(昭和元)年以降も「撃剣部」、「弓術部」のままであった。対して三高では「撃剣部」が1911(明治44)年に、「弓術部」が1921(大正10)年にそれぞれ「剣道部」と「弓道部」に変更している。次に、「撃剣」、「剣術」から「剣道」への移行について木下は、戦前の著書、団体名、公的文書等の検討からその始まりを「明治40年頃」<sup>34</sup>(木下, 2005)と見ている。武術から武道への名称変更は、1919(大正8)年、西久保弘道が武徳会会長、武術専門学校学校長となると武徳会内の「柔術・剣

---

<sup>34</sup> 木下秀明(2005)「“撃剣”“剣術”から“剣道”への移行過程に関する検討:『文部省第一回撃剣講習録』の分析」, 体育学研究 50, p. 260.

術・弓術」を「柔道・剣道・弓道」へ、同校の「武術」を「武道」<sup>35</sup>へと変更されたと指摘し、中嶋が詳細に検討した<sup>36</sup>ように、1919（大正8）年である。

以上から、両校の「柔道部」という名称の使用、三高の「剣道部」（1911）、「弓道部」（1921）への名称変更は当時の状況にそったものであり各校の内情による変更ではなかったといえる。一方、一高の「撃剣部」、「弓術部」という名称は当時の名称変更の状況とは対照的であったことがわかる。

---

<sup>35</sup> 中村民雄（1994）『剣道辞典：技術と文化の歴史』、島津書房、p. 14.

<sup>36</sup> 中嶋哲也（2017）近代日本の武道論、国書刊行会、pp. 140-164.

### 第三節 旧制高校の校風：武士的精神・指導者

#### 1. 一高

1886（明治 19）年，熾烈な競争に勝ち抜いて入学してきた一高の学生たちはその背後に畏敬のまなざしを感じ，矜持の中で生きることが出来る眩しい存在であった．欧化主義が基調の時代に，彼らには人物のゆとりと自由，自重を養成する人格教育が施された<sup>37</sup>．しかし全寮制の生活下に学生たちを支配していた雰囲気は，剛健・質実，国家主義と武士的精神が結びついて“鉄拳”や“柔術”，“日本魂”と等しいものとしてイメージ化される一高魂であった<sup>38</sup>．日本のスポーツで最初の対抗試合は立教大学対工部大学校（明治 6 年開校，東京大学の前身の一つ）の間で行われたベースボールの試合といわれる．工部大学校の学生らは，立教は毛唐の大学なので，自分らの有利な撃剣や柔道ではなく，彼らの得意とする遊戯であるベースボールの試合を選んだ．またそうする内に工部大学のために俺達は立つ，いや「立たねばならぬ．学校のためだ」<sup>39</sup>と憤激の声が彼らを支配したという．主君のため，お国のために身命を惜しまず戦う武士の剛勇・勇猛と同質の精神性が対抗試合に臨む若者達を支配した武士的精神であったことがわかる．この精神を発揮できる第一の運動はこの時代当然武士の生業としての武芸に相当する撃剣や柔術（柔道）であった．1899（明治 32）年の

---

<sup>37</sup> 竹内洋（1999）『学歴貴族の栄光と挫折』，中央公論新社，p. 36 及び p. 77.

<sup>38</sup> 同上，pp. 214-216.

<sup>39</sup> 国民新聞運動部編著（2000）『日本野球史』，ミュージアム図書，pp. 28-29.

資料には、一高学生自ら、「勤儉を緯とし尚武を経として織りなせる校風は實に吾人の先輩が大に與りて力を致せし所に非ずや、校風は即ち我部風なり」<sup>40</sup>とし、これによって「文弱」をふせぎ、「士氣の萎靡」をしりぞけ、「廉恥」の心を養ふ「武士」<sup>41</sup>的精神を育てることを強調している。こうした雰囲気は明治20年代後半以降の「明治武士道」<sup>42</sup>の流行の波に乗って一高に受け継がれて同30年代半ばまで支配していたが、この頃から運動部を中心とする学生文化が「武弊の害」<sup>43</sup>として批判にさらされるようになる。

竹内は明治20年代の一高魂を国家主義と武士的精神の結合と性格づけ<sup>44</sup>、そうした学生の思想傾向は、1906（明治39）年に新渡戸稲造が校長に就任すると西洋文化を中核にした教養主義へと転換しはじめる<sup>45</sup>と校風の変質を示唆している。しかしこうした校風の変質の影響は必ずしも一高剣道部に及んでいない。1907（明治43）年、一高の校友会記事は、尚武・高潔を求めつつも尊大な学生たちの精神性を次のように記している。一高剣道部は、「劔道を以て只一の遊興の末技となすものは、共に談ずるに足らず、劔道を以て従らに腕力を養ふとなすものは、無聲堂裡に入るを要せず」、我らが求める人間は、「輕佻情弱の俗潮を眼下に睥睨して、内は尚武の氣風を養ひ、外は嚴健の身體を鍛へんと欲する者」<sup>46</sup>たちである。

---

<sup>40</sup> 撃劍部員（1899）『校友会雑誌』、88号、p.59.

<sup>41</sup> 撃劍部員（1899）『校友会雑誌』、88号、p.44.

<sup>42</sup> 菅野覚明（2004）『武士道の逆襲』、講談社現代新書、p.260.

<sup>43</sup> 竹内洋（1999）『学歴貴族の栄光と挫折』、中央公論新社、p.217.

<sup>44</sup> 同上、p.214.

<sup>45</sup> 同上、p.233.

<sup>46</sup> 原人生（1910）『校友会雑誌』、201号、p.44.

## 2. 三高

三高の校風に関しては個人主義な自由な雰囲気や「反中央・非体制的気質」<sup>47</sup>が指摘されてきた。竹内によると、対抗試合などで三高を訪れた他校の生徒は、三高について「個人ベースで独創的な仕事をする人にはむいているが、組織人や組織の指導者にはむいていない」<sup>48</sup>とんでいたという。三高が設置された明治20年代から他の旧制高校に比べて三高の平民の割合は最も多く、一高の士族率60パーセントに対して三高は37パーセントであったといい、明治時代の京都は「新聞配達や牛乳配達がいつ来るかはっきりしない」、「仕事を力一杯まじめにしない」<sup>49</sup>町風があったというように一高と異なる校風が醸成されていたと思われる。こうした三高であるが、一高が東京帝国大学主催高等学校・専門学校剣道大会（以下、東京帝大高専剣道大会）において最初の優勝をする1925（大正14）年まで、京都帝国大学主催高等学校・専門学校剣道大会（以下、京都帝大高専剣道大会）において、1914、1916、1917、1925年と4回にわたって決勝に進出し、1914年、1925年の2回優勝した実績をもつ関西における強豪校であった。

1899（明治32）年の三高の『嶽水會雑誌』第一号によると、「校友会規則」（「嶽水會規則」－筆者）の活動の目的には、「天武諸般ノ藝術ニ依リ精神ヲ修養シ智力体力ヲ鍊磨シ以テ校風ヲ振作」<sup>50</sup>とあり、撃剣をはじめとする武術や諸種の運動・スポーツによる徳育（精神の修養）と知育、体育の三育主義によ

<sup>47</sup> 秦邦彦（2003）『旧制高校物語』、文藝春秋、pp.120-121.

<sup>48</sup> 竹内洋（1999）『学歴貴族の栄光と挫折』、中央公論新社、p.139.

<sup>49</sup> 同上、pp.138-139.

<sup>50</sup> 不詳（1899）『嶽水會雑誌』、1号、p.89.

るバランスのとれた目標が掲げられている。1914(大正3)年、六高は三高との対抗試合のために遠征した。試合の前に六高の練習態度を見たある三高生は、「如何に武士的精神—正義廉恥—に缺乏せるか」<sup>51</sup>と六高を批判しており、一高同様の正々堂々の倫理的態度，“武士的精神”が広く行きわたっていたことがわかる。

以上のような旧制高校の武士的精神(公正, 正義, 廉恥, 勇猛などを含む)は, 彼らの求める勝利が“公明正大”であることの追求において, 一定の影響を与えたと考えられる。

### 3. 指導者・師範の剣道観

表3 一高及び三高の剣道師範

校名	師範名	生没年	就任期間	古流経歴ほか
一高	根岸信五郎	1844-1913	1891-1903	神道無念流
一高	得能関四郎	1903-1908	1842-1908	直心影流
一高	檜山義質	1864-1940	1908-?	北辰一刀流
一高	中山博道	1872-1958	1908-?	神道無念流
一高	佐々木保蔵	1881-1938	1917-?	不詳
三高	香川善治郎	1899-1908?	1848-1921	無刀流

<sup>51</sup> 勝矢 (1914) 『嶽水會雑誌』, 58号, p.58.

三高	内藤高治	1862-1929?	1908-1929?	北辰一刀流
----	------	------------	------------	-------

\*表の作成の典拠資料は以下による。根岸は『校友会雑誌』（10号，p. 33）・同雑誌（131号，p. 58），得能は同雑誌（131号，p. 58）・同雑誌（175号，p. 97），檜山は同雑誌（175号，p. 97），中山博道は同雑誌（175号・p. 97），佐々木は『先輩佐々木保蔵氏追悼号』（1941，p. 87），香川は『嶽水會雑誌』（1号，p. 80），内藤は同雑誌（40号，p. 91）に拠った。

一高剣道部（創部明治22年）の礎を築いた人物は部長の塩谷時敏（1855-1925）と師範の根岸信五郎とされる<sup>52</sup>。塩谷は明治・大正時代の漢学者である。1889（明治22）年より一高教授となり大正9年まで勤めた<sup>53</sup>。教育の面では二十数年間漢文を講義し，その一方で北辰一刀流小栗篤（徳）三郎の門弟でもあった<sup>54</sup>。1890（明治23）年に一高に「撃剣部」（以下，剣道部）ができると初代部長として1920（大正9）年まで尽力した。後に見るように塩谷は一高の剣道に明確な方向性を示しており，剣道に対して高い見識を有していた。一高OBは次のように塩谷の剣道を語っており，真剣の観念に支えられた豪快な剣道を実践する姿が読み取れる。

青山先生の剣であるが，先生はその典型ともいふべきで，

<sup>52</sup> 矢野一郎（1941）『先輩佐々木保蔵氏追悼号』，一高弥生会，p. 96.

<sup>53</sup> 20世紀日本人名事典。https://japanknowledge.com/library/（2019/07/12アクセス）。なお、塩谷時敏の息子である温は大正末期から東京帝大の剣道部長を務めており親子で一高及び東京帝大に関わっていた。

<sup>54</sup> 今井彦三郎（1940）『礫荘雑話』，菁莪書院，pp. 4-5.

堂々たる體軀と不撓不屈の氣魄を以て、猛烈なる氣合と共に非常なる勢で、竹刀を大上段に振りかぶつて敵手を打込んでくる。その物凄さは今でもゾツとする位で、然も毎に正面を切ってくる正攻法である。又、敵手に打たれる場合でも、敵手の竹刀の強弱によつては、わざと自分の面で受けて、そんな事で俺の面は斬れないぞと、怒鳴りつけるので、私等は先生の劍道は“面をもつて受ける”劍だと、陰口までたゝいたものである<sup>55</sup>。

塩谷は「撃劍ノ利ハ 心膽ヲ鍊リ 肢体ヲ健ニシ 悪衣麤食ヲ厭ハサルニ在リ」<sup>56</sup>と、劍道の利点を心身の成長と質実の氣風の要請に求めている。その二十数年後の1913（大正2）年、塩谷は述べる。

吾人が平生劍を習ふ時には敵とする所は纔に一人であるけれども一旦緩急の際は四方八方から敵を受けても猶ほ之れに處して適當なる處置に誤らない 仲々以てたゞ一人の敵と言ふ譯には行かぬ、且つ劍を學ぶ者の微塵油斷をしない所の精神は獨り敵手と相對して相競ふ時のみではなく 寤寐にも造次顛沛にも劍士として武士として相離る可らざるものである、即ちこの精神が心膽を練磨して一旦緩急ある時に用をなすものである<sup>57</sup>。

塩谷が求めたのは1890（明治23）年發布の教育勅語に述べ

---

<sup>55</sup> 吉原良三（1940）『礫莊雜話』，菁莪書院，p.195.

<sup>56</sup> 不詳（1891）『校友會雜誌』，10号，p.40.

<sup>57</sup> 鹽谷時敏（1913）『校友會雜誌』，226号，p.124.



る戦争（一旦緩急ある時）における臣民の覚悟（報国心）である。塩谷は心胆錬磨する日本の武士的精神を継承していこうとしているのである。

根岸は士族であり神道無念流の第六代継承者であった。根岸の師範就任は1891（明治24）年であり創部二年後から十数年にわたって指導した。1911（明治44）年の中学校令施行規則の一部改正に伴って行われた東京高等師範学校における第1回目の講習会（1911年、期間は5週間）では、校長の嘉納治五郎に請われて剣道理論を担当している<sup>58</sup>。また根岸は高野佐三郎、内藤高治とともに大日本帝国剣道形調査委員（全国から25名選出）の主査五名の一人に選ばれ、同形制定に尽力している<sup>59</sup>。根岸以後の師範は、得能関四郎（1903-1908師範・直心影流・警視庁剣術世話掛）、檜山義質（1908-?師範・北辰一刀流、警視庁剣術世話掛）、中山博道（1908-?師範・神道無念流・根岸の高弟）、佐々木保蔵（1917-?師範・流名不詳・一高卒・石田和外の高校時代の恩師）である<sup>60</sup>。

一方1899（明治32）年創部の三高で師範の任に当たった人物は香川善治郎<sup>61</sup>（1848-1921師範・無刀流）であった。香川は丸亀藩剣術指南の直清流矢野市之進から目録を授けられた、関西各地を渡り歩いた後、東京の榊原健吉道場で修行し、学習

---

<sup>58</sup> 中村民雄（1994）『剣道辞典 技術と文化の歴史』、島津書房、p.224.

<sup>59</sup> 同上、p.364.

<sup>60</sup> 根岸は『校友会雑誌』（10号、p.33、1891）、得能は同雑誌（同雑誌、131号、p.58、1903）、檜山は同雑誌（同雑誌、175号、p.97、1908）、中山は同雑誌（同雑誌、175号、p.97、1908）、佐々木は『先輩佐々木保蔵氏追悼号』（1941、p.87）によった。

<sup>61</sup> 不詳（1899）『嶽水會雑誌』、1号、p.80.

院の撃剣部で指南した。この頃無刀流の山岡鉄舟と試合をして敗れ、弟子入りして厳しい修行に耐え、やがて高弟となった。1895年（明治28年）、大日本武徳会から精錬証を授与された達人であった<sup>62</sup>。香川の後を継いだのは内藤高治<sup>63</sup>（1908-1929 師範・北辰一刀流）である。内藤は師範就任前には東京で警視庁世話掛、早稲田大学師範などの要職に就いていたが、武徳会常議員・楠正位の懇請によって武徳会に奉職した<sup>64</sup>。内藤は根岸と同様に大日本帝国剣道形調査委員の主査に選ばれて同形制定に尽力している<sup>65</sup>。武徳会、京都帝大、三高の師範を死去する1929（昭和4）年まで兼任しており<sup>66</sup>、広く剣道界の重鎮であった。

### （1）形稽古と刃筋の重要性

根岸は、竹刀を「眞劍ニ摸製シテ代用スル」とし剣道を「刀劔の使用法を研究練磨する」<sup>67</sup>ものとしている。こうした根岸の技術観は1914（大正3）年の次の試合批判に表れる。今の試合には「平打峯打」が多く見られるが、それは「刀と云ふ實物を以て修行して居らぬから唯々竹刀とも刀とも思はず棒切れを持つ」<sup>68</sup>と考へて試合を行っているからである。

---

<sup>62</sup> 森川竜一（1983）『無刀流秘録 香川善次郎伝』、香川善次郎伝刊行会、pp. 93-104.

<sup>63</sup> 霞月（1908）『嶽水會雑誌』、40号、p. 91.

<sup>64</sup> 高岡謙治（1980）『剣聖内藤高治』、体育とスポーツ出版、pp. 19-20.

<sup>65</sup> 大保木輝雄（2017）『武道』、1月号、日本武道館、pp. 82-83.

<sup>66</sup> 宮崎茂三郎（1980）『剣聖内藤高治』、体育とスポーツ出版、p. 133.

<sup>67</sup> 根岸信五郎（1884）『撃剣指南』、東京金玉出版、p. 15.

<sup>68</sup> 根岸信五郎（1914）『剣道講和』、有信館本部、p. 144.（中村民雄

また根岸は刃筋に相当する太刀筋という言葉を用いてその防止策としての形の重要性を語る。「形と云ふものは剣術の基本で、是が太刀筋、姿勢構ひ等の厳格なる教へでありますから、對抗試合を行ふ前に於て充分に練習して一手一足も忽せにせざる様留意せしめて置いたならば、對抗試合に際して太刀筋姿勢構ひ等も備はり、打方に於ても無理な打方や平打ちなどの無い様になる」<sup>69</sup>と。一方内藤もまた刃筋を重視する剣道観をもっており、「血も出ないやうな撃ち方、突き方」や「片手でヒョイと突出す」<sup>70</sup>ことを「死生の機を寸間に於て決する」<sup>71</sup>という点から批判し、「肉を切らして骨を切る」<sup>72</sup>ような打突を目指している。刃筋を学ぶための稽古について内藤は「刀剣の刃筋をも調ぶるの必要ありて是は是非形に依らざる可からず、申す迄もなく剣の使用法は斬ると突くとの二つなるを以て、常の稽古にも能く此の刃筋を大切なりとす、初学の時に此の刃筋の事を心得て習学すべし」<sup>73</sup>と形稽古と刃筋の重要性を述べている。ここではこのような剣道観を一高、三高の学生たちがしばしば聞かされていたことを確認しておきたい。

---

編，2003，『近代剣道書選集』，第五卷所収，本の友社）。

<sup>69</sup> 同上，p. 158.

<sup>70</sup> 内藤高治（1910）『武徳会誌』，9号，雄松堂出版，p. 58。（新田満夫，1985，『武徳誌』復刻版，東京，雄松堂出版）

<sup>71</sup> 内藤高治（1906）『武徳誌』，7号，雄松堂出版，p. 61。（新田満夫，1985，『武徳誌』復刻版，東京，雄松堂出版）

<sup>72</sup> 内藤高治（1910）『武徳会誌』，9号，雄松堂出版，p. 58。（新田満夫，1985，『武徳会誌』復刻版，東京，雄松堂出版）

<sup>73</sup> 内藤高治（1907）『武徳誌』，7号，p. 62。（新田満夫，1985，『武徳誌』復刻版，東京，雄松堂出版）

## (2) 師範たちの勝敗観・倫理観

根岸は 1914 (大正 3) 年の試合を見て、「勝負に拘泥」すると「粗暴の言語動作」に陥る、あるいは「術の劣れる同志を軽蔑」<sup>74</sup>することに陥り、相手に対する礼節に欠けることになる。根岸の目は剣道家の品格に置かれていることがわかる。一方内藤は 1918 (大正 7) 年の試合を見て、「唯勝てばよいと思つて」学ぶと「刀法の刃筋等に於て誤り多く、その人の心事も自ら下劣の動作を生ずる」<sup>75</sup>と根岸と同様に品格を欠く点を批判する。内藤もまた竹刀打ち込み方式の剣道競技が刃筋の観点を無視した当てあいになる現象面と同時に、ただ当てることを求める心を品格の欠けるものと評価していることがわかる。また内藤は相手に勝って「我は何某に勝つた、彼は聞いてゐたより強くない」と思つたり、誰かに言いふらすことは「技術の進歩」<sup>76</sup>を遅くするというが、勝利への執着が内省を欠いて驕りを生みことの結果、技の進歩をも遅らせるとした。

このように根岸、内藤の勝敗観は稽古や試合での勝利という価値を第一義とせず、品格や日本刀の操作法に裏打ちされた真剣の觀念に剣道の価値を置いている点で一致していた。しかし彼らが学んだ北辰一刀流や神道無念流の基本的前提は竹刀で稽古・試合をすること<sup>77</sup>であり竹刀剣道を否定していない。彼ら自身も矛盾のなかでの指導に悩んだものと思われる。二高剣道部 0B の片山三郎は、1915 (大正 4) 年に、内藤の剣道につ

---

<sup>74</sup> 根岸信五郎 (1914) 『剣道講和』, 有信館本部, p. 148. (中村民雄編, 2003, 『近代剣道書選集』, 第五卷所収, 本の友社).

<sup>75</sup> 内藤高治 (1918) 『国民思潮』, 第 7 卷, 第 7 号, p. 24.

<sup>76</sup> 内藤高治 (1918) 『国民思潮』, 第 7 卷, 第 6 号, p. 24.

<sup>77</sup> 長尾進 (2003) 『剣道の歴史』, 全日本剣道連盟, p. 257.

いて記した以下の手紙を現役の二高剣道部に送っている。

内藤先生ともあるべき人が 中らざるに引き上げ 全く勝負をのみ争ふ如き様子に候ひしが 常には如何，武術學校の生徒には勝負を眼中に置かざるべきことを標榜致し居りながらかゝる醜態を演ずるに至りては 到底見るに堪えざる次第にて 斯道の爲に憤慨する者に候<sup>78</sup>。

二高 OB の片山は，内藤が平素の教えに反して勝負を争っているかに見えるその姿に内藤の言行不一致を見てとり憤慨している。

#### 第四節 学生剣道の勃興と対抗試合

##### 1. 校内試合と招待試合

1878（明治 11）年，慶応義塾は三田山上に剣道会を組織すると，翌 1879（明治 12）年，学習院は榊原鍵吉（直心陰流）を招聘し「剣道」<sup>79</sup>という科目を設けて授業を実施した。学生剣道の始まりである。一高では，1891（明治 24）年以前から校内のみの試合が行われており，資料ではそれ以降から他校を招聘した大会を開催するに至ったことが確認できる。学生剣道界における最初の対抗試合は招待形式で実施された。

1891（明治 24）年，一高は近郊の東京帝国大学（以下，東京

---

<sup>78</sup> 片山三郎（1915）『尚志会雑誌』，103号，p.144.

<sup>79</sup> 大保木輝雄（2002）『関東学生剣道連盟五十周年記念誌』，関東学生剣道連盟，pp.9.

帝大) や学習院, 国学院等を迎え, 「撃剣部大會」<sup>80</sup>を開催した。一高の招待試合は第 5 回から第 30 回まで 26 回確認できる。招待されたのは, 近隣の警察, 大学, 高校, 道場(例えば, 皇宮警察, 学習院, 有信館など)である。校友会雑誌によると第 6 回目から三本勝負, 一本勝負の表記が見られより詳しく大会結果が記述されるようになる<sup>81</sup>。これに対して三高の招待試合はわずかに 2 回である。第 1 回目は 1908 (明治 41) 年に開催され, 近隣の大学, 高校, 専門学校, 中学校が招待されて六十組の試合数が行われた<sup>82</sup>。第 2 回目は 1912 年 (大正元) 年に実施され, 組数は不詳であるが 20 校から約 40 名が招待された。この大会では前述した大学, 高校などに加えて武専も参加している<sup>83</sup>。また同大会では三本勝負, 一本勝負, 武徳会流, 居合の表記が見られる。

## 2. 対抗試合

明治 30 年代になると他県へ赴いて当該県の学校と団体戦形式の対抗試合が行われるようになる。関東では 1903 (明治 36) 年に一高と二高 (宮城) が対抗試合を行い<sup>84</sup>, 関西ではそれよりも 2 年早く三高と四高が対抗試合 (1901) を実施している<sup>85</sup>。このように学生剣道の対抗試合は, 校内のみの試合から近郊の学校を招聘した招待大会, さらに他県の学校との試合へと空間的な広がりを見せるのである。

---

<sup>80</sup> 不詳 (1891) 『校友会雑誌』, 3 号, p. 41.

<sup>81</sup> かと生 (1894) 『校友会雑誌』, 35 号, pp. 69-73.

<sup>82</sup> 霞月 (1908) 『嶽水會雑誌』, 40 号, p. 91.

<sup>83</sup> 松生・後生 (1912) 『嶽水會雑誌』, 50 号, p. 73.

<sup>84</sup> 不詳 (1904) 『校友会雑誌』, 137 号, pp. 87-101.

<sup>85</sup> 不詳 (1901) 『嶽水會雑誌』, 12 号, pp. 72-73.

表 4 一高及び三高の対抗試合，高専大会における試合の状況

年号	一高	三高
1901/明 34		四高と対抗戦（『嶽』9号，pp. 73-76）
1903/明 36	二高と対抗戦（『向』（1913），pp. 189-191）	
1904/明 37	二高と対抗戦（『校』135号，pp. 70-72）	
1907/明 40		四高と対抗戦（『嶽』37号，pp. 91-96）
1908/明 41		六高と対抗戦（『嶽』40号，pp. 87-90）
1912/大 1		○五高と対抗試合（『嶽』51号，p. 109） ○六高と対抗戦（『嶽』51号，pp. 108-114）
1913/大 2		第1回京都帝大主催高専剣道大会（『歴』p. 360）
1914/大 3		○六高と対抗戦（『嶽』58号，pp. 51-56） ○京都帝大主催高専剣道大会（優勝）（『歴』p. 360）
1923/大 12	二高と対抗戦（『校』292号・pp. 88-91）	
1924/大 13	第1回東京帝大高専剣	

	道大会 (『歴』 p. 360)	
1925/大 14	東京帝大高専剣道大会 (優勝) (『歴』 p. 360)	京都帝大高専剣道大会 (優勝) (『歴』 p. 360)
1926/昭 1	○二高と対抗戦 (『校』 306号・pp. 2-8)	
1929/昭 4		京都帝大高専剣道大会 (優勝) (『歴』 (2003), p. 330)

注：表中の文献名は以下のように略記した。『校友會雑誌』→『校』，『嶽水會雑誌』→『嶽』，『向陵誌』→『向』，『剣道の歴史』→『歴』。第二高等学校（仙台）→二高。第四高等学校（金沢）→四校，第六高等学校（岡山）→六高。東京帝大と京都帝大が実施した全国大会は第1回及び一高と三高が優勝した大会のみを記した。

一高の対抗試合は4回で，対戦相手はすべて二高である。二高剣道部（当時は撃剣部）の歴史は1893（明治26）年に遡る伝統校である。一方，三高の対抗試合は6回で，対戦相手の内訳は，四高が2回，六高（岡山）が3回である。一高は二高とのみ試合している。その理由は不明だが，二高のみが挑戦したということである。つまり一高は意識の上で旧制高校の王者として挑戦される側であったと思われる。対抗戦が始まって十年未滿の明治時代の二高の記述（1908）をみると，二高は一高との「親睦」を深めるとともに，「模範的仕合を學行し以て吾が堂々たる高等学校生徒の態度を公表」<sup>86</sup>と記し，対抗意識の一端と自負心を示している。

<sup>86</sup> 準備委員（1908）『尚志會雑誌』，79号，p.2.



一方三高は四高，五高（熊本），六高と試合をしているが，一高同様にその立場は挑戦を受ける側であった．挑戦者の四高はその動機を，学生同士の「美しい交情」（一致団結）と「親睦」，「強健なる学風」<sup>87</sup>の養成にあった，また生徒に対抗試合という「清涼剤」<sup>88</sup>を与えてその活動を活発化させようとしたと記している．一方同時期の六高の資料には，「近頃 をこがましく井の蛙のそれならで 身の程知らざる義とは存じ候へども 御快諾の榮に接したく 一日千秋の思もて相待居り候」<sup>89</sup>と慇懃無礼と思えるような挑戦状を三高に発している．五高は京都帝大高専剣道大会において優勝数最多の最強高（五回）であった．五高の剣道部史によれば五高の対抗試合は1904（明治37）年に山口高校や七高との対戦から始まる<sup>90</sup>．対抗試合の目的は母校と自分たちの「面目」のために「勝つ」<sup>91</sup>ことであった．三高に五高が挑戦するのは1911（明治44）年のことであるがこれは「天下に覇を稱」<sup>92</sup>そうとする試みであった．殊勝な四高を除けば強い勝利主義の志向が窺われる．

---

<sup>87</sup> 河合良成（1907）『北辰会雑誌』，48号，pp.108-110.

<sup>88</sup> 河合良成（1907）『北辰会雑誌』，48号，p.108.

<sup>89</sup> 六陵子（1908）『校友会會誌』，19号，pp.98-99.

<sup>90</sup> 土井・正徳（1921）『龍南』，176号，pp.46-47.

<sup>91</sup> 土井・正徳（1921）『龍南』，176号，p.47.

<sup>92</sup> 土井・正徳（1921）『龍南』，176号，p.55.

### 3. 帝国大学主催高等学校・専門学校剣道大会

大正時代に入ると学生剣道の試合はさらに活発化し、1913（大正2）年に京都帝大高専剣道大会が開催された。最も歴史の古い学生による全国規模の大会であり剣道青年がその優勝を目標とする晴れ舞台であった。この大会を企画した大野熊雄（五高出身）は当時盛んであった警察官の剣道が、「馬鹿力の上、技術がないので、肘など殴られると腫れ上」ってしまう、「警官と稽古すると、生傷の絶えた事はなかった」<sup>93</sup>ことから、「何とかして学生剣道を向上発展させたい」<sup>94</sup>という念願を以てこの大会を創設したという。

遅れること11年、1924（大正13）年には東京帝大高専剣道大会が実施された。同大会の試合形式は持久力と敢闘精神が要求される<sup>95</sup>一校十名の勝ち抜き方式（三本勝負）で行われた<sup>96</sup>。東京帝大高専剣道大会は、当初は国が設置した官立の高等学校のみの出場であったが第17大会から私立の参加も認められた<sup>97</sup>。旧制高校OBの小沢幸正は、旧制高校剣道の特色は“母校の名誉”のために、「対抗戦に勝たんがための剣道であり、そのために壮絶な猛練習を重ねて各人がそれぞれ独特の技を工夫していた」<sup>98</sup>という。1878（明治11）年、慶応義塾は三田山上に剣道会を組織すると、翌1879（明治12）年、学習院は

---

<sup>93</sup> 大野久磨夫（1968）『剣士一代』、日本武教社、p.47。（書には久磨夫とあるが、正式には熊雄である）

<sup>94</sup> 同上、p.48.

<sup>95</sup> 小沢幸正（1978）「旧制高校剣道と旧制富山高校剣道」、『旧制高校史研究』、16号、p.55.

<sup>96</sup> 吉村哲夫（2003）『剣道の歴史』、全日本剣道連盟、pp.328-329.

<sup>97</sup> 吉村哲夫（2003）『剣道の歴史』、pp.328-329.

<sup>98</sup> 小沢幸正（1978）「旧制高校剣道と旧制富山高校剣道」、『旧制高校史研究』、16号、p.53.

榊原鍵吉（直心陰流）を招聘し「剣道」<sup>99)</sup> という科目を設けて授業を実施した。学生剣道の始まりである。その後、明治 30 年代から他県の学校との対抗試合が実施されるようになる。

大正期に入ると臨時教育会議は官立高等学校を 10 校，実業専門学校を 17 校，専門学校を 2 校新設する計画を策定した<sup>100)</sup>。その結果運動部が新設され，武道及びスポーツ人口も増大した<sup>101)</sup> ため，運動部の対抗試合にはより多くの選手が参加し，対抗試合は多くの人々の関心事となっていく。

以上のような，学生剣道界の状況は昭和初期において次のように評されるようになる。「武徳会を根源とする所謂専門家と，一は京大主催の全国高、専試合を中心とする学生剣道」があり，武徳会は「剣道の道徳化を叫んで勝敗を度外視し、真の剣道（實 [ママ] いへば徳川時代に発達せる剣道）に到着せん」<sup>102)</sup> とし，学生剣道は「剣道の一般化を叫んで、之に聊か西洋のスポーツを加味し，全然勝敗を争はんとしている」<sup>103)</sup>。

---

<sup>99)</sup> 大保木輝雄（2002）関東学生剣道連盟五十周年記念誌，関東学生剣道連盟，p. 9.

<sup>100)</sup> 竹内洋（1999）学歴貴族の栄光と挫折，中央公論新社，pp. 112-113.

<sup>101)</sup> 中嶋哲也（2017）近代日本の武道論，国書刊行会，pp. 195-196.

<sup>102)</sup> 大野熊雄（1928）アサヒスポーツ，第 6 卷，第 1 号，朝日新聞社，p. 19.

<sup>103)</sup> 同上，p. 19.

## 第五節 学生たちの剣道観

### 1. 旧制高校における竹刀の捉え方

1896(明治 29)年, ある一高生は竹刀を非常に強く握ることなく刀剣で斬るつもりでにぎるべきと次のように記している。「竹刀を非常に強く握りつめて極力以て敵を打てば, 敵は爲めにひるむか如く見ゆれども, 剣術は決して人をなぐり殺すにあらずんば, 切る積りにて稽古せらるべきなり」<sup>104</sup>。また4年後の1900(明治 33)年には, 「一旦相對するや, 己が手にせるものは唯の竹束とは夢々思ふべきにあらず, 必ず眞劍に心得なくては適はず」<sup>105</sup>と, 竹刀を保持する際の精神が刀剣の觀念であることを示した。根岸の思想が学生に浸透していた様子が窺える。

三高も同様であったことは1902(明治 35)年の撃劍の試合で柔道部の選手が竹刀をつかんで相手選手を滅多打ちにした際の審判の発言に見える。「檢證の先生」は「竹刀をつかめば手は切れたりといふ, この時笑聲四方より起る」<sup>106</sup>とある。柔道部選手が竹刀のどこをつかんだのかは不詳だが, 指導者の意識が竹刀は刀剣であり剣道は当てあいではないとする点は一高の場合と同じであった。

それから十数年後の1914(大正 3)年, 三高は六高との對抗試合を行った。この試合では試合前日の練習態度と試合当日の審判に関する問題が起きている。三高は練習態度について, 「試合の前日我等(三高一筆者)の道具竹刀我等が命と恃む竹刀一

---

<sup>104</sup> 研刀生(1896)『校友會雜誌』, 57号, p.79.

<sup>105</sup> 部員(1900)『校友會雜誌』, 97号, p.80.

<sup>106</sup> 不詳(1902)『嶽水會雜誌』, 18号, p.133.

武士の魂一さへ無断に引き出され使はれて打捨てられてあつた」<sup>107</sup>と述べ竹刀の扱い方に対する六高の非礼を戒めている。

このように一高と三高の学生は基本的に竹刀を刀剣として扱う思想を原則としていた。このことは対戦校の二高<sup>108 109</sup>、四高<sup>110 111</sup>、五高<sup>112 113</sup>、六高<sup>114 115</sup>も例外ではなく、稽古や試合における刀剣に関する記述を資料から確認できるため、明治から大正期まで刀剣の観念を持っていたといえる。

## 2. 一高生の剣道観：勝利至上主義の否定

### (1) 勝利至上主義の否定

1891（明治24）年10月、一高は多くの招待者を招いて秋季大会を開催した。この大会を観戦した一高の学生は、勝ち負けに拘泥して騒ぎたてた一高生を、「主の勝つも客の負るも優然として肅然として威義を保つ亦善からすや」<sup>116</sup>と、招待者への礼節に欠けた自己中心的なものであること、また剣道の勝負が真剣勝負を前提にするという本来の意味を理解していないことを批判している。この8年後、一高は対外試合への参加を取りやめる決定を下す。ある部員が語ったその主旨は以下のよ

---

<sup>107</sup> 勝矢（1914）『嶽水會雜誌』，58号，p.54.

<sup>108</sup> 疎狂生（1900）尚志會雜誌，42号，pp.68-70，.

<sup>109</sup> 不詳（1913）尚志會雜誌，97号，pp.559-560.

<sup>110</sup> 金子要人（1912）北辰会雜誌，63号，pp.85-91.

<sup>111</sup> まつぎ（1916）北辰会雜誌，75号，pp.168-169.

<sup>112</sup> 不詳：龍南会雜誌（1904）106号，pp.66-69.

<sup>113</sup> 土井・正徳（1921）龍南，176号，p.72.

<sup>114</sup> 六陵子（1908）校友會會誌，19号，pp.101-104.

<sup>115</sup> 不詳（1914）校友會會誌，38号，p.122.

<sup>116</sup> 不詳（1891）『校友會雜誌』，10号，p.37.

うであった。「対外試合の様子をよく見ているとこれを止めた方がよいと思う。自分に十分に実力があればこそ挑戦を拒み得るが現状はそうではない。十分な準備もしないでにおいて挑戦を受けてこれを断るのは卑怯な心をもつからだ。我ら武陵<sup>117</sup> 健児のすべきことではない。刻苦精励して戦わずして勝ちうるよう準備せよ」<sup>118</sup> (筆者訳<sup>119</sup>)。記者は刻苦勉勵の稽古を通して孫子の兵法における最高の境地を得るまで準備すべきことを説く。このような論理で“対外試合をやめるべきだ”とする思想の背後には指導者の存在が窺える。つまり、塩谷や根岸の影響によって一高生は勝敗にこだわらない剣道の伝統を形成していったと推認される。

1902 (明治 35) 年当時の一高生は、剣術家が「小巧を弄して技術の末に走り」, 「未だ剣の心法を解せざる」<sup>120</sup> と次のように批判している。

現在剣客と称するものの多くは頑固で無知であり、どうしてもよい巧みさを弄んぶような技術の末に走って、勝つことのみ  
に精神を奪われている。彼らは技術を理解するが剣の心法は

---

<sup>117</sup> 「武陵」は東京・本郷の一高のあった向ヶ丘の漢語的美称。「武」は「武蔵野」あるいは「武道」の「武」でもある。 <http://www5f.biglobe.ne.jp/~takechan/S10P228harutoukai.html> (2019/07/06 アクセス)

<sup>118</sup> 撃劔部員 (1899) 『校友會雑誌』, 88号, p.56.

<sup>119</sup> 「(筆者訳)」のある引用箇所は比較的難解のため、読者の弁を考えて筆者の訳文を加えた。以下、必要に応じて行った。

<sup>120</sup> 狂劔生 (1902) 『校友會雑誌』, 120号, pp.61-62.

理解していない。わが剣道部は少なくとも彼ら剣客の亜流を脱して元気に打ち合い、勇気をもって戦い、礼儀を厳守し、真実を求め、級<sup>121</sup>の上下を問わず、先輩であるか後輩であるかを問題にせずに、一つ一つ剣の心法を悟得するように努めなくてはならない<sup>122</sup>。(筆者訳)

同様の記事は1906(明治39)年にも見える。

今迄にては撃剣の見世物等の悪習慣等残り居り、勝負に潔よからざる事等もありて實に慨嘆の至りなき。若し幸にしてかくして各學校の親睦を計ると共に撃剣に一定の統一を來し潔白なる仕合に我國本來の武術の面目を發揚するを得ば武道の發展期して待つべし<sup>123</sup>。

一高生が否定するのは、“勝負の念は常に其頭腦を去らず”という態度である。“剣の心法”をも解さないという評価は、塩谷が小栗から学んでいた一刀流の教え、恐、驚、惑、疑の四戒(四病)を知っていたと推察され、剣道家としての態度・心構えをいったと考えられる。

1910(明治43)年、一高は二高との対抗試合に勝利するが、その際の記事、「若し勝敗の數に捕らわれてそれ以上何者をも求むるなくんば、今日の光榮ある勝利も一時を飾る虚空の虹」

---

<sup>121</sup> 一高における剣道の階級は段の取得前に級を置いた。この級制度はいつ制定されたかは不明であるが、『校友會雜誌』では1896(明治29)年から確認できる(不詳, 1896『校友會雜誌』, 55号, p.28)。

<sup>122</sup> 狂劍生(1902)『校友會雜誌』, 120号, pp.61-62。

<sup>123</sup> 不詳(1906)『校友會雜誌』, 157号, p.60。

<sup>124</sup>にも勝利主義への戒めがみえる。また二高学生も一高とほぼ同質の思想をもっていた。一高との対抗試合における「準備委員」の学生は二高の『尚志會雑誌』において広くスポーツ運動の世界を批判し、「東都運動会」はいたずらに、「競技勝敗のみに傾注して殆んど學生的活動の範圍を脱却し商實的果た興行物的に傾」いている、「吾人はこゝに模範的仕合を學行し以て吾が堂々たる高等学校生徒の態度を公表せんこそ誠に生徒一同の希望」<sup>125</sup>であると述べている。

## (2) 東京帝大高専剣道大会での優勝

このような一高の伝統も、大正時代には大きな揺らぎを迎える。臨時教育会議は官立高等学校を10校、実業専門学校を17校、専門学校を2校新設する計画を策定した<sup>126</sup>。その結果運動部が新設され、武道及びスポーツ人口も増大した<sup>127</sup>ため、運動部の対抗試合にはより多くの選手が参加し、対校試合はより多くの人々の関心事となっていく。学生剣道界も同様で、対抗試合は発展して1913（大正2）年に始まった京都帝大高専剣道大会の参加校は1914（大正3）年には6校から12校へと増えていき、また1924（大正13）年に始まった東京帝大高専大会は最初から12校が参加しており剣道界関心の一大イベントとなっていた。1923（大正12）年、ある一高生は、対外試合への批判に対する反論を次のように述べている。

---

<sup>124</sup> 不詳（1910）『校友會雑誌』、197号、p.76.

<sup>125</sup> 準備委員（1908）『尚志會雑誌』、79号、p.2.

<sup>126</sup> 竹内洋（1999）『学歴貴族の栄光と挫折』、中央公論新社、pp.112-113.

<sup>127</sup> 中嶋哲也（2017）『近代日本の武道論』、国書刊行会、pp.195-196.



対外試合は技と心を練って剣道を向上発展させるのに有益であることは論を待たない。しかし知識人はしばしばその弊害を強調して正々堂々として行う試合そのものを非難するので、密かに憂慮している。私は理想的な試合を行って天下の模範となり、剣道に貢献することを年来の希望としている<sup>128</sup>（筆者訳）。

この記事によって試合そのものを否定する意見があることがわかる。著者が理想的試合を行って模範となって剣道を向上発展させると抱負を述べていることは勝利主義による相当に見苦しい試合があることからであろう。その2年後の1925（大正14）年、一高は晴れの優勝を遂げ、学生は次のように記した。

大正14年12月28日、第2回全国高等学校専門学校剣道争奪戦に於ける光栄ある優勝は、かの消々たる千萬の邪剣も、只一の正剣に抗すなきを明らかに語るものたる<sup>129</sup>。

対戦校を邪剣の剣士、自校を正剣の剣士とする自画自賛し、昨年優勝の水戸高校との決勝戦については、「實にや千萬の邪剣も一の正剣に如かざりき。人の和と正剣とを把持して只管精進怠らざりし我等の頭上には今や紅の大優勝旗燦然として輝きたり」<sup>130</sup>とあり、精進を重ねた結果としての“正剣”への自負が窺われる。

---

<sup>128</sup> 不詳（1923）『校友会雑誌』，292号，p.88.

<sup>129</sup> 不詳（1926）『校友会雑誌』，306号，p.2.

<sup>130</sup> 不詳（1926）『校友会雑誌』，306号，p.8.

### (3) 試合への不参加とその意味

“光栄ある”優勝の翌 1926（大正 15）年，一高の選んだ決断は優勝を争う試合への不参加であった。それは「理想的試合」<sup>131</sup>を目指す宣言でもあった。不参加の理由は，①試合における勝敗の決定方法と，②第 2 回の東京帝大高専剣道大会における試合の在り方に対する意見であった。②については，第 2 回の東京帝大高専剣道大会はすでに「成立当事の先輩の精神」が「全く没却せられ」，単なる「優勝旗争奪の爲の試合」<sup>132</sup>になってしまっていることであった。一高は対抗試合に参加することで“正剣”が“邪剣”と化すと認識したのである。①については部長塩谷の“仕合は無検証”（自己審判）で行うべきであるとすする年来の主張であった。塩谷の試合における“検証”の廃止提案は，創部から 16 年たった 1907（明治 40）年に遡る。同年の資料<sup>133</sup>によると検証とは審判員が試合において「絶対の権」を持って勝負を決する制度である。つまり塩谷の意見は自己審判制度を採用すべきだというものであった。一高生によれば，「試合者は全く是（審判員一筆者）に依頼し，爲に神ならぬ審判者の時としての誤謬なる判決にも盲従」するしかなく，「不平不満の間に，試合を了る事」<sup>134</sup>が度々あったという。塩谷の意見は学生たちに受け入れられ，一高では「勝負に重を置くの弊を矯めん」ために「審判を廢」<sup>135</sup>した。審判員を廢す

---

<sup>131</sup> 不詳（1923）『校友會雜誌』，292号，p.88.

<sup>132</sup> 遠山澤次郎・稻月光三郎・小柴保雄（1930）『向陵誌』，第一高等学校寄宿寮編，pp.547-548.

<sup>133</sup> 委員（1907）『校友會雜誌』，43号，p.78.

<sup>134</sup> 委員（1907）『校友會雜誌』，43号，p.78.

<sup>135</sup> 吉植委員（1909）『校友會雜誌』，191号，p.76.

るということは試合者相互が公正・廉恥の精神で有効打突の有無を自己宣告する方法を意味している。一高生が塩谷の指導以降ほぼ一貫して持した勝利主義批判は武士的精神と表裏をなしていたといえる。

### 3. 三高生の剣道観

#### (1) “精神の修養” から “運動としての発達” へ

1903（明治 36）年，三高生の時實は次のように述べている。

現今の撃剣家中よく諸氏の精神に偉大なる感化を興うるもの果たして幾人かある されば今日に於てこれを以て精神の修養に資せんとするは蓋し思わざるの甚だしきものなり 然れども余は信ずこれなきが故に決して撃剣の価値を喪ふ（失う—筆者）を要せず 只一個の運動として優に他の運動と対峙して遜色なく益々発達進歩せしむべきものなりと余は今更これが運動としての効果の如何を言ふを要せざるべし<sup>136</sup>。

時實は剣道に“精神の修養”といった固有の価値が付着しているといった過大なことは喧伝する必要はなく，他のスポーツに勝るように剣道を発達させるべきだという。剣道における精神の修養という効果ばかりを説くと，「一の誇大は以て全般を没却する」<sup>137</sup> 可能性があるためである。当時の三高剣道部は

---

<sup>136</sup> 時實綿海（1903）『嶽水會雜誌』，22号，p.116.

<sup>137</sup> 同上。

柔道部と分離してまもない頃であった。そうした影響もあり、他の運動部の方が人気がありしかも剣道部員の人数が少なかったため、「此の運動の少数者に限らるゝを最大の遺憾」<sup>138</sup>としており、他の競技スポーツに比べて遜色ない“運動”としての変化を剣道に求めていたと思われる。では三高生の意識はどのように変化したのか。

## (2) 勝利主義の昂進：対抗試合と京都帝大高専剣道大会

以下の記事は三高学生あるいはOBの昂進して止まない勝利への強い希求を示している。

1906（明治39）年、三高は六高と対戦し、敗北する<sup>139</sup>。翌年の記事には、「嗚呼我敗れぬ 我等は今諸君の前に此悲報を披瀝せざるべからざるを悲しむ。（中略）熱誠なる囑望に反きたるの罪を謝す」<sup>140</sup>。

1912（大正元）年、三高は対抗戦でしばしば苦杯をなめてきた六高に試合を断られる屈辱を受けた。「彼もとより中国の雄として常に豪語を縦にせる者、別して去歳以来我の進出を測り汲々として戦備か修めたりといへば正々の陣を張つて我軍を迎へてぞ武士の道にもかなひぬべきを只一言都合によりてことわるといふ、これ何の心ぞや」<sup>141</sup>。

1913（大正2）年、第1回京都帝大高専剣道大会開催。東寺真言宗大学に敗北<sup>142</sup>。

---

<sup>138</sup> 同上。

<sup>139</sup> 不詳（1906）『嶽水會雜誌』，40号，pp.87-90。

<sup>140</sup> 不詳（1907）『嶽水會雜誌』，43号，pp.109-110。

<sup>141</sup> 不詳（1912）『嶽水會雜誌』，51号，p.114。

<sup>142</sup> 不詳（1914）『嶽水會雜誌』，57号，p.112。

1914（大正3）年，三高は六高との試合を“復讐戦”と位置づけたが再度敗北．三高生勝矢は，「我等は負けた負けた，あゝこれが負けたのであろうか，（中略）我等は再び彼等の毒刃に倒れたのか」<sup>143</sup>．

1920（大正9）年の優勝を逃した三高生の盛は，「今年こそ石にかじりついてもとという観念」を持って「過度の練習」をし，遂には「身体をいためたものさへあつた」<sup>144</sup>．

### （3）武士的精神

1914（大正3）年の六高との対抗試合前日，練習態度に関する問題が起きている．三高によれば「試合の前日我等（註：三高）の道具竹刀我等が命と恃む竹刀－武士の魂－さへ無断に引き出され使はれて打捨てられてあつた」<sup>145</sup>という．そのため三高は「彼等（六高－筆者）の如何に武士的精神－正義廉恥－に缺乏せるか」<sup>146</sup>と六高の練習態度を批判している．これについて六高は，「道具竹刀位は充分準備してゐる．決して三高の道具竹刀を使ったことはない」，「否拝借したくも借るに足るべきものがなかつたのだ，それは三高は多く大學の道場にて稽古するためか，彼れ自身の道場は荒廢して，道具竹刀には塵が三寸もたまつて居た」からだ，「武士の魂と稱する彼れ等としては，あまりに矛盾も甚だしいではないか，これも負けたから，竹刀一本が武士の魂呼ばわりされたのだらう」<sup>147</sup>と痛烈に反

---

<sup>143</sup> 勝矢（1914）『嶽水會雜誌』，58号，p.54.

<sup>144</sup> 盛（1921）『嶽水會雜誌』，77号，pp.1-3.

<sup>145</sup> 勝矢（1914）『嶽水會雜誌』，58号，p.54.

<sup>146</sup> 同上．

<sup>147</sup> 不詳（1914）『校友會會誌』，40号，p.88.

論した。武士的精神をめぐる両校の非難の応酬は三高が六高に関する批判記事を取り消すという処置をすることにより収束した。一高と比べて競技スポーツ性が強い三高や六高においても武士的精神は否定されるものではなかった。

## 第六節 学生たちの技術とその精神：勝利への工夫

旧制高校剣道の特色は、“母校の名誉”のために猛練習をし、「対抗戦に勝たんがための剣道」<sup>148</sup>であったという。学生たちはそのための手段として技術を工夫した。旧制高校の剣道史を詳細に調べたものには筆者が見た限り、1978（昭和53）年の富山高等学校OBの小沢幸正のものだけである。そのタイトルと目次は次のようになっている。

### 旧制高校剣道と旧制富山高校剣道部

- 一 緒言
- 二 旧制高校剣道の特徴
- 三 戦後の剣道について
- 四 インターハイ戦績
- 五 昭和天覧試合における旧制高校選士の活躍
- 六 東大京大定期戦
- 七 旧制インターハイの復活
- 八 旧制富山高校剣道部—その苦闘の歴史と光輝ある終焉

---

<sup>148</sup> 小沢幸正（1978）「旧制高校剣道と旧制富山高校剣道」、『旧制高校史研究』16号，p. 53.

小沢は学生たちの工夫の姿を、「間合の外から飛び込み」(以下、「飛び込み」),「打ってからの引き揚げ」(以下、「引き揚げ」),「二刀」<sup>149</sup>の三つにまとめて活写している。“飛び込み”は互いの剣先が触れ合うか,それよりも遠い間合から後ろ足で踏み切り,前足を前方へすばやく飛び上がるように踏み込む動作である。“打ってからの引き揚げ”とは攻防に対応できる構えから即,そうした構えに戻らないことである。

## 1. 道具と審判規定の工夫

### (1)勝利への工夫：軽い竹刀

三高の剣風を示す 1907 (明治 40) 年当時の資料が,三高に対して敵愾心を抱く四高の記事に見える。

世の中の人には四高大敗の原因を竹刀の大小に帰しているようだ。三高の竹刀の用い方は軽やかで,その重さも四高の三分の二程度だ。ある者は三高の剣道は技に精神が入っていないと罵るが,そんなことはわからない。竹刀が細いから推定して評価した結果だ<sup>150</sup> (筆者訳)。

当時の竹刀の重さの規定はなく,武徳会における「剣術講習

---

<sup>149</sup> 小沢は旧制富山高校の 1944 (昭和 19) 年卒業の OB であり,自身は二刀を使用した。小沢の論稿は自身の体験,1933 (昭和 8) 年以降の資料,先輩の言葉を引用しながら書かれている。(小沢幸正,1978,「旧制高校剣道と旧制富山高校剣道」,『旧制高校史研究』16号, pp. 52-56)。

<sup>150</sup> 不詳 (1907) 『北辰會雑誌』, 48 号, p. 124.

規定」(1907)では体型によって幾分か調整してよいが基本的には三尺八寸という長さの規定のみであった<sup>151</sup>。したがって旧制高校においても長さは三尺八寸であり重さの規定はなかった。三高と四高との太刀の重さの極端な差について、当時、四高では無刀流三代目の石川龍三が指導していたことによる。四高では無刀流との関係から竹刀を三尺二寸とし竹刀を真剣に見立てて通常より重いものを使用していた<sup>152</sup>。三高師範の内藤は、人によって「身體の長短と力の強弱がある。それで分に應じたものを持つて自在の妙に達する事を学ばねばならぬ」<sup>153</sup>と述べていることから判断してあまりにも長く軽い竹刀でなければ容認していたのであろう。三高の竹刀が軽く細いということは素早い振りや当てで勝利を勝ち取ろうとしていたことを意味する。

## (2) 審判規定

1914(大正3)年、三高対六高の対抗試合は次のようなルールで行われた。「上段に構へしときのみ左小手を採用すること、敵の竹刀を打ち落せし際直ちに敵を討つときは勝とす但し組討ちとなりしときは引分けとす、胴突なし、引分は絶対になきこと、審判官は交互表裏四勝負毎に交代のこと其の順序は兩審判に一任のこと、竹刀を故意に打ち捨て組討ちをなさざること」<sup>154</sup>。

---

<sup>151</sup> 中村民雄(1994)『剣道辞典 技術と文化の歴史』, 島津書房, p. 72.

<sup>152</sup> 石田和外・吉田一郎(1980)『石田和外遺文抄』, 石田恭子, pp. 161-169.

<sup>153</sup> 内藤高治(1918)『国民思潮』, 第7巻, 第3号, p. 37.

<sup>154</sup> 不詳: 校友会會誌, 38号, pp. 123-124, 1914.



三高と六高の対抗試合において上段のみに左小手が限定されたことは、各校の内情によるものではなかった。幕末においてすでに右小手に打突部位を集約しつつあり、左小手は大正期までの剣道書でごく少数しか散見されなくなった<sup>155</sup>。その後、左小手は相手が上段のように一定の条件下でのみ有効と認められるようになった。その理由について中村は「仏教的な聖なる手、機能的にも右利きの人が圧倒的に多い右手を抑え込むことにより、その人の行動力を封じるといふ、象徴的な部位として右前腕部が打突部位に集約されていった」<sup>156</sup>と述べている。筆者が見た限り、胴突きをなしとした明確な理由は資料において見当たらなかったが、学生剣道の理念であった“競技化”の追求という観点から考察すれば、技術の多様性を重視したからではないかと推測する。それは昭和40年代において上段技は全盛であったが、胸突きを有効打突として採用したことにより、上段技が減少して直線的な剣道へと変わった<sup>157</sup>という事例があったからである。この事例から、学生は技術の画一性を避けるために胴突きをなしにしたのではないかと思われる。引き分けは“絶対になし”としている点は勝敗の明瞭化が窺える。三高と六高の対抗試合では審判の表裏交代制度を次のような過程で決定した。表裏とは主審の裏側に副審を配置する二審制を指し、主審が主な決定権を持つ審判制度<sup>158</sup>である。

六高において審判員は公明性の観点から第三者を置くべき

---

<sup>155</sup> 中村民雄：剣道辞典 技術と文化の歴史，島津書房，p.73，1994.

<sup>156</sup> 同上，p.73.

<sup>157</sup> 同上，pp.75-76.

<sup>158</sup> 太田順康（2009）剣道を知る辞典，日本武道学会剣道専門分科会，p.89.

としていたが、三高は両校剣道部の師範が表裏を交互に交代しながら審判することを求めた<sup>159</sup>。三高は第三者に審判を任せない理由として、ただずっと「或る事情のため」<sup>160</sup>として明確な回答を濁したという。これに折れた六高は仕方なく主審を一方の剣道師範に偏らせないために、四回主審をやるごとに表裏を交代することを審判制度に加えた<sup>161</sup>。これには三高も合意し、三高対六高における対抗試合の審判制度が決定した。

## 2. 技術の工夫

### (1) 飛び込み

金子近次は『剣道学』（1924）の「踏切及び其教授法」で踏み込み足の方法を詳述している。「左足の踏み切り」<sup>162</sup>を強調しているところがそれまでの剣道書にみられない斬新なものであった。それは「直線方向への敏捷性や前進距離を増すことには有効であるが、身体バランスの面からは不安定となる要素」をもっており、「真剣操作の観点からは危険性」が「高い」<sup>163</sup>ため踏み込み動作は真剣操作とは異なる技術であったからである。小沢によると狭き門を突破して入学してくる学生たちの多くは素人同然であり、短期間で選手にするには間合いに入ってからの技巧をこらした打ち合いだけを練習しては間に

---

<sup>159</sup> 不詳（1914）校友會會誌，38号，p.124.

<sup>160</sup> 同上，p.124.

<sup>161</sup> 同上，p.124.

<sup>162</sup> 長尾進（1996）「近世・近代における剣術・剣道の変質過程に関する研究：面技の重視と技術の変容」，明治大学人文科学研究所紀要，p.5.

<sup>163</sup> 同上.

合わない。そこで用いられたのが、「間合の外から一気に飛び込んで打ち、そのまま相手の横をダッと駆け抜けて行く技」<sup>164</sup>、すなわち飛び込みであった。間合の取り方と入る瞬間が勝負の技であったが、その豪快さは旧制高校生にふさわしかった<sup>165</sup>という。また二高の庄司宗光（1926年卒）は東大対警視庁戦においてこの技で15人抜きをしており、有効な技でもあった<sup>166</sup>。最初に確認できるのは、1907（明治40）年、一高が主催した第十九回撃剣大会の末廣（一高）と一二三（早大）の試合においてである。末廣は一二三に比して背が小さく、一二三は「小男」と「高をくくって」面を末廣に打ち込んだ。末廣は一二三の竹刀をくぐって「見事飛び上がって（一二三-筆者）の面」<sup>167</sup>を打ったという。この記述では相手の打ち込んだ竹刀をくぐっているのが間合の外からではないが勢いよく飛び込みながら打つ様子が窺える。また1909（明治42）年の一高撃剣部・創立二十周年記念大会では一高の岡本が高等商業学校（校名不詳）の余語と対戦し、「飛鳥の如く飛び込み様の面一本」<sup>168</sup>を決めて岡本が勝利している。さらに同大会の「荒武者」と呼ばれる明治大学の岡田と一高の渡邊の試合では岡田が「飛び込みての小手」を決めて勝利しており、小手打ちを見た執筆者は「上手也」<sup>169</sup>と評価している。

一方、三高の記録は1912（大正元）年の京都の武徳殿で行わ

---

<sup>164</sup> 小沢幸正（1978）「旧制高校剣道と旧制富山高校剣道」、『旧制高校史研究』16号，p.54.

<sup>165</sup> 同上.

<sup>166</sup> 同上.

<sup>167</sup> 委員（1907）『校友会雑誌』，168号，p.86.

<sup>168</sup> 少陵生（1909）『校友会雑誌』，191号，p.69.

<sup>169</sup> 同上，p.70.

れた「京都各學校聯合劍術第二十一回大會」に見える。同大会は各学校の「大將」格が出場する大きな大会で、三高からは10名が出場した<sup>170</sup>。同志社大学の甲藤と対戦した三高の清水は互いに譲らず一対一の同本数にもつれ込んだが最後は清水の「飛び込んでの胴」によって勝敗が決した。評者は「堂々たる勝負」<sup>171</sup>として評価している。次に他の旧制高校の様子を三つの事例でみる。①1912（明治45）年、四高主催の招待試合において、旧制医学専門学校（校名不詳一筆者）の吉田と対戦した四高の高橋は、「敵に向かつて立上がり飛び込み様に胴」<sup>172</sup>を打って勝負を決めた。②1908（明治41）年、五高における部内みの校内試合において、坂田は「飛び込み様籠手と面とを取」<sup>173</sup>って勝った。③1909（明治42）年、三高と六高の対抗戦においては、六高の山崎は、「飛鳥の如く飛び廻り荒れ廻る」<sup>174</sup>ような動きをして敵を翻弄して勝ちを得た。以上のように飛び込みは明治40年代には旧制高校における剣道の技術として採用されていた様子が見える。

## （2）引き揚げ

旧制高校の剣道を記した小沢によれば引き揚げは、「自分の打った一本を強調して相手を委縮させ、審判を牽制する」<sup>175</sup>のが目的で当時は戦法の一つであったという。一高と三高にお

---

<sup>170</sup> 不詳（1912）『校友會雜誌』，51号，pp.112-113.

<sup>171</sup> 同上，p.113.

<sup>172</sup> 金子要人（1912）『北辰会雜誌』，63号，p.89.

<sup>173</sup> 不詳（1908）『龍南』，126号，p.83.

<sup>174</sup> 六陵子（1909）『校友會會誌』，22号，p.173.

<sup>175</sup> 小沢幸正（1978）「旧制高校剣道と旧制富山高校剣道」，『旧制高校史研究』16号，p.55，1978.

ける引き揚げの記述は早く、両者ともに 1902（明治 35）年から確認できる。一高では「撃剣部十四回大會」において一高生同士（田島と野山）の試合があった。彼らは撃剣部のなかでも「熱心家」で、軍配は田島にあがったが両者は打突部位に竹刀が当たっても当らなくても「引擧げた（引揚げた－筆者）」<sup>176</sup>。そうした二人の姿を評者の碧天生は「奇観」<sup>177</sup>と評している。一高には勝利主義に抵抗した無検証の精神また竹刀を刀剣の代用とする思想が学生に浸透していたため、そうした思想から外れる引き揚げは一高生にとって珍しいことであったと思われる。

一方三高では同高が主催する第 1 回「嶽水会撃剣大会」の三高生同士（折田と内海）の試合で見られた。内海は面一本を取って「竹刀をひきあげ」<sup>178</sup>たとある。他の旧制高校を見ると、「引き上げ」（引き揚げ）という言葉は二高、四高、五高に見られた。①二高における部内のみの校内試合では二高の神崎が面や小手に当たるとすぐに「長叫」して太刀を「引き上げ」<sup>179</sup>た。②四高が主催した招待試合では同高の高橋が「敵に向かつて立上がり飛込み様に胴を打ち反身になりて引上げ」<sup>180</sup>た。③五高が主催した招待試合では、同高の富永が「打込むや否や面さあーと引上げた。皆の視線は審判官に集った。然し審判官は厭して居る。再び打込むで同じく引き上げ」<sup>181</sup>てようやく面を取得したとある。中村によると引き揚げは明治 40 年代か

---

<sup>176</sup> 碧天生（1902）『校友會雜誌』，116号，pp.61-62，.

<sup>177</sup> 同上，p.62.

<sup>178</sup> 不詳（1902）『嶽水會雜誌』，18号，p.133.

<sup>179</sup> 按劍號天子（1897）『尚志會雜誌』，25号，p.7.

<sup>180</sup> 金子要人（1912）『北辰會雜誌』，63号，p.89.

<sup>181</sup> 不詳（1903）『龍南』，97号，p.65.

ら竹刀を刀剣として扱う思想によって「由々しき問題の一つ」<sup>182</sup>として剣道界に認知されていたが、今回の検討では旧制高校においては明治30年代には広く行われていた可能性を示唆している。

### (3) 二刀

明治時代において竹刀による二刀は、二刀流の奥村左近太が警視庁の撃剣大会において逸見宗助と引き分けたことにより一時脚光を浴びるが、普及には至っていなかった<sup>183</sup>P. 学生剣道と二刀流の関係は看過できない<sup>184</sup>P とされるように、やはり学生剣道によって普及した技術と考えられる。これに加えてよく用いられたのは“片手技”である。

自身が二刀であった小沢によると二刀は対抗戦に勝たんがための一戦法として独特の発展を遂げ、旧制高校において「史上例を見ぬまでの二刀の全盛時代を出現した」<sup>185</sup>という。その時期は大正末期から昭和初期にかけてであった<sup>186</sup>。二刀には二種類あり、「大刀を右手に持つのを正二刀、左手に持つのを逆二刀」と呼んでいた。「大刀を上段に、小刀を正眼に構え、小刀で相手の竹刀を払い、受け、大刀で打ち込むのが定法であるが」、「個人により色々のタイプの二刀がいた」という。また

---

<sup>182</sup> 中村民雄（1994）『剣道辞典 技術と文化の歴史』，島津書房，pp. 87-88.

<sup>183</sup> 佐々木博嗣（2003）『武蔵の剣 剣道二刀流の技と理論』，スキージャーナル，pp. 165-170.

<sup>184</sup> 同上，p. 200.

<sup>185</sup> 小沢幸正（1978）「旧制高校剣道と旧制富山高校剣道」，『旧制高校史研究』16号，p. 56.

<sup>186</sup> 中村民雄（1994）『剣道辞典 技術と文化の歴史』，島津書房，p. 320.

旧制高校における二刀は「喧嘩と同じ」で、「道具外れでもよいから打って打って打ちまく」<sup>187</sup>るスタイルだったという。二刀選手の存在は一高においても確認できる。1904(明治33)年、紅白に分かれて勝ち抜き戦を行った校内試合において、「我こそ二刀流宮本無三四の末流を汲むものなりと名乗り」<sup>188</sup>を挙げて出場した渡邊は面で一人、胴で一人、計二人に勝ち抜いている。しかし対抗試合での二刀の使用は確認できない。小沢によると旧制高校で各校ともに二、三人の二刀陣を備えていた<sup>189</sup>というが、熱心に対策をした高校の一つが二高であった。

二高が二刀<sup>190</sup>対策の稽古を行い始めたのは1929(昭和4)年からである。というのも二高は1928(昭和3)年の京都帝大高専剣道大会(第十六回)において熊本医科大学予科と対戦し、同予科の二刀・安永に大将を含めて4人抜かれて惨敗したからである。このことがきっかけで二高は二刀対策が全国制覇への鍵と考え、高野佐三郎に助言を求めた<sup>191</sup>。高野は二刀に精通する指導者として高弟の乳井義博を二高の師範に推薦した。

---

<sup>187</sup> 小沢幸正(1978)「旧制高校剣道と旧制富山高校剣道」、『旧制高校史研究』16号, p.56.

<sup>188</sup> 不詳(1904)校友會雑誌, 157号, p.57, 1904.

<sup>189</sup> 小沢幸正(1978)「旧制高校剣道と旧制富山高校剣道」、『旧制高校史研究』16号, p.56.

<sup>190</sup> 学生の二刀の使用は1943(昭和18)年に文部省内の大日本学徒体育振興会が定めた「学徒剣道試合規定」において「両刀ハ之ヲ用ヒズ」と定められ、禁止された(吉村哲夫, 2003『剣道の歴史』, 全日本剣道連盟, p.334). 戦後は1994(平成3)年、学生剣道界で復活した。

<sup>191</sup> 葭楽信齋(1979)『第二高等学校史』, 第二高等学校尚志同窓会, pp.498-499.

1929（昭和4）年から二高師範となった乳井はさっそく二刀対策を開始した。具体的には乳井師範，二刀使いの二高OBである佐藤及び竹崎との試合を毎日行うことであった<sup>192</sup>。

そうしたなかで二高は二刀に悩まされた点は主に二つあることに気づく。一つは「小刀」に注意を奪われて「無謀なる面を飛んでは小刀に受けられて横一文字に胴」を打たれること，もう一つは「大刀」を意識しすぎて「竹刀」が無意識のうちに「上向きになる所」を小手を打たれることであった。二刀と対峙する場合は攻防において「敵の間合」に入らずに常に「攻撃的積極的」に動くという「根本原理」<sup>193</sup>を見出した。

#### （4）片手技

各校の校友会雑誌によると片手技は二高，四高，五高で明治時代から以下のように確認できる。①二高の紅白試合において大江山は「飛び込」みながら「片手打ち」<sup>194</sup>で面を打ち，勝ちを得た。②四高の宗接は「片手打の名人」であり片手打ちで「胴」<sup>195</sup>を取得した。③五高の招待試合において同高の野中は「片手打」<sup>196</sup>で胴を拂い一本取得した。以上のように旧制高校において片手技が有効であった様子がわかる。片手技は1919（大正8）年から武徳会において「最も正確なるもの」<sup>197</sup>であれば一本として認められるようになる。しかし見てきたように旧制高校では1919（大正8）年以前から有効であったため，片手技

---

<sup>192</sup> 齋藤（1929）『同窓会会報』，pp.30-31.

<sup>193</sup> 同上，p.31.

<sup>194</sup> 俠劍子（1901）『尚志會雜誌』，45号，p.21.

<sup>195</sup> 金子要人（1912）『北辰會雜誌』，63号，p.89.

<sup>196</sup> 不詳（1908）『龍南』，115号，p.114.

<sup>197</sup> 中村民雄（1985）『近代剣道史』，島津書房，p.233.



は学生剣道界で育てられた側面をもつと考えられる。旧制高校で用いられた有効であった二刀も片手技のコンビネーションであり一刀での片手技と相互に影響し合って技術を高めたと推察される。

明治期から大正期にかけて旧制高校は道具，審判制度，技術の工夫によって公明正大な勝利を追求した。当該時期の旧制高校における公明正大な勝利の追求は，竹刀操作と刀剣の観念との乖離を生み出しながら，結果的に近代スポーツに類似した競技文化を作り上げていった。

## おわりに

本章では、①江戸中期から江戸後期（1711－1868）、②明治維新から昭和天覧試合（1868－1929）までを対象とし、当該時期における型の術理と競技スポーツ性の対抗関係を明らかにした。主な成果は以下の通りである。

1) 江戸中期から江戸後期（1711－1868）において、当該時期では①竹刀を相手に当てさえすればよいとする実態があったこと（1822）、②勝敗を示す“一本”という言葉がみられるようになったこと（1843）を明らかにした。

2) 師範の根岸信五郎（一高）及び内藤高治（三高）の勝敗観は稽古や試合での勝利という価値を第一義とせず、刀剣の観念と品格に剣道の価値を置いている点で一致していた。しかし彼らが学んだ神道無念流や北辰一刀流の基本的前提は防具を着用し竹刀で撃ち合う撃剣試合を重視していた。彼らの影響を受けた学生もまた、対校試合の在り方を模索したことが確認できた。

3) 一高生は、剣道長塩谷の指導もあり、勝利主義に対して勝負に臨む個々人の心の在り方（心法）を重視していた。それは対校試合が勝利主義を昂進させるとし、第2回の東京帝大高専剣道大会の不参加を表明することに発展した。彼らは、審判員に対する不信感から、審判員を廃して試合者相互が公正・廉恥の精神で有効打突の有無を自己宣告する自己審判制を主張した。三高においても武士的精神は否定されるものではなかったが、対抗試合や京都帝大高専剣道大会が継続開催されるにつれ

て勝利への希求は増大した。

4) 一高と三高をはじめ旧制高校の学生は基本的に竹刀を刀剣として扱う思想・態度を原則とした。しかし一方で帝国大学主催高専大会に参加した学生たちは、母校の名誉のために対抗試合で勝つために以下の技術を採用して実践した。「飛び込み」, 「引き揚げ」, 「二刀」, 「片手技」などの技術は広く行われていた。また、試合に有利な道具（竹刀）を工夫した。さらに、審判規定の工夫によって試合の公明性を求めた。

本章を総括すれば、江戸中期から後期は型の術理を基本としながらも、結果的に競技スポーツ性の萌芽がみられた時期である。江戸中期、江戸初期に体系化された形稽古を補完するために竹刀打込稽古が開始されたが、江戸後期には竹刀打ち込み稽古のみを修業する者が増加し、形に示された日本刀の操作法を逸脱する竹刀独自の技術（引き揚げや片手技、踏み込み動作）が見られるようになった。また、竹刀を相手に当てさえすればよいとする実態（1822）があり、さらに、当該時期は勝敗を示す“一本”という言葉（1843）がみられた。

明治維新から昭和天覧試合（1929）までは、学生による公明正大な勝利の追求によって競技スポーツ性が次第に台頭し、型の術理が薄れていく時期である。明治初年、剣道は一時衰退したが、旧制中学校の設立に伴い柔道とともに撃剣が校友会などの活動（部活動）として実施された。明治後半、中学校体育教科として“柔術”、“撃剣”が採用され、学校での撃剣普及の度合いが強くなった。そのため、剣術の流儀を超えた剣道の基礎・基本を示す大日本帝国剣道形（現日本剣道形）が制定された。

その後の学生たちの関心は公明正大な勝利の追求を通じて剣道そのものが持つ新たな価値を見いだそうとしたことにある。具体的には、明治期から大正期にかけて旧制高校は武士的精神（公正，廉恥，勇猛，剛健などを含む），道具，審判制度，技術の工夫によって公明正大な勝利を追求した。このことが学生剣道の理念（審判の公明性と競技化の追求）形成に一定の貢献を果たした。当該時期の旧制高校における公明正大な勝利の追求は，竹刀操作と刀剣の観念との乖離を生み出しながら，結果的に近代スポーツに類似した競技文化を作り上げていった。そのことが戦後剣道の復活の原動力となり，“あてっこ剣道と剣理剣道”の併存をもたらす契機となった。

## 第二章

戦前における競技剣道の展開：  
有効打突をめぐって

## はじめに

本章では、明治期以降を対象とし（1868年から1945年）、当該時期における型の術理と競技スポーツ性の対抗関係を明らかにする。

なお以下は、本章で参考にする主な資料と人物を示した。したがって、資料にあるデータを用いる場合には煩雑さを避けるため、（ ）内に苗字と年号を示した。

表 5 本章で取り扱う資料

年号	著者	タイトル・出版社
1895		大日本武徳会が設立。
1910	小関教政	『剣道要覧』・大日本武徳会山形県支部
1915	高野佐三郎	『剣道』・剣道発行所
1920	高野佐三郎	『日本剣道教範』・朝野書店
1923	中山博道	『剣道手引草』・有信館本部出版部
1927	小沢愛次郎	『剣道指南』・文武書院
1927		大日本武徳会が「有効な撃突」について、「充實セル氣勢」,「刃筋ノ正シキ業」,「適法ナル姿勢」を初めて記載した「試合審判規定」を制定。
1928	高野佐三郎	『アルス運動大講座』[合綴3]・アルス
1931	高野佐三郎	『剣道教本（上下）』・三省堂。 中村民雄編（2003）『近代剣道書選集』, 第五巻－剣道講習会, 本の友社

1936	高野佐三 郎・高野弘正	『小学剣道指導書』・東洋図書
1937	中山博道	『剣道必携』・東京市目黒区報國館
1937	中山博道・ 中山善道	『日本剣道と西洋剣技』・審美書院
1942	高野佐三 郎・高野泰正	『剣の気魄』・共同公社
1944	小沢愛次郎	『皇国剣道史』・田中誠光堂
1945	剣道の禁止	

戦前における有効打突の制定に関する文献は，“範士”の称号を持ち，1927（昭和2）年まで存命だった剣道家のものに着目した。剣道家は，高野佐三郎，中山博道，小関教政，小沢愛次郎の4名である。範士とは武徳会が各流派の壁を越えて認定するものであり，「各流派のなかでも実力が抜きん出ている」<sup>1</sup>人物に与えられる称号である。なお“範士”を取得した剣道家は，1903（明治36）年から1927（昭和2）年5月まで62名<sup>2</sup>いる。剣道家の文献は『剣道要覧』（小関，1910），『剣道』（高野，1915），『剣道手引草』（中山，1923）など11点を資料とした。

本章で取り扱う戦前に活躍した主な剣道家を紹介する。戦前に活躍した剣道家の略歴は，『明治武道史』（渡辺一郎，1971），『近世剣豪伝』（小沢丘，1989），『剣道辞典：技術と文化の歴史』（中村民雄，1994）によった。

<sup>1</sup> 坂上康弘（1998）『日本文化の独自性』，創文企画，p. 169.

<sup>2</sup> 中村民雄（1985）『史料 近代剣道史』，島津書房，pp. 329-333

1) 高坂昌孝(?). 高坂はもともと姫路藩の剣術師範であり、弘化年間(1845-1848)に千葉周作に学んだ人物である。有名な著作には『千葉周作先生直傳剣術名人法』(1884, 以下『剣術名人法』)がある。この著は千葉周作の門に入った高坂が師の応答や指導内容について筆録したものである。千葉周作の技術にかかわる資料としては、千葉自筆の解説書が発見されていない。そのため『剣術名人法』は、千葉の技術を伝える重要な著作と位置づけられる。

2) 廣瀬眞平(?). 廣瀬の略歴については管見したところ、詳細な情報はほとんどわかっていないが、廣瀬は千葉周作(北辰一刀流)の三男、千葉道三郎に剣術を学んだ人物である。本研究で取り上げる廣瀬の著作『劔法秘訣』(1884)は、父周作と兄栄次郎から伝承される北辰一刀流の術理を師の道三郎から廣瀬へと伝え、それを廣瀬が「修行心得」・「他流仕合」・「真剣果合」・「劔戒」の4項に分けて、整理・収録した好著とされる。

3) 隈本実道(1850-1905). 隈本は、旧鹿児島藩剣術師範・直真〔註：ママ〕影流の隈元実記の子として生まれる。隈本は1877(明治10)年の西南戦争において、抜刀隊を率いて活躍した人物である。また、隈本はこの戦争の経験から1887(明治20)年に短柄竹刀による片手剣術を考案し、振気流道場を建て、軍人志願者のみを入門させて稽古をした。本研究で取り上げる隈元の著作『武道教範』(1895)は、日清戦争の従軍中に執筆し、「第一編綱領」、「第二編振気流短柄劔術」、「第三編練体柔術」から成る。また、本書は当時において最も精神修養を重んずべきことを力説したものとされる。



4) 橋本新太郎 (?). 橋本の略歴は廣瀬と同様，管見したところ詳細な情報はほとんどわかっていないが，橋本は日清戦争後，撃剣を正課教材へ採用する民間の動きが高まるなかで，武道の体操化を試みた人物である．橋本の著作『新案撃剣体操法』は，「準備演習」，「基本演習」，「稽古及試合」の3部から成る．

5) 小沢卯之助 (1865－1927). 小沢は神奈川県（相模国）に生まれる．1884（明治17）年に東京府師範学校を卒業，その後は「小学校訓導」となる．日露戦争時，北辰一刀流を塚田亀太郎という人物から学び，それを「体操化」する．亀田は小沢と同じ海軍士官学校に勤務していた剣道教師である．小沢の著作『武術体操法』は，「武道」のうち，「体育方法として適当なるものを抜粋し，これを体操に同化させ，学校体育とし，学校体育として生徒に興味を感じさせつつ，少時間にその効果をあげるよう編成したもの」である．

6) 望月馬太郎 (?). 望月の略歴については管見したところ，詳細な情報はほとんどわかっていないが，「仏教の真理」によって「心膽を錬磨する」心枝一刀流を主唱した人物である．望月の「講武」は，『至誠忠愛』という彼の著作のうち，「心枝一刀流の技法・教授法」を中心とする項である．

7) 柳多元次郎 (1864－1933). 柳多は宮城県に生まれ，山岡鉄舟（一刀正伝無刀）に学んだ人物である．柳多の著作『剣道教範』は，「一刀流の組太刀」，「団体教授法」を基本とし，「斯道の沿革・昔時の剣道の状況・竹刀長短の問題・剣道の教授要綱・撃込み稽古法などを略述した好著」である．

8) 小関教政 (1871－1936). 小関は，亀山藩（京都府亀岡市）に生まれる．1891（明治24）年，当時新潟県知事をしていた籠

手田安定の門に入り，心形刀流・無刀流を学ぶ．1892(明治 25)年，宮内省皇宮警手・剣術世話掛を拝命する．その後，新潟県・滋賀県・京都府・福井県・山形県・大阪府の各警察部において剣術師範を歴任し，1933(昭和 8)年，関東庁剣道教師(日本の植民地統治機関)となる．

9) 内藤高治(1862-1929)．水戸藩弓術師範，市毛五郎右衛門高矩の六男として生まれる．母は北辰一刀流剣術師範，渡辺清左衛門の娘である．つまり，武術家の家に生まれた人物である．1899(明治 32)年以降，武術教員養成所(のち武道専門学校に改称)の剣道主任教授，大日本帝国剣道形制定の主査委員(1911)などを歴任している．

10) 高野佐三郎(1862-1950)．高野は埼玉県に生まれる．祖父・佐吉郎(苗正)は中西派一刀流 4 世・中西子正の高弟で，3 歳から中西派一刀流の形稽古をつけた．その後，高野は 1908(明治 41)年，東京高等師範学校講師に就任．1912(明治 45)年，大日本武徳会に剣道形の調査委員会が設けられ，全国から 25 名の委員が選ばれた．高野はそのうち 5 名の主査の一人に選ばれ，剣道形制定の中心的人物となった．1916(大正 5)年，東京高等師範学校教授に昇任する．

11) 中山博道(1872-1958)．中山は石川県に生まれる．富山藩の山口一刀流・斉藤理則に習う．1889(明治 22)年に上京し，根岸信五郎の神道無念流の道場・有信館へ入門．1898(明治 31)年，二十七才の時に神道無念流の免許皆伝．1902(明治 35)年，有信館を継承する．中山は 1927(昭和 2)年までに剣道・居合・杖道の範士号を授与している．

12) 小沢愛次郎(1864-1945)．小沢は埼玉県に生まれる．剣

術は忍藩剣術指南松田十五朗に小野派一刀流を学び、免許皆伝を受ける。1890（明治23）年から埼玉県議になる。1898（明治31）年、第五回帝国議会衆議院議員に当選し、1910（明治43）年まで務める。この期間に武術の正科編入運動に尽力（1911年、撃剣・柔術が正科採用）。1896（明治29）年から熊谷中学校の剣道師範、1908（明治41）年から大日本武徳会埼玉県支部などの剣道教師を歴任し、埼玉県の重鎮として活躍する。

## 第一節 戦前における有効打突の変遷

1985年（明治28）武徳会設立から1927（昭和2）年の5月に規定された昭和2年規定が制定されるまで11のルール<sup>3</sup>が存在した<sup>4</sup>。それぞれは武徳会本部が制定したルールではないものもあるが、いずれも武徳会所属者が制定に関係した。例えば、1924（明治13）年に第一回明治神宮大会の剣道部門は「武徳会をはずして有志で剣道部を組織」して開催している<sup>5</sup>。第

---

<sup>3</sup> 以下、11の剣道試合審判規定。なお、⑨以外は『史料近代剣道史』を参照（中村民雄，1985、『近代剣道史』，島津書房，pp.215-237）。個人の著作では①隈元実道『武道教範』（1895），②小関教政『剣道要覧』（1910），③柳多元治郎『剣道教範』（1911），④河合昇道『剣道修業秘法』（1916）の中に著述されている。武徳会が制定したのは⑤「剣術審判員心得・剣術試合者心得」（1902），⑥「剣術審判員心得・剣術出演者心得」（1907），⑦「剣術講習規定」（1907），⑧「剣道試合に関する心得」（1919）である。その他には⑨『第一回明治神宮大会報告書』にみる試合審判規定（太田順康，2003，剣道の歴史，全日本剣道連盟，pp.544-545），⑩「明治神宮競技大会剣道部競技規定」（1925），⑪「警視廳剣道審判規定案」（1926）がある。

<sup>4</sup> 中村民雄（1985）『近代剣道史』，島津書房，pp.215-237。

<sup>5</sup> 太田順康（2003）『剣道の歴史』，全日本剣道連盟，pp.355-356。

1 回の「剣道部部内協議」<sup>6</sup>には中山博道や高野佐三郎など武徳会関係者が参加していることから、1925（大正 14）年の第二回明治神宮大会における「明治神宮競技大会剣道部競技規定」<sup>7</sup>にも武徳会関係者が影響していると考えられる。また、1926（大正 15）年「警視廳剣道審判規定案」<sup>8</sup>は「有効打突の判定基準をより厳密化し審判員の恣意的判断を避けるような工夫がなされ」、その後の「各種大会のモデル」<sup>9</sup>となった。しかし、打突の規定内で気勢、姿勢、刃筋という言葉は見られない。

このように、昭和 2 年（1927）以前の心得や規定には有効、無効な打突を具体的に示しているが、充実した気勢、適正な姿勢、刃筋の正しい技という三つの条件を示すまでには至っていなかった。打突時を含む打突前後の姿勢は、「審判心得」（柳多元次郎，1911）や「審判規定並びに審判者心得」（河合昇道，1916）、「第二回陸軍武道大會組合及規定」（1927）において重視するという記述が見られた。大日本武徳会が制定した「大日本武徳会剣道試合審判規定」（以下、「昭和 2 年規定」）によって初めて上記三つの要素が示された。昭和 2 年規定とは「撃突は充実なる気勢と刃筋の正しき業及び適法なる姿勢とを以て爲したるを有効とす」<sup>10</sup>である。

有効打突の変化は、1943（昭和 18）年の「大日本武徳會剣道試合審判規程」<sup>11</sup>にみられる。第一条では「試合ハ攻撃ヲ主眼

---

<sup>6</sup> 同上。なお、1925 年（大正 14）第二回明治神宮大会後、武徳会は不参加を表明した。

<sup>7</sup> 中村民雄（1985）『近代剣道史』，島津書房，p. 233.

<sup>8</sup> 同上，p. 234.

<sup>9</sup> 田口榮治（2003）『剣道の歴史』，全日本剣道連盟，pp. 301-307.

<sup>10</sup> 著者不明（1982）『三十年史』，全日本剣道連盟，p. 59.

<sup>11</sup> 中村民雄（1985）『近代剣道史』，島津書房，p. 266.

トシ斬突ヲ確實ニシ實戰的氣魄ヲ以テ行ヒ特ニ姿勢態度ニ留意スベシ」とあり，第二条では「試合ハ適正有効ナル斬突一本ヲ以テ勝負ヲ決ス」と明示された。つまり，昭和2年規程の“撃突”から“斬突”への変化であった。

## 第二節 有効打突の刃筋に対する考え方の変遷

明治初期，気勢<sup>12</sup>，姿勢という言葉はすでにみられる。『明治武道史』（1971）において気勢は，廣瀬，隈元，橋本が使用し，姿勢は，廣瀬，隈元，橋本，小沢，望月，柳多が使用している。

一方，刃筋という言葉は見られないが，例えば根岸が「夫レ撃劍ノ術タル，實戰ニ臨ミ自身ノ防禦ヲ鞏固ニシ，敵手ヲ刺撃シテ，全勝ヲ占ムルヲ學ブニ在リ」（根岸，1884）と述べ，森が「彼我トモニ眞劍ト見做シ遣フ可シ」（森，1888）と述べているように彼らの剣道観は真劍の観念によって支えられている。

明治期後半，初めて刃筋を使用したのは筆者が見た限り，内藤である。内藤は『武徳誌』，『武徳会誌』において刃筋を7回使用している。内藤は刃筋について，「常の稽古にも能く此の刃筋を正すを大切」であり，特に「初學の時尤も大切なる心得とす」（内藤，1907）と述べている。それは，「不具の技を演ずるのみならず，苟も武士道の精髓たる劍術を學ぶものに最も貴ぶべき心事の鄙陋を来す恐れ」（内藤，1907）があるからと技

---

<sup>12</sup> 『武道の名著』（渡辺一郎，1979），「武道の傳書」（渡辺一郎，1978），『日本武道体系』（今村義雄，1982）を確認したところ，江戸時代からすでに武術の用語として気勢，残心がみられる。

術と心法の両面から刃筋を重視する理由を述べている。これ以降、内藤は大正時代にも刃筋という言葉が『国民思潮』(1918)で使っているが、内藤以外の使用は昭和2年規定が制定されるまで見られない。

刃筋という言葉が内藤以外にも使用されるようになるのは、1927(昭和2)年の有効打突の規定以降である。したがって、刃筋はこの規定以降に明確になった概念といえる。

1927(昭和2)年以降、刃筋を使用している人物は高野と中山であり、刃筋は打突との関係で語られている。打突全般において「打つ時には拇指と無名指と小指に力を入れ、左右の手で物を絞る」(高野, 1931)ように打突することが重要である。その理由は「刃筋が曲つてゐては切れませぬ」(高野, 1942)と述べているように真剣の観念が背景にある。特に刃筋は左右の面を打突するときに注意される(高野, 1931・中山, 1937)。具体的には、打突時に「前臂を交叉」すること、「左拳は常に體の中心を外れぬ」(中山, 1937)ことにある。

中山は打突について、1927(昭和2)年の有効な打突の規定制定以降、次のように解説している。

撃突とは相手を斬撃・刺突する動作にして之が奏効には充實せる氣勢と正確なる刀法及適法なる姿勢を必須の要件とす。而して此處に氣勢とは意志の將に活動せんとする状態なり。即ち充實せる氣勢とは鷲鳥の鳥雀を拍つが如きを謂ふべし。正確なる刀法とは各關節及掌中の合理的作用により操作する刀の運用法、適法なる姿勢とは各種撃突時に於ける正しき體勢を謂ふ(中山, 1937)

中山の解説では「刃筋」が「正確なる刀法」に置き換えられている。これは「各関節及掌中の合理的作用により操作する刀の運用法」とあるように、高野と同様、打突において真剣の觀念が前提となっている。このように1927（昭和2）年以降、前述した内藤の説明に加えるかたちで刃筋の説明は詳しく示されるようになる。

### 第三節 日本剣道形の制定と普及

今日の日本剣道形は「刀の合理的な操作」<sup>13</sup>を学ぶ形稽古と位置づけられている。日本剣道形の原型になった大日本帝国剣道形は1912（大正元）年に制定された。内藤は大日本帝国剣道形でも刃筋が学べることを以下のように指摘している。

併し斯の如き形が出来ました以上は、旧来各流にある所の形は、不用と申す次第ではなく、全く中学程度の教授に、適するまでの形であります。元来形の必要なる所以は、体の備え、気合、呼吸、着眼、間合、足踏、手の裏、刃先、刃筋等の理を知覚せしむるのが根本であります<sup>14</sup>

この記述の正確な時期は不明だが、おそらく大日本帝国剣道形が制定された1912（大正元）年10月以降の記述と思われる。

---

<sup>13</sup> 福本修二（1991）『武道』、1月号、日本武道館、p.83.

<sup>14</sup> 高岡謙治（1980）剣聖 内藤高治、碧水会・体育とスポーツ出版、p.60.

また、内藤のいう“中学程度”とは当時の尋常中学校が12歳からの5年間で卒業できた<sup>15</sup>ことから、12から17歳ぐらいの学生が対象であったといえる。

大日本帝国剣道形の制定経緯については高野佐三郎（制定委員主査の一人）が次のように述べている。

さてこのときの制定について、組太刀のことを少しお話申し上げると、この太刀の形は、徳川時代の師範であった小野家、柳生家—この両先生の制定されたものが、モトとなつてゐることは御承知の通りですな。両先生が、公儀の御指南番となられるとき、現今、剣道に自分の流の特長を持ったものが何人あるか—といふことを調べられた節、二百六十余流あった。そこで、何流はどういふ構へをする、どの流ではどういふ太刀を使ふといふことを厳密にたゞされたところ、特長のあるものがこゝに五十六あるといふことになりました。まづそれを土台として、この形にはこれを合せる、この形にはこれでやると、柳生流は柳生流、一刀流は一刀流と、それぞれにこの形が五十六本ある。これを組太刀と申したのです。形とは申しません。この組太刀こそは、名人といはれる人々が調査し、審査しつくした至れり尽くせりのものであつて、これが剣道の真理になつたのです<sup>16</sup>

---

<sup>15</sup> 秦郁彦（2000）旧制高校物語，文春新書，pp. 60-68.

<sup>16</sup> 高野佐三郎（1942）『新武道』国防武道協会，pp. 43-44.



主に大日本帝国剣道形は小野派一刀流，柳生新陰流の組太刀（流派の形および剣道の真理）を参考にして制定されたことがわかる。

また，大日本帝国剣道形の効果について高野は以下のように述べている。

剣道の形は剣道の技術中最も基本的なるものを選びて組み立てたるものにして，之によりて姿勢を正確にし，眼を明らかにし，技癖を去り太刀筋を正しくし，動作を機敏軽少にし，刺撃を正確にし，間合を知り，気位を高め気合を練る等，甚だ重要なるものなり<sup>17</sup>

大日本帝国剣道形は学校教育の教材として導入されたが，一部ではこの形を軽視する傾向があった。三つの事例からそのことがわかる。

一つ目は，富永堅吾（東京高等師範学校の教員）の言葉（1925）である。

今日でも昔から傳へられた形が尚存して居るけれども，次第に類<sup>く</sup>れて，大日本帝国剣道の形の制定以来は，これが最も廣く行われて居る現状である。（中略）今日では竹刀を以ての稽古や試合を専らとして，形の修行を疎<sup>ま</sup>んずる傾向がある<sup>18</sup>。

---

<sup>17</sup> 高野佐三郎（1915）『剣道』，剣道発行所，p. 279.

<sup>18</sup> 富永堅固（1925）『最も实际的な学生剣道の粹』，慶文堂書店，p. 206.

富永は、当時、竹刀と防具を使用した稽古や試合が盛んで、日本剣道形があまり実施されていない状況を記している。富永が所属した東京高等師範学校は、1886（明治19）年に設立された官立（現在の「国立」に相当）の高等師範学校であり、主に中学校の剣道教員を養成していた。

二つ目は、大日本武徳会武道専門学校を1922（大正11）年に卒業した黒住龍四郎の言葉である。

武道専門学校は入学して1年間、切返しに終始した。寒稽古もほとんど切返しであった。つまり、小手先の技より心を錬ることが剣道の本質であることから、体力と精神力の鍛錬を重視した内藤（内藤高治）の主旨であった。さらに、先生は帝国剣道形を重視され、形こそ剣道の技の基本であると主張し、講習会では毎水曜日は形だけで、稽古は全然なかった。その当時は講習生も多くなかったし、一般に形に余り興味をもっていない者が多かったので、水曜日形の実施者は<sup>りょうりょう</sup>寥々たるものであった。多くの者はそれぞれ学校や警察に指導に行ってしまう、内藤先生と私だけのこともあった。奥山君や先生の甥御西山「田中正雄」氏などよく出席していた<sup>19</sup>。

大日本武徳会武道専門学校において、毎週水曜日は日本剣道形のみを稽古したが、竹刀と防具を使用した稽古に興味が集中し、参加者が少なかったと黒住は述べている。

---

<sup>19</sup> 黒住龍四郎（1980）『剣聖内藤高治』、碧水会・体育とスポーツ出版、p. 294.

三つ目は、鈴木勝治（段位審査員の一人）の言葉（1939）である。

東京府体育協会剣道部段審査会（中学生対象）を以上の通り開催したが、逐年同協会の基礎も確立し加入校も八十一校の多きに及び、受審者も逐年、その数と質とをましつつあることは同慶に堪へない所である。（中略）受験者全般に、技量の向上は真に結構であつた。但し剣道形は未だ十分に徹底せず、如何にも俄か仕込みという感が多かった。従つて受験の場合に、あはてたり、順序を誤つたものが比較的にかつたのは遺憾である<sup>20</sup>。

鈴木は受験者の技術が年々、向上しているが、日本剣道形が十分に徹底されていないと指摘している。東京府体育協会剣道部段審査会とは、中学生を対象とした段位審査会である。初段から三段までの受験者は441名であり、90名が合格した<sup>21</sup>。

特に1930（昭和5）年から日本の敗戦（1945）までは戦争が続く時期であり、次第に“実戦即応”の剣道が求められるようになる<sup>22</sup>。戦後剣道の復活に尽力した笹森順造（小野派一刀流）は、実戦即応の剣道を求められ、『実戦刀法』（1944）を著した。笹森は「實戦場に進發する人の爲には五年十年と竹刀剣道を學ばせるよりは直ちに古來の流儀の必殺の刀法を習はせ

---

<sup>20</sup> 鈴木勝治（1939）『刀と剣道』、第二卷、雄山閣、pp. 145-146.

<sup>21</sup> 同上.

<sup>22</sup> 杉江正敏（2017）『写真と記事でたどる武道の近代史』、日本武道館、pp. 148-149.

るのは有効適切である」<sup>23</sup>と述べ、大日本帝国剣道形を学べとはいっていない。つまり、実戦的実用性においては流派の組太刀の方が高いといえる。

また、笹森は「竹刀剣道の改むべき要點」<sup>24</sup>として、実戦性の低い点をまとめている。以下、簡潔にまとめる。

- 緊張感が薄れる防具の使用
- 限定された打突部位
- 自由に打突できる竹刀の使用
- 円形で反りがない竹刀の形状
- 歩行とは違う特殊な足さばき（送り足）

こうした剣道の点から、一部で竹刀打ちの稽古は刀を折ることに繋がるとまで酷評された<sup>25</sup>。以上、当時の剣道は実戦即応が強調されたことによって、かえって実戦には適さない点が浮き彫りになっていった。

---

<sup>23</sup> 笹森順造（1944）『實戦刀法』，富山房，p. 16.

<sup>24</sup> 同上，pp. 6-17.

<sup>25</sup> 杉江正敏（2003）『剣道の歴史』，全日本剣道連盟，p. 26.

## おわりに

本章では、明治期以降を対象とし（1868年から1945年）、当該時期における型の術理と競技スポーツ性の対抗関係を明らかにした。主な成果は以下のとおりである。

①1927年に大日本武徳会によって制定された有効打突の規定は、竹刀操作が真剣操作に密接に繋がることが重視されていた。

②有効打突の三要素とその説明は明治時代における剣道家の文献によってすでに示されていた。

③戦争が続いた1930（昭和5）年から日本の敗戦（1945）までは、剣道の型の術理が実戦性の観点から見直され、日本刀の操作法に対する関心が高まっていくと共に、競技スポーツ性が一部で酷評されるなどして薄れていく時期であった。

## 第三章

戦後における競技剣道の展  
開：有効打突をめぐる

## はじめに

本章では，敗戦後の剣道禁止から剣道の理念制定まで（1945年から1975年）を対象とし，当該時期における型の術理と競技スポーツ性の対抗関係を明らかにする。

本章で参考とした主な資料と人物は以下のとおりである。したがって，資料にあるデータを用いる場合には煩雑さを避けるため，（ ）内に苗字と年号を示した。

表 6 本章で取り扱う資料

年号	著者	タイトル・出版社
1945	剣道の禁止	
1953	1927（昭和2）年の三要素（「充実した氣勢」，「刃筋の正しい技」，「適法なる姿勢」）を持って「有効な撃突」が復活。	
1956	庄子宗光	『剣道五十年』・時事通信社
1956	高野茂義	『剣道一路』・産業経済新聞社
1956	村上貞次	『剣道入門』・愛隆堂
1957	小沢丘	『剣道：習い方と上達法』・鶴書房
1957	庄子宗光・村上貞次	『剣道早わかり』・ベースボールマガジン社
1958	学校剣道研究会（鈴木幾雄・中野八十二・村上貞	『学校剣道の指導：指導の手引き解説』修文社

	次・渡辺敏 雄・藤崎寛 之・湯野正 憲・平野五 郎)	
1959	村上貞次	『正しい剣道の学び方』・不昧堂書店
1960	有効打突「一本」の三要件の変更。「刃筋」が削除.	
1960	永井高一郎・ 大滝忠夫・中 野八十二	『すもう・柔道・剣道』（少年少女 体育全集：12）・ポプラ社
1966	小沢丘	『剣道に強くなる』・秋田書店
1966	村上貞次・阿 部忍	『写真と図解による剣道』・大修館 書店
1966	小沢丘	『コーチ学 剣道編』（新体育学講 座：第40巻）・ 逍遙書院
1966	中野八十二	『剣道の楽しみ方』・ 西東社
1967	小沢丘	『剣道入門』・鶴書房
1968	小沢丘	『剣道教室』・鶴書房
1968	湯野正憲	『剣心去来』・鷹書房
1968	佐藤忠三	『剣道と人生』・佐藤忠三
1970	庄子宗光	『剣道百年』・時事通信社
1972	鈴木幾雄	『新しい剣道指導法：教える人・初



		めて習う人へ』・笠間書院
1972	中野八十二(著) 岸野雄三・多和 健雄(編)	「剣道の技術史」・大修館書店(『スポーツの技術史：近代日本のスポーツ技術の歩み』)
1973	橋本明雄	『図解剣道の教室』・図鑑の北隆館
1975	「剣道の理念」制定	
1976	湯野正憲	『剣道指導ハンドブック』・大修館書店
1979	佐藤忠三	『剣道の学び方』・体育とスポーツ出版社
1979	湯野正憲・岡村 忠典	『剣道教室』・大修館書店
1984	小沢丘・ 小沢博	『ザ・ベスト剣道』・大修館書店
1985	中野八十二	『剣道上達の秘訣』・体育とスポーツ出版
1987	有効打突「一本」の三要件の変更. 「刃筋」の復活	
1989	木村篤太郎	『卒翁百話：文と武の遺文』・島津書房
1992	湯野正憲	『艸生庵残筆』・島津書房
1993	小川忠太郎	『剣道講話』・体育とスポーツ出版
1972	中野八十二 岸野雄三・多和 健雄(編)	「剣道の技術史」・大修館書店(『スポーツの技術史：近代日本のスポーツ技術の歩み』)

次に戦後の剣道家について説明する。戦後に活躍した剣道家の略歴は主に『剣道辞典：技術と文化の歴史』(1994)により、

細かい点は各剣道家の著作によった。

1) 佐藤忠三 (1891-1976). 佐藤は山形県出身で、1922 (大正 11) 年、大日本武徳会武道専門学校卒業し、卒業後は同校の助手となる。1930 (昭和 5) 年には同校の教授となる。1953 年からは北管区警察学校剣道教授となり、1966 (昭和 41) 年まで務め挙げた人物である。1953 (昭和 27) 年、全剣連によって有効打突が規定された時の全剣連役員である。

2) 木村篤太郎 (1886-1982). 木村は、奈良県五条町に生まれる。1911 (明治 44) 年、東京帝国大学を卒業し、弁護士登録される。1942 (昭和 17) 年、大日本武徳会剣道部会の発足に際しては部会長に就任し、翌年に発足した大日本剣道界の副会長に就任。1946 (昭和 21) 年、幣原内閣の検事総長、司法大臣。1952 (昭和 27) 年、全剣連の発足とともに初代会長に就任し、1972 (昭和 47) 年まで務めあげる。

3) 庄子宗光 (1905-1986). 庄子は宮城県柴田郡に生まれる。1929 (昭和 4) 年、東京帝国大学卒業、報知新聞社に入社する。1939 (昭和 14) 年には満州鉱業開発株式会社に入社。1953 (昭和 27) 年、全剣連・専務理事となる。1961 (昭和 36) 年には日本体育協会理事に就任する。

4) 小沢丘 (1900-1991). 小沢は埼玉県北埼玉郡岩瀬村に生まれる。幼少の頃より小野派一刀流、鏡新明智流、直心影流免許皆伝の父愛次郎に学ぶ。1922 (大正 11) 年、東京高等師範学校を卒業し、福島県立磐城中学校教諭を勤める。その後、警察大学や日本体育大学などの教諭を歴任し、全剣連会長・副会長、埼玉県剣道連盟会長なども務める。

5) 鈴木幾雄。1910 (明治 43) 年東京都中野区に生まれる。

東京都高等師範学校に入学し、菅原融先生に師事する。その後、1948（昭和23年）まで府立五中に勤務。戦後は、豊島区千川中学校教頭、教育庁指導主事を歴任する。また、國學院大学剣道師範、朝日生命剣道師範として剣道の普及にあたる。

6) 中野八十二。新潟県北蒲原郡に生まれる。剣道は小学校時代に村の青年団の試合を見て興味を覚えた。1924（大正13）年、新潟県立新発田中学校に入学。1929（昭和4）年、東京高等師範学校体育科入学。1941（昭和16）年、東京高等師範学校講師。1945（昭和20）年、東京市等師範学校教授。1964（昭和44）年、東京教育大学教授となる。

7) 村上貞次。1910（明治43）年に生まれる。東京高等師範学校卒、剣道教士、日本体育専門学校講師、東京学芸大学教授、日本体育学会評議員、全日本剣道連盟剣道連盟専門委員等を歴任する。

8) 湯野正憲（1915－1980年）。熊本県立八代中学校出身。中学時代は藤谷東四郎（東京高等師範学校出身、剣道三段）の勧めで剣道を始めた。1939（昭和14）年に東京高等師範学校へ入学。1942（昭和17）年に第一東京市立中学校（現在の東京都立九段高等学校）に奉職した。1958（昭和33）年、『学校剣道指導の手引き』作成委員。東京都都立九段高校には、教諭として26年間勤続。

9) 小川忠太郎（1901－1992）。埼玉県熊谷市に生まれる。12歳のときに直心陰流七尾菊太郎の指導を受ける。1923（大正12）年、国士館高等科に入学。1929（昭和4）年、国士館専門学校剣道講師。1945（昭和20）年、終戦に伴う学生改革により国士館をはじめとする各学校の剣道教師を解職。1953（昭和28）年、

警視庁剣道師範となる。1971（昭和46）年以降、剣道の理念制定に尽力する。

10) 井上正孝（1907－2003）。福岡県朝倉市に生まれる。家は農家。福岡県の朝倉中学に入学し、その後東京高等師範学校へと進学する。卒業後は、大阪北野中学校で教鞭をとり、1968（昭和43）年から東海大学教授となる。1971（昭和46）年以降、剣道の理念制定に尽力する。なお、中野八十二とは同級生である。

## 第一節 戦後における有効打突の変遷

戦後最初の規定は東京剣道倶楽部主催・国鉄剣道倶楽部後援による第一回全国剣道競技選手権大会（1949年、原宿開催）のものである。有効打突の項はなく、有効打突に相当する打突は一点としてカウントされた<sup>1</sup>。また、「乱暴」な打突や「足搦」、「濫りに発声」<sup>2</sup>することは禁止されている。これらの規定からは剣道の活動を制限したGHQの影響が窺える。GHQは太平洋戦争終結までの剣道が「軍国主義を鼓舞」し、「軍事訓練の一部」<sup>3</sup>として重視されたと見ており、他の武道よりも剣道を厳しく制限した。したがって、GHQは「日本刀及びそれに付随する一切の思想を排除」<sup>4</sup>することを剣道に求めた。

これに加えて、GHQのCIEは「剣道・武道」という名称を用

---

<sup>1</sup> 不詳（2003）『剣道の歴史』，全日本剣道連盟，pp.551-552.

<sup>2</sup> 不詳（2003）『剣道の歴史』，全日本剣道連盟，pp.551-552.

<sup>3</sup> 杉江正敏（2003）『剣道の歴史』，全日本剣道連盟，p.27.

<sup>4</sup> 大保木輝雄（2015）『武道』，4月号，日本武道館，pp.65-66.

いた団体を「許可しない」<sup>5</sup>という意向を示したため、「日本刀及びそれに付随する一切の思想を排除」し、「剣道」という名称を用いない撓競技が考案（1950）された。撓競技とは竹に布製の袋を被せた袋撓を用いてシャツとズボンの上から防具を着用し、制限時間内に多く相手の打突部位を袋撓で当てた方が勝利する競技である。第一回全国剣道競技選手権大会の規定と比較して、撓競技の規定は発声、足搦などの制限については同様であるが、「有効得点」の項が追加された。「有効得点」の判定基準は試合前に「審判会議を開き充分なる打合せ」を行い、「競技者に告示」<sup>6</sup>するものとした。

表 7 有効打突の主な変遷

1953 (昭和 28) 年	「充実した気勢，刃筋の正しい技，適法なる姿勢とを持って加えた撃突」	全剣連『三十年史』，1982・p. 60
1960 (昭和 35) 年	「有効な打突は“しない”の打突部で打突の部位を充実した気勢と適法な姿勢とを以て確実に打突したものとする」	村山輝志・国分国友『剣道試合審判規定』，1976・p. 210
1987 (昭和 62) 年	「充実した気勢，適正な姿勢をもって，竹刀の打突部で打突部位を刃筋正しく打突し，残心あるもの」	全剣連『全剣連広報』（70号），1987・p. 8

<sup>5</sup> 不詳（2003）『剣道の歴史』，全日本剣道連盟，p. 216.

<sup>6</sup> 不詳（2003）『剣道の歴史』，全日本剣道連盟，p. 554.

全剣連発足後，最初の規定（1953）は，民主主義的改変が教育制度に加えられ，現代剣道が「日本刀及びそれに付随する一切の思想を排除」<sup>7</sup>した体育・スポーツとして再出発したにも関わらず，戦前と同様の要件を以て有効打突は規定された．これは日米間の講和条約発効による日本の独立に伴う全剣連の発足，また全日本撓競技連盟の下で有効打突が当て合いに傾斜したことに対する全剣連側の信念の貫徹ともいえる．1954（昭和 29）年に両連盟が“全日本剣道連盟”の名称の下に合併すると戦後民主化運動の高まりを受け，1960（昭和 35）年，学校体育に現代剣道を導入するため，一旦，刃筋が削除される．しかし，臨時教育審議会の第四次答申が出される 1987（昭和 62）年には再び刃筋が入り，竹刀で打突部位を打突するにも関わらず，刃筋の想定が求められた．以下，戦後から現在までの有効打突規定の変化を見ながら刃筋が強調されてくる経緯を確認しておきたい．

中野八十二（範士九段，教員）は，昭和 30 年代（1955－1964）から徐々に，“斬れた”という「斬打的打突技術」<sup>8</sup>が“当てる”という「当打的打突技術」<sup>9</sup>に変化したと述べる．

オリンピックを契機にして剣道の精神面の復活はあったが技術面の復活はかならずしもできたとはいえない．すなわち，

---

<sup>7</sup> 大保木輝雄（2015）『武道』，4月号，日本武道館，p.65.

<sup>8</sup> 中野八十二（1972）『スポーツの技術史：近代日本のスポーツの歩み』，大修館，p.283.

<sup>9</sup> 同上，p.283.

従来の斬打的打突技術が第 2 期以後徐々に形成して当打的打突技術になったことである。

中野のいう斬打的技術とは“斬れた”ということが打突の基準になっている技術である。一方、当打的技術とは、規則どおりに当てるとということが打突の基準になっている技術であり、“当てる”には偶然、打突部位に当たった打突も含まれている。1972(昭和 47)年、東京大学の学生であった舟木隆(段位不明)は、「少し軽くてもタイミングが良いと [註：有効打突を] 取ってくれた時代ですね」<sup>10</sup>と回顧しており、斬る意識をもった打突意識の薄れがわかる。“剣道の理念”制定後の 1978(昭和 53)年、“タイミングが良ければ”有効打突となる“当打的打突技術”傾向を是正するため、全剣連は有効打突を「打突前、打突後の状態、打突後の態度等を総合して決定すべき」<sup>11</sup>という観点を示している。

さらに、1987(昭和 62)年には有効打突の基準を明確にするため“刃筋正しく”、“残心”が有効打突の要件に追加され、“充実した氣勢、適正な姿勢をもって、竹刀の打突部で打突部位を刃筋正しく打突し、残心あるもの”(剣道試合・審判規則・第 12 条)となって現在に至る。加えて、有効打突の判定が「経験則に依存」<sup>12</sup>していることから客観化できる事項についてはその文章化が望まれ、『剣道試合・審判・運営要領の手引き』

---

<sup>10</sup> 舟木隆 (2017)『剣道日本』, 東京, スキージャーナル, p.90.

<sup>11</sup> 全日本剣道連盟 (1978)『全剣連広報』, 30号, 全日本剣道連盟, p.6.

<sup>12</sup> 福本修二 (2003)『五十年史』, 全日本剣道連盟, p.65.

(2002, 全剣連) が発行された。ここに示された有効打突の要件(姿勢, 氣勢・発声, 打突部位, 竹刀の打突部, 刃筋)・要素(間合, [註: 打突の] 機会, 体捌, 手の内の作用, 強さと冴え), 残心(身構え, 気構え)は, 段位審査などの試験問題としても提出され, 現代剣道の指針となっている。

表 8 有効打突の理合の要件・要素

理合	要件	姿勢	氣勢・発声	打突部位	竹刀の打突部	刃筋
	要素	間合	(打突の)機会	体捌	手の内の作用	強さと冴え
残心	構え	身構え	気構え			
* 『剣道試合・審判・運営要領の手引き』(p.7, 2002) より作成						

## 第二節 有効打突の刃筋に対する考え方の変遷

全剣連の初代主要役員の小沢は刃筋について言及している。剣道における禁止期間の影響が窺われる。その影響とは撓競技において真剣の観念は禁止されていたことにある。小沢によれば, 刃筋とは「第一に要求される」ことであり, 「武術的要素」(小沢, 1966) と位置づけている。また, 刃筋を想定することは, 相手の刃に向かっていくという「気迫」を養うことでもあ



る（小沢，1966）。「刃筋が通らない平撃ちなどは斬れないし，又美も感じられない」とし，刃筋を立てることによる斬撃の機能美についても触れている（小沢，1966）。この時期の刃筋は戦前における効率的な竹刀操作を教えるというよりも，むしろ刃筋を想定したことによる緊張感が強調されている。

その後，現代の剣道復活の大枠を『学校剣道指導の手引き』（1958）で示した「学校剣道研究会」<sup>13</sup>において，刃筋は「本質的な意味を表わす為に弦の反対側」（学校剣道研究会，1958）を意味するという。学校剣道研究会の著作が出版された2年後，有効打突の要件から刃筋は削除されるが，そこに込められた意味についての記述はない。また，刃筋の正しさについては「打突に於て示された打突部に打突し，決して横なぐりにしないこと」（学校剣道研究会，1958）と技術的観点から述べられ，真剣を連想するような説明はない。

“剣道の理念”（1975）が制定されると，刃筋は強調される。

中野は主に技術的な観点から竹刀と刀の関係について「真剣のつもりとか，刀の操法の通りとか，そういうことを言って，大袈裟に昔の剣道に帰れと指摘している人もおるけれども，そういうことが実際問題として，竹刀で出来るわけがない」（中野，1985）と真剣と竹刀の操作は全く同じではないと述べている。一方，日本刀の操作法が持つ次のような考え方は受け継ぐ必要があるという。

- 「軽くても〔註：刃筋が通れば〕斬れる」（緊張感の創出）

---

<sup>13</sup> 大保木輝雄（2015）『武道』，日本武道館，pp.74-75.

- 「体の方向と竹刀〔註：あるいは日本刀〕の方向」が別々にならない（安定した打突）
- 相手の日本刀が自分に突き刺さらないように相手から自分の「中心をはずす」（緊張感と打突の機会の創出）
- 「左拳がいつも中心からはずれない」（効率的な竹刀操作）

小川は刃筋の持つ精神的な観点からその重要性を説明している。小川は「日本刀を使ってはじめて刃筋の問題が出る。そして刃筋の中には何が入っているかいうと、人間の生死の問題が入っている。日本刀は斬られたら終り」（小川，1993）と述べている。小川は刃筋という言葉によって、勝負は一度きりであるから繰り返せないという真剣味を養成することを指摘している。このように「剣道の理念」制定後、刃筋という言葉は技術的な側面に加えて精神的な側面が強調された。

### 第三節 撓競技と剣道の関係

本節では、撓競技と復活した剣道の関係を確認する。前述したように撓競技は1950（昭和25）年に考案され、その3年後に剣道が復活した。撓競技は剣道という名称を用いず、日本刀及びそれに付随する一切の思想を排除した競技として位置づけられた。当時の雑誌では、「あちらさんが大嫌い」な「恫喝的掛聲や肉を切らして骨を斬る式の一撃必殺的剣道」と「護身防禦を主眼」として「シナイでポンく」相手の隙をついて反省を促し、しかも「スリル」のある「撓競技」が対比されている。剣道が復活するまでの3年間で、撓競技と剣道の関係から様々

な声が上がっている<sup>14</sup>。

- 地方に於ては，在来の剣道がしない競技に変じ，或はしない競技は占領下に於ける剣道のカモフラージュ的存在である
- しない競技のような変なものが入っているからいつまでも剣道が採用にならない
- 剣道の経験者でしない競技のような遊びのスポーツは役に立たない
- しないがへなへなして頼りなく面白くない
- しない競技は剣道のリードアップゲームとなすべきだ

撓競技の指導と普及に努めた中野八十二は，①剣道，フェンシングとは別の競技，②戦後すぐの社会的ニーズに沿った競技，③戦前の剣道よりも撓競技の方が体育教材として内容は整っているという点からこれらの声に答えた。

剣道が復活すると撓競技は前述した剣道のリードアップとしての側面が強調され始める。1953（昭和28）の座談会では，全剣連と全日本撓競技連盟を兼任した大島功と庄子宗光は次のように語る。撓競技は「剣道の修練の一方面を担当すべきもの」（大島）であり，剣道の「素地」<sup>15</sup>（庄子）を作るものである。

同様に三橋秀三（元東京高等師範教授，1904－1984）は撓競

---

<sup>14</sup> 中野八十二（1952）『学校体育』，8月，日本学校体育研究連合会，pp. 40-41.

<sup>15</sup> 庄子宗光（1956）『剣道五十年』，時事通信社，p. 358.

技について次のように述べている。撓競技は戦前の「剣道を基礎として考案」されたものであり、「剣道のジュニア的なもの」<sup>16</sup>である。また、三橋は撓競技について「中学生以下の子供には適している」一方で、「高等学校以上の者には打った時の感覚が物足りないのと、用具の破損が甚だしい」ため、「残念ながら適当なものとは考えられない」<sup>17</sup>と撓競技の現状を指摘した。

その後、一般の人々からは「今までしない競技をやってきたのにまた〔註：剣道の〕道具を買わねばならぬ」などの理由から剣道と撓競技を「何とか一本化」<sup>18</sup>してほしいとの声が次第に多く上がるようになった。こうした状況もあり、1954（昭和29）年に全剣連は当時の社会的ニーズに沿って諸規定を整え、全剣連と全撓連は全日本剣道連盟の名称の下に合併する。1957（昭和32）年には、撓競技と剣道の内容を整理統合し、学校剣道として中学、高校で実施する通知が文科省から出され、撓競技という名称は消滅した。

#### 第四節 日本剣道形の取り扱い

現在、全剣連が正式に採用している日本剣道形は、旧大日本武徳会が1912（大正元）年に制定し、1917（大正6）年に加注、さらに、1933（昭和8）年に加注増補したものを原本としている。

---

<sup>16</sup> 三橋秀三（1954）『学校剣道』、新体育社、p. 20.

<sup>17</sup> 同上。

<sup>18</sup> 庄子宗光（1985）『加藤橋夫著作選集』、ベースボールマガジン、p. 220.

る<sup>19</sup>。戦後、剣道は体育・スポーツとして再出発した。それに伴って、日本刀及びそれに付随する一切の思想は排除された。日本剣道形は「武器、刀剣のイメージから、教材からはずされていた」<sup>20</sup>。

日本剣道形を再認識する契機は、1980（昭和55）年に開催された高段者研究会であり、1933（昭和8）年の原本では青少年に分かりにくいということが示された。こうして1981（昭和56）年、原本をやさしい文体に改め、原本の解釈を統一した『日本剣道形解説書』が作成された。

転機は、1991（平成3）年の学習指導要領改訂にある。名称は格技から武道へ変更された。指導要領には、「対人的技能の指導に関して形の取り扱いを工夫することも有効である」と示された。このような事情から福本修二は、学校教材としての日本剣道形の意義と効果を次のように述べている<sup>21</sup>。

- 礼法や正しい姿勢を理解させ易い。
- 竹刀と木刀の違いにより、握り方や刃筋の立て方（平打ち）など正しい振り方を理解させ易い。
- 気をつながりや攻め合いの感覚、意識を体験させることができる。
- 木刀の使用により刀法への接近が図られ緊張感、緊迫感を体験させることができる。
- 危険性を理解させ、安全に対する意識や相手を尊重する

---

<sup>19</sup> 全日本剣道連盟（1981）日本剣道形解説書，全日本剣道連盟，p. 1.

<sup>20</sup> 福本修二（1991）武道，日本武道館，p. 84.

<sup>21</sup> 同上，p. 84.

心を養う。

以上のような効果が改めて周知され、それまで学校教材として取り扱われてこなかった日本剣道形は1990(平成3)年以降、ようやく取り扱われるようになった。

## おわりに

本章では、敗戦後の剣道禁止から剣道の理念制定まで(1945年から1975年)を対象とし、当該時期における型の術理と競技スポーツ性の対抗関係を明らかにした。主な成果を以下のとおりである。

①当該時期の有効打突は刃筋にみられる型の術理よりも競技スポーツ性が強調された。

②剣道の復活後、国民体育大会への参加も公認され“打突による竹刀剣道”として復活したが、これはやがて勝敗にこだわる“当てる技術”(当打)を助長するに至った。

③その原因は、敗戦から1991(平成3)年までの間に型の術理を示す日本剣道形が学校教育から下火となったことが主な影響であった。

以上、敗戦から“剣道の理念制定”までは、戦前に比べて剣道の競技スポーツ性が一気に高まり、それに伴って型の術理は急速に希薄化することになったといえる。次章で詳しく扱うが、このことを憂いた戦前・戦後を体験する剣道指導者たちは“剣道の理念”と“剣道修行の心構え”を制定(1975)して過去の精神性の継承を願った。

## 第四章

戦後における競技剣道の展  
開：“剣の理法”をめぐって

## はじめに

本章では、剣道の理念制定以降（1975）を対象とし、当該時期における型の術理と競技スポーツ性の対抗関係を明らかにする。

## 第一節 剣理剣道とあてっこ剣道

### 1. 剣理剣道の登場とあてっこ剣道批判

“あてっこ”という言葉の初出は筆者が見た限り、戦後の『朝日新聞』（1975.1.8）の記事に見られ、「当てっこ嘆く長老」<sup>1</sup>と報道されている。この報道は1975（昭和50）年3月に制定された“剣道の理念”の直前である。つまり、あてっこ剣道とは“剣道の理念”制定と同時期に明確になった概念であり、“剣道の理念”から逸脱する剣道を指す言葉といえる。

近・現代の歴史で見ると、剣道の理念制定委員・小川忠太郎（1901-1992）はある講演会（1987）で、あてっこ剣道が広まった契機について、「昭和四年の天覧試合を区切り」<sup>2</sup>として「一般の人の剣道の稽古」<sup>3</sup>が「打った、打たれたのあてっこ剣道の稽古」<sup>4</sup>となったと回顧している。このように既に戦前でもみられたあてっこに対する評価は、戦後、連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）による剣道の禁止を受けた全日本撓競技連

---

<sup>1</sup> 著者不明（1975）『朝日新聞』，1.8，朝日新聞社。

<sup>2</sup> 小川忠太郎（1993）『剣道講話』，体育とスポーツ出版，p.83

<sup>3</sup> 同上，p.83.

<sup>4</sup> 同上，p.83.



盟の設立（1950）に伴い，軍国主義的要素を払拭すべく日本刀の観念を排除し，フェンシングの様式を採用した撓競技<sup>5</sup>が一点（ポイント）を競い合う競技として，加えて試合数を増加したことで助長される結果となった<sup>6</sup>。

評価の転機は1952（昭和27）年に全日本剣道連盟（以下，全剣連）が設立され，1954（昭和29）年に全日本撓競技連盟と合併することによって剣道界が一本化されたことにある。これ以降，全剣連は，撓競技で発生した打突（当て合い）結果のみを数量的に“一点”として評価する方法から，打突（打ち合い）前後の過程を打突の質をも含めた“一本”を評価する内容へ変更した。“一本”を巡っての評価方法は「剣術講習規定」<sup>7</sup>に「一本」<sup>8</sup>という言葉が見られるように1900年代（明治33-42）には各地で普及していたと考えられる。1927（昭和2）年に有効打突（一本）が明文化され，有効打突の要件（氣勢，刃筋，姿勢）が示された。それが1953（昭和28）年の試合審判規定に反映された<sup>9</sup>のである。

あてっこ剣道の隆盛に対して全剣連は，1971（昭和46）年に

---

<sup>5</sup> 撓競技とは竹に布製の袋を被せた袋撓を用いてシャツとズボンの上から防具を着用し，制限時間内に多く相手の打突部位を袋撓で当てた方が勝利する競技である。

<sup>6</sup> 浅見裕（1979）「体育教材としての剣道に関する研究（その1）：剣道のスポーツ化関連して」。岩手大学教育学部研究年報，39，p.91。

<sup>7</sup> 著者不明（1907）『武徳誌』，二篇七号，武徳誌発行所，p.80。（新田満夫，1985，『武徳誌』，復刻版，雄松堂出版）

<sup>8</sup> “一本”という言葉は『武徳誌』[著者不明（1907），『武徳誌』，二篇七号，武徳誌発行所，p.80.]に記載されているが，その内容は明文化されていない。

<sup>9</sup> 大保木輝雄（2016）『武道』，6月号，日本武道館，p.68。

剣道指導理念委員会を立ち上げた。1975（昭和 50）年には現代剣道の在り方（目的）を糾すため<sup>10</sup>に“剣道の理念”（剣道は剣の理法の修練による人間形成の道である）を制定する。メンバーは松本敏夫（当時，全剣連副会長，1908－1987）を委員長とし，70 歳代の小川を除いて 60 歳代を中心に 11 名（松本敏夫，委員は堀口清，小川忠太郎，玉利嘉章，中野八十二，湯野正憲，大島功，井上正孝，小川政之，広光秀国，笠原利章）で構成された<sup>11</sup>。“剣道の理念”の“剣の理法”に込められた含意こそが，あてっこ剣道を否定する理念であった。

2007 年，全剣連は“剣道の理念”の理解を深めるために“剣道指導の心構え”を制定した。この時期，既に学校武道の必修化計画（2012）が俎上に載せられ，剣道の海外普及<sup>12</sup>が進み，あてっこ剣道への対策は喫緊の課題となった。例えば，山本隆夫（町道場の館長）は試合の講評で，「最近は勝利至上主義で当てっこ剣道になってしまっている」<sup>13</sup>（『毎日新聞』2015.4.26）との認識を示し，また田原弘徳（範士八段，警察）は 2017 年の状況について「試合の結果により評価される時代」<sup>14</sup>となり，「子供の頃から技〔註：ママ〕を当てる剣道を指導する事が剣道指導の主流」<sup>15</sup>になっていると嘆く。

---

<sup>10</sup> 松本敏夫（1982）『三十年史』，全日本剣道連盟，p.55.

<sup>11</sup> 同上，p.55.

<sup>12</sup> 3 年に 1 度の世界剣道選手権大会は 1970 年から開始され，2015 年には 52 の加盟国・地域に至る

<sup>13</sup> 著者不明（2015）『毎日新聞』，4.26，毎日新聞社.

<sup>14</sup> 田原弘徳（2017）『剣道時代』，10 月号，体育とスポーツ出版，p.125.

<sup>15</sup> 同上，p.125.

## 2. “剣道の理念”及び“剣道指導の心構え”策定の経緯

全日本剣道連盟は、1975（昭和50）年に“剣道の理念”を制定し、その内容を「剣道は剣の理法の修錬による人間形成の道である」<sup>16</sup>と示した。制定の事情について、制定の中心人物であった二名の委員は次のように語っている。

○松本敏夫（1908－1987、「剣道の理念」制定委員長）

剣道のあり方および目的については、時代の流れにともない、いろいろと変化しているが、終戦後これを明確に示すものがなかったため、全日本剣道連盟は昭和四十六（1971）年十二月、現代に即した剣道の理念の確立をめざして、剣道指導理念委員会（後に理念委員会）を設けることになった<sup>17</sup>。

○小川忠太郎（1901-1992）

日本の剣道は、昭和四年の天覧試合を区切りとして、一般の人の剣道の稽古のやり方が変わってしまった。つまり打った、打たれたのあてっこ剣道の稽古となってしまった。それがズーッと凡そ五十年以上、今日迄及んでいるのである。（中略）この大問題を解決するにはどうしたらよいか？それには正しい剣道の理念をつくらなければいけない<sup>18</sup>。

---

<sup>16</sup>全日本剣道連盟 HP, <http://www.kendo.or.jp/kendo/concept/>

<sup>17</sup> 松本敏夫（1982）『三十年史』、全日本剣道連盟、p.55.

<sup>18</sup> 小川忠太郎（1993）『剣道講和』、体育とスポーツ出版、p.83. ここでいう天覧試合とは、昭和天皇の即位を記念して、皇居内の済寧館において開催された全国大会であり、初めて剣道専門家が参加し

“剣道の理念”は勝敗にこだわる“あてっこ剣道”ではなく、剣道の本質に則った指針として制定されたものだという。このことについて、杉江正敏は『剣道の歴史』の「総論」で、競技と「剣道の理念」の在り方を以下のように述べている。

競技化の進行と理念の間にできてくるさまざまの隔りを埋めるためには、「形の修練」「剣道講和」などとともに、先に述べた「気・剣・体」<sup>19</sup>の一致や、一騎打ちの美学を反映する剣道独自の競技特性を通じて、伝統文化としての内容が学ばれることが望まれる。また、文武の道を通じての日本人の自己修練の考え方は、全人教育及び生涯教育の歴史として装いを新たにしながら継承され、発展させなければならない<sup>20</sup>。

杉江の“競技化の進行と理念の間にできてくるさまざまの隔たり埋める”という言葉は、先の小川の言葉と合わせて考えてみると、あてっこ剣道の進行になかなか歯止めがかからないという現実があることを示している。『剣道の歴史』刊行から 8 ヶ月後、2003（平成 15）年 9 月に全日本剣道連盟は連盟設立か

---

た。剣道専門家とは、生活の大部分を剣道の修行にあて、質・量ともに一般の剣道家をはるかに凌駕するほどの稽古をしていた人物を指す（戦前には剣道専門家という部門や呼び方があった）。

<sup>19</sup> “気剣体一致”とは、相手との攻防を効果的に行うための要素を表現した言葉。気とは気力（活動を生み出すエネルギー）、剣とは竹刀操作、体とは体さばきと姿勢である。

<sup>20</sup> 杉江正敏（2003）『剣道の歴史』、全日本剣道連盟、p. 35

ら半世紀を経て全日本剣道連盟は，“長期構想企画会議”という委員会を設置した<sup>21</sup>。

第一次企画会議では“剣道の理念”が形骸化・お題目化しているのではないかとの指摘がなされ、「剣道指導の心構え」<sup>22</sup>を作成することを決定した。第二次企画会議では、どのようにすれば現場の指導者が“剣道の理念”の理解を深めることができるのかが問題となった。「竹刀と刀の関係」<sup>23</sup>をどう考えるのか、具体的には、「斬突から打突への継承と創造の過程」<sup>24</sup>をどう考えるのか、ということが論点となった。その後、問題は刀の観念の継承に絞られた。斬突から打突へと継承された“刀の観念”の欠如は、危険な日本刀を忌避する傾向があること、また、若者が日本刀に触れる機会が少ない<sup>25</sup>ことによると指摘している。委員らは、“刀の観念”を継承するためには、“刀法”（真剣操作）の説明が必要であるという指摘がある。また、刀の観念の意味について、刀が外敵に向けた単なる“武器”としてではなく、「心の迷いを断ち切る」<sup>26</sup>という自分自信の内部に生じた邪悪な心を払い清めるという観念を含んだ考え方であることを確認した。こうして制定されたのが、“剣道指導の心構え”（2007）である。

次節では剣道の二大専門雑誌の記事を用いて剣理剣道をリードする剣道指導者の剣道観を、剣理剣道を構成する技法要

---

<sup>21</sup> 高橋亨（2006）『剣窓』，2月号，全日本剣道連盟，p.18.

<sup>22</sup> 高橋亨（2006）『剣窓』，12月号，全日本剣道連盟，p.18.

<sup>23</sup> 高橋亨（2007）『剣窓』，2月号，全日本剣道連盟，p.18.

<sup>24</sup> 作道正夫（2007）『剣窓』，4月号，全日本剣道連盟，p.14.

<sup>25</sup> 高橋亨（2007）『剣窓』，2月号，全日本剣道連盟，pp.18-18.

<sup>26</sup> 大保木輝雄（2007）『剣窓』，3月号，全日本剣道連盟，p.20.

件・要素について，それらを刀法と心法に分類し，掘り下げて分析する．

## 第二節 剣理剣道の刀法論及び心法論：“あてっこ剣道”否定の論理

剣理剣道の核である“剣の理法”について，“剣道の理念”制定委員の松本と小川の関係史料によって定義をしておく．彼らによると「剣の理法」<sup>27</sup>とは理合に適った攻防，打突のことである．小川によると「理法」<sup>28</sup>を最初に使用したのは松本である．松本は1976（昭和51）年，剣道中堅指導者講習会において理法と理合は同義であり，「無理をしない剣の理に適った攻防，打突」<sup>29</sup>と定義した上で理法は「刀法と心法」<sup>30</sup>で構成され，両方が一体になると理に適った攻防，打突ができると説明した．また，小川も同様に「理法は大きく分けると刀法と心法になる」<sup>31</sup>と述べており，両者とも剣の理法は刀法と心法に分類して説明できるとした．両者によれば刀法には無理のない攻防と打突を可能にする姿勢，打突の機会，体捌きなどが含

---

<sup>27</sup> 相手と日本刀をもって対峙した場合，刃の片方は相手に，もう片方は自分に向いており，それらを合わせて両刃の“剣”を示す．“剣”は日本刀を持って互いに向き合う場合は，同じことが2度と起きない真剣な場という意味を持つ（小川忠太郎，1993，『剣道講話』，体育とスポーツ出版，p.13）．

<sup>28</sup> 小川忠太郎（1993）『剣道講話』，体育とスポーツ出版，p.14．

<sup>29</sup> 松本敏夫（1994）『剣道時代』，4月号，体育とスポーツ出版，p.11．

<sup>30</sup> 同上，p.11．

<sup>31</sup> 小川忠太郎（1993）『剣道講話』，体育とスポーツ出版，p.62．

まれる<sup>32</sup>。松本によれば、心法とは無理のない攻防と打突を支える心の在り方で、自分の心の在り方から相手や周囲に対する態度までを含む<sup>33</sup>という。

では、“剣の理法”を構成する刀法と心法を、現代剣道で試合を中心に活躍している著名な高段者たちがどのように考えていたのだろうか。2017（平成29）年の『剣道時代』及び『剣道日本』（各12回、以下『時代』、『日本』）を用いて、19名の剣道家及び雑誌編集者らの剣道観（何が正しい剣道か）を見ると、剣理剣道を構成するいくつかの技法要件・要素について言及していることが読み取れる。なお、技法の説明は全剣連が刊行した『剣道和英辞典』（2000）、『剣道指導要領』（2008）を参考にした。

表9 現代剣道の試合を中心に活躍する19名の剣道観

名前・ 段位・職業	大事に する技 法	主な成績	雑誌・ペー ジ数
『剣道時代』 編集者	姿勢	なし。	『剣道時 代』2017, 1・p.15
谷勝彦, 教士 八段 教員	姿勢 間合の 攻防	全日本選抜剣道八段優 勝大会出場, 全日本剣 道選手権大会出場, 東	『剣道時 代』2017, 2・p.37

<sup>32</sup> 松本敏夫(1994)『剣道時代』, 4月号, 体育とスポーツ出版, pp. 11-12.

<sup>33</sup> 小川忠太郎(1993)『剣道講話』, 体育とスポーツ出版, p. 62.

		西对抗大会出場，都道府県对抗大会出場，国体出場，全国教職員大会出場	
米屋勇一，教士七段 警察	姿勢	全日本剣道選手権大会出場，世界大会出場，東西对抗大会出場，都道府県对抗大会出場，全国警察官剣道選手権大会出場，国体出場	『剣道時代』2017， 3・p.50
忍足功，範士八段 警察	姿勢	東西对抗出場，国体出場	『剣道時代』2017， 9・p.20
越川一孝，錬士六段 警察	姿勢	全日本剣道選手権大会出場，全国警察官剣道選手権大会出場	同上
馬場欽司，教士七段 教員	姿勢	全日本剣道選手権大会出場	『剣道日本』2017， 12・p.56
茂木良文，八段（称号不明），教員	姿勢，機会，間合の攻防	全日本剣道選手権大会出場，国体出場	『剣道時代』2017， 4・p.77
『剣道日本』編集部	姿勢，体捌き，機会，間合	なし。	『剣道日本』2017， 11・p.123



	の攻防		
宮崎史裕，教士八段 警察	姿勢	全日本剣道選手権大会出場，世界剣道選手権大会出場，全国警察剣道選手権大会出場	『剣道時代』2017，6・p.39
忍足功	姿勢	重複のため上記参照	『剣道時代』，2017，9・p.20
中村藤雄，教士七段 大義塾（道場）塾長	姿勢	大義塾塾長として多くの少年少女の指導にあたり，2011（平成23）年の全日本少年少女剣道錬成大会ではチームをコート優勝（全16コート）に導いている．	『剣道日本』2017，4・p.56
馬場欽司，教士七段 教員	姿勢	全日本剣道選手権大会出場	『剣道日本』2017，9・p.44
高鍋進，教士七段， 警察	体捌き	全日本剣道選手権大会出場，世界剣道選手権大会出場，全国警察剣道選手権大会出場	『剣道時代』2017，1・p.48
小山正洋，教士八段 企業	体捌き	全日本選抜剣道八段優勝大会出場，全日本剣道選手権大会出場，東	同上・p.128

		西対抗大会出場，都道府県対抗大会出場，国体出場	
中村藤雄	体捌き，竹刀操作	重複のため上記参照	『剣道日本』2017，4・p.58
笠村浩二，範士八段警察	体捌き	全日本選抜剣道八段優勝大会出場，全日本剣道選手権大会出場，東西対抗大会出場，都道府県対抗大会出場，国体出場，全国警察官大会出場	『剣道時代』2017，8・p.18
古川和男，範士八段教員	機会，間合の攻防	全日本選抜剣道八段優勝大会出場，全日本剣道選手権大会出場，世界大会出場，東西対抗大会出場，都道府県対抗大会出場，国体出場，全国教職員大会出場	『剣道時代』2017，7・p.78
渡邊哲也，範士八段警察	間合の攻防	全日本剣道選手権大会出場，都道府県対抗大会出場，全国警察官大会出場 国体出場	『剣道時代』2017，1・p.140

桜木はるみ， 教士七段，桜 武館副館長	間合の 攻防	国体女子，全国家庭婦 人剣道大会などの監督 としてチームを優勝に 導いた経験を持つ。	『剣道日 本』2017， 5・p.58
田原弘徳，範 士八段 警察	充実し た気迫， 機会，間 合の攻 防	全日本選抜剣道八段優 勝大会出場	『剣道時 代』，2017， 10・p.125

## 1. 刀法の観点から見た剣理剣道

上記，資料の記述を分析し，彼らを用いる技法要件・要素を使用頻度順に並べると，①姿勢（12回），②間合の攻防（7回），③体捌き（5回），④打突の機会（4回）であり，2002（平成14）年の有効打突の要件・要素が問題視される．ここではそれら4つの観点を軸として“技法要素”（要件を省略）とし，その内容を具体的に把握する．

1) 姿勢．姿勢は構えのもとで，良い姿勢とは相手のいかなる動作に対しても「敏捷でしかも正確に，かつ自由に対処できる」<sup>34</sup>ことを指す．その結果生ずる価値は，機会を捉えた後の打突を容易<sup>35</sup>にし，有効打突“一本”に繋がりやすく<sup>36</sup>，体

<sup>34</sup> 全日本剣道連盟（2008）『剣道指導要領』，全日本剣道連盟，p.36.

<sup>35</sup> 谷勝彦（2017）『剣道時代』，2月号，体育とスポーツ出版，p.37.

<sup>36</sup> 宮崎史裕（2017）『剣道時代』，6月号，体育とスポーツ出版，p.39.

に負担をかけないため高齢でも実施可能<sup>37</sup>であり、「綺麗」<sup>38</sup>あるいは「強さや、美しさ」<sup>39</sup>が表現できる現代剣道を挙げている。対極にある正しくない姿勢は、「打突時に前傾姿勢になる」<sup>40</sup>、攻防のなかで「左拳が正中線から外れる」<sup>41</sup>、「左拳が浮く」<sup>42</sup>あるいは「手元を上げる」<sup>43</sup>、次の攻撃に繋がらない「防御のみの姿勢」<sup>44</sup>とあるように、正しい姿勢が崩れた動作と認識されている。以上から、正しい姿勢は、臨機応変な性能を持ち、美しさと有効打突が実現できると帰納される。

2) 間合の攻防。間合は相手と自分との距離であり、「一步踏み込めば打て、一步退けば相手の打突を外せる距離」<sup>45</sup>を“一足一刀”の間合、それよりも“近い間”，“遠い間”がある。間合の攻防とは，“偶然”ではなく“意図的”な打突をするため自分に有利な間合で、相手に変化や反応を起こして打突の機会を得ること<sup>46</sup>を指す。間合の攻防の要は互いに打てる「危険なゾーン」<sup>47</sup>を知り、「相手を崩すこと」<sup>48</sup>が理想とされ、そ

---

<sup>37</sup> 忍足功 (2017)『剣道時代』, 9月号, 体育とスポーツ出版, p. 20

<sup>38</sup> 米屋勇一 (2017)『剣道時代』, 3月号, 体育とスポーツ出版, p. 51.

<sup>39</sup> 茂木良文 (2017)『剣道時代』, 4月号, 体育とスポーツ出版, p. 77.

<sup>40</sup> 宮崎史裕 (2017)『剣道時代』, 6月号, 体育とスポーツ出版, p. 39.

<sup>41</sup> 忍足功 (2017)『剣道時代』, 9月号, 体育とスポーツ出版, p. 20.

<sup>42</sup> 越川一孝. 同上, p. 20.

<sup>43</sup> 茂木良文 (2017)『剣道時代』, 4月号, 体育とスポーツ出版, p. 20.

<sup>44</sup> 馬場欽司 (2017)『剣道時代』, 9月号, スキージャーナル, p. 56.

<sup>45</sup> 全日本剣道連盟 (2008). 剣道指導要領. 東京, 全日本剣道連盟, p. 41.

<sup>46</sup> 同上, pp. 72-73.

<sup>47</sup> 桜木はるみ (2017)『剣道日本』, 5月号, スキージャーナル, p. 56.

<sup>48</sup> 谷勝彦 (2017)『剣道時代』, 2月号, 体育とスポーツ出版, p. 37.

の結果「タイミングやスピードに頼らずとも」<sup>49</sup>相手を打突できるという。以上から間合の攻防は、打突の機会を見出すことにあり、無駄打ちのない打突を可能にするとされる。

3) 体捌き。体捌きは「足さばき」<sup>50</sup>をもとにし、相手を打突する、または打突を避けるための動作である。体捌きによって「技が空を切ること」<sup>51</sup>がなく、「生涯に亘って正しい剣道を実践」<sup>52</sup>できるとされる。また、相手にさからわない体捌きをすれば、「美しく、品がでる」<sup>53</sup>という。姿勢との関係において、体捌きは美しい姿勢の保持に役立つと考えられる。つまり体捌きとは打突の攻防に必須の移動能力であり、品格を生み出すとされる。

4) 打突の機会。打突の好機をみるには“技の起こり”，“技のつきたところ”，“居ついたところ”などがある<sup>54</sup>。田原は、打突の機会の選択によって「無駄打ち」<sup>55</sup>のない現代剣道をつくるとし、打突の機会や間合の攻防を無視した現代剣道が無駄打ちを量産し、品格を失うことを示唆している。むやみに動かない静的な態度が持つ品格の醸成に必要とされる。

以上の言説分析から、剣理剣道はこれら4つの技法要素が融合することによって、強く美しい現代剣道を構成すると主張していることがわかる。その目指すところは、いかなる事態にも

---

<sup>49</sup> 渡邊哲也(2017)『剣道時代』, 1月号, 体育とスポーツ出版, p. 140.

<sup>50</sup> 全日本剣道連盟(2008)『剣道指導要領』, 全日本剣道連盟, p. 46.

<sup>51</sup> 高鍋進(2017)『剣道時代』, 1月号, 体育とスポーツ出版, p. 48.

<sup>52</sup> 笠村浩二(2017)『剣道時代』, 8月号, 体育とスポーツ出版, p. 18.

<sup>53</sup> 中村藤雄(2017)『剣道日本』, 4月号, スキージャーナル, p. 58.

<sup>54</sup> 全日本剣道連盟(2000)『剣道和英辞典』, 全日本剣道連盟, p. 25.

<sup>55</sup> 田原弘徳(2017)『剣道時代』, 10月号, 体育とスポーツ出版, p. 125.

対応可能な正しい姿勢“1)と2)”及び移動能力3),そして機会を見ての打込み4)の3点であり,それらが動作の無駄を省いた品格を養成するという点にある.

## 2. 心法の観点から見た剣理剣道

“剣道の理念”制定者の松本,小川の剣道観を見ると心の在り方を重視し,具体的には“平常心”にあるといえる.松本は“平常心”について「平常と少しも変わらない心持ち」<sup>56</sup>であり,心の乱れは自分の動作を乱し,相手に打つ機会や「不快な念」<sup>57</sup>を与えてしまうという.“不快な念”とは,「うまいこと勝ってやろう」<sup>58</sup>という勝利のみを意識する態度,または「敬愛の気持ち」<sup>59</sup>のない態度を指す.小川は“剣道の理念”の講話で「平常心是道」<sup>60</sup>とし,自分が平常心ではないことを「分かれば大きな収穫」<sup>61</sup>と述べている.それに気づく人間は,二度とない人生で「平常心で生きられないのは悔しい」<sup>62</sup>と感じ,「発奮」<sup>63</sup>するという.その例として小川は,1929(昭和4)年,昭和天覧試合で優勝した持田盛二が,「平常心を失った試合」<sup>64</sup>があったことに気づいたため,その後40年以上に亘っ

---

<sup>56</sup> 松本敏夫(1994)『剣道時代』,4月号,体育とスポーツ出版,p.12.

<sup>57</sup> 同上,p.12.

<sup>58</sup> 同上,p.12.

<sup>59</sup> 同上,p.12.

<sup>60</sup> 小川忠太郎(1993)『剣道講話』,体育とスポーツ出版,p.64.

<sup>61</sup> 同上,p.25.

<sup>62</sup> 同上,p.25.

<sup>63</sup> 同上,p.25.

<sup>64</sup> 同上,p.25.

て平常心を保つための修行を続けたという逸話を紹介し、平常心を保つために修行し続ける必要性を述べている。

角は「試合となると防御偏重の動作に走ってしまう実態」<sup>65</sup>に対して「剣道試合が臆病者を育てて見過ごしている」<sup>66</sup>と危惧し、「正しい剣道を貫く態度や勇気をふるって果敢に攻撃を続ける態度の形成」<sup>67</sup>を主張する。また、谷は、「打ちたい、打たれたくないを優先」<sup>68</sup>する態度は試合が“うまくなる”可能性はあるが、「剣道の質」<sup>69</sup>の向上を見込めないと述べている。

両者が語る要は相手の打突を恐れて身を固めず、打たれる場所へスムーズに入る“捨て身”の覚悟（勇気）がなければ、試合における勝ちを全うできないとする、佚斎樗山が天狗に語らせた身心技法の世界である。因みに天狗は敵に向かって生、死、敵、そして我を忘れて、「無心にして自然の感に任する時は、変化自在にして応用無礙なり」<sup>70</sup>というが、ここに現代剣道家の剣道思想が、刀の技法とその古典的思想と重なり合って剣理剣道を構成していることが理解される。以上のように剣理剣道では、勝利のみを意識する態度は心の乱れとされ、心法（平常心と捨て身の覚悟）を要求する。その心法は剣理剣道の技法に影響し、技法（有効打突）の成就によって剣道の質を高めると

---

<sup>65</sup> 角正武（2017）『剣道時代』、10月号、体育とスポーツ出版、p.74.

<sup>66</sup> 同上、p.74.

<sup>67</sup> 同上、p.74.

<sup>68</sup> 谷勝彦（2017）『剣道時代』、7月号、体育とスポーツ出版、p.35.

<sup>69</sup> 同上、p.35.

<sup>70</sup> 石井邦夫訳註・佚斎樗山（2014）『天狗芸術論・猫の妙術』、講談社、p.25.『天狗芸術論・猫の妙術』は『田舎荘子』（1727年）内の一話。

されるのである。

以上、本節の 1 及び 2 をまとめれば、“剣道の理念” 制定委員および 19 名の剣理剣道の指導者が考える剣理剣道とは、正しい姿勢を乱さず、攻防に容易に移れる無理・無駄のない動きで行い、また、それが機能美と結びついて品格を養成する剣道を形成していると理解された。一方、あてっこ剣道と称される勝利のみを意識する態度は、心の乱れ、心法の未熟とされ、技法に影響して、有効打突の成就が難しいとされるのである。

次節では、刀法の技術と方法について柳生新陰流を伝承する実践者を事例にして確認したい。

### 第三節 刀法の技術と方法：柳生新陰流の袋竹刀操法から

本節では刀法の一つである刃筋にそった操作技術の事例として日本の剣術に注目する。柳生新陰流の伝書に表現される「五ヶの習」と「是極一刀」の教えに注目し、同流を研修する吉田道場でフィールドワークを実施した。具体的にはその教えが吉田道場でどのように動きとして表現され、機能しているのかをイーミックな視点（実践者の視点）から記述した。その上で吉田道場の袋竹刀操法はどう実施されるのかを分析し、実践者の刀法に対する考え方を明らかにする。

剣術は江戸初期に袋しない（刀のさやに装着する革袋に割った竹を仕込んだしないで、ひきはだしないとも呼ぶ）や木刀などをもって実施する形稽古が体系化され、現在まで伝承される。代表的な剣術の一つに柳生新陰流（陰流を学んだ上泉伊勢守信綱によって 16 世紀の後半に創始）が挙げられる。同流は現代



剣道の思想に大きな影響を与え、現在まで多くの史料を残し、袋しないを用いて相手を打突するにも関わらず刀法にそった打突を実施している。また、同流の実践者(指導者と非指導者)は袋しないを日本刀に持ち替えても同様の操作ができるように意識して稽古する<sup>71</sup>。このことについて、吉田によれば袋しないという“柔軟性のある道具”を用いるため、競技に変様する可能性はあったが、柳生家は代々「実際に刀を用いて打ち込むと同様の太刀筋が用いられているか否か」<sup>72</sup>を大事にしたため、競技や娯楽の方向に変様しなかったと述べている。後で詳しく述べるが、本研究では上記のような意識をもって稽古し、代々、柳生新陰流を伝承する吉田鞆男氏の道場(以下、吉田道場と略す)を対象とした。本節はフィールドワーク<sup>73</sup>と文献研究によった。

フィールドワークの内容は主に聞き取りと参与観察に分けることができ、2つの情報の質は異なっている。聞き取りの情報は聞き取りする場を設けて実施するという閉じられた方法

---

<sup>71</sup> 現代剣道と柳生新陰流の打ち方について、現代剣道では「打突時に両拳を前方に押し出すことによって」(作道正夫・杉江正敏, 2008, 「形剣術と竹刀剣道-斬突から打突その身体技法の系譜」, 武道学研究 40.), 打突力を獲得し、両手で梃子の原理を用いて相手を打つが、柳生新陰流では袋しないを両手で用いて相手を上から下に打ち、梃子の原理は使わず、打突力は打突時の袋しないに自分の体重をのせることで獲得する(2014年6月から2016年9月まで、筆者が柳生新陰流の稽古で見て体験した認識)。

<sup>72</sup> 魚住孝至・吉田鞆男他(2005)「日本の武道文化の成立基盤-新陰流と一刀流剣術の研究を通して-」, 武道・スポーツ科学年報。

<sup>73</sup> フィールドワークとは「研究対象となっている地域または社会へ研究者自身がおもむき、その地域または社会に関し何らかの調査を行うこと」である(渡邊欣雄・杉島敬志, 1944, 『縮小版文化人類学事典』, 弘文堂, p. 641)

で収集されるが、参与観察の情報はある集団の日常的な活動に自分が身をおくなかで聞いたり見たり体験したりするという開かれた方法で収集される。特に参与観察における自らの体験は参与観察を通してある集団から聞いた情報を保障するものとして重要である。参与観察の情報は他者の情報、それを受けて参与観察者が理解したこと、その理解の根拠となった参与観察者の当時の状況という 3 つからフィールドノートに記述される。こうしてフィールドノートや動画、画像などにまとめられた参与観察の情報は、参与観察者の視点から出されたものであるから、参与観察者は情報公開の是非をある集団に確認するが、改めてある集団から加筆・訂正してもらうことはない。

本節で扱うデータは 2014 年 6 月から 2016 年 9 月まで毎月 1 から 2 回、合計約 50 回以上のフィールドワークで収集した①動画や画像、②フィールドノートに記述した当時の実践者たちの認識及び筆者の体験と認識である。

## 1. 吉田道場とはなにか

吉田道場とは道場主の吉田鞆男氏が中心となって柳生新陰流と小野派一刀流の形を稽古，伝承している道場である。稽古は毎月2回，1対1で稽古をするぐらいなら十分な10から12畳の場で稽古する。鞆男氏の父・重成氏は尾張柳生・第10代柳生巖周氏の高弟・神戸金七氏と尾張柳生・第11代柳生巖長氏に学んだ人物である。特に神戸氏は「戦争で伝承が断ち切れることを憂えて，出征した若者が帰郷する時に見るようにと尾張柳生家相伝の伝書を書き写し」，それを出征した重成氏が写しながら解釈した<sup>74</sup>。父・重成氏の学んだ柳生新陰流の形と伝書は現在，鞆男氏に伝わっている。図1は，明治期以降の尾張柳生系統の主な伝系<sup>75</sup>である。

吉田道場の特徴は，①吉田家が代々柳生新陰流を伝承していること，②伝書に記述される文言を動きに復元して稽古すること，③1人が全体を指導するのではなく，常に1体1で稽古し，稽古する側と稽古をみている側の2つの側面から指導されること，④日本刀を意識して袋竹刀を操作することにある。

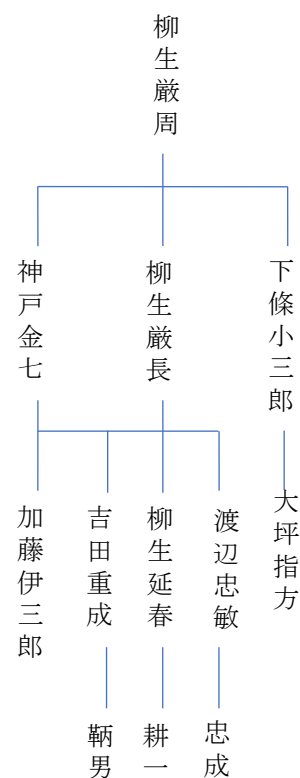


図2 明治期以降の尾張柳生系統

<sup>74</sup> 魚住孝至・吉田鞆男他（2005）「日本の武道文化の成立基盤-新陰流と一刀流剣術の研究を通して-」，武道・スポーツ科学年報。

<sup>75</sup> 同上。

## 2. 吉田道場における刀法の技術と方法

筆者は柳生新陰流の伝書にみられる“五ヶの習”と“是極一刀”という教えに焦点を絞って刀法の技術と方法を分析した。吉田道場では五ヶの習と是極一刀の教えは、相手を制するための核心的な動作として位置づけられていた。相手を制するという動作は、初めに習う基本動作の五ヶの習を駆使していつどのように五ヶの習を用いるのかという是極一刀の教えに従って相手を制するという一連の流れにある。そうした動作を分析した結果は以下のとおりである。

### 1) 五ヶの習の袋竹刀操法への影響。

実践者の五ヶの習に対する認識と動きを分析したところ、袋竹刀操法へ影響する教えは、①左肘を曲げないで伸ばしていること、②前の膝に体重を傾けており、後ろの膝を曲げないで伸ばしている点にあった。筆者は2つの教えが意識した刃筋を維持することに繋がると理解した。

### 2) 是極一刀の袋竹刀操法への影響。

実践者の是極一刀の教えに対する認識と動きを分析したところ、袋竹刀操法へ影響する動きは、①自分の正中線と腰を軸として上肢を回転させていること、②袋竹刀を握っている両拳の間の中心がいつでも自分の正中線上に位置していること、③左肘を伸ばしていること（五ヶの習）、④前の膝に体重を傾けており、後ろの膝を曲げないで伸ばしていること（五ヶの習）であった。筆者は①と②から自分が打ちたい方向に刃筋が自ずと変化すること、是極一刀のなかでも五ヶの習が機能していることを理解した。このような技術はいつでも刃筋を維持しながら

ら袋竹刀を操作できるよう意識することに役立っていると考えられる。

以上から刃筋にそったしない操作はいつも身体全体の運動としない操作が伴うように意識してしないを操作することであり、そうした動作を実践者は刀法の重要な内容と認識しているといえる。

#### 第四節 剣理剣道とあてっこ剣道の相克：あてっこ剣道の論理

##### 1. 剣理剣道から見たあてっこ剣道批判

本節では、剣理剣道の立場にある指導者のなかでもあてっこ剣道に言及している前述の指導者（小川，近，田原）の刀法（姿勢・間合・打突の機会）と心法（勝利への執着）に関する言葉の分析を通して、あてっこ剣道の技法に対する認識を明らかにする。

刀法の観点について、上記の検討で剣理剣道の正しい姿勢は打突動作への移行を容易にし、美しい剣道を形成するとされた。あてっこ剣道には姿勢の崩れが含意されている。この論点に関して小川は、「当てた方が面白い」<sup>76</sup>から「当てっこを教えると呼吸が乱れてしまう」<sup>77</sup>と述べている。“呼吸法”では“姿勢”が大事であり、「姿勢が正しくないと呼吸法」<sup>78</sup>が乱れるからである。また、小川は「臍〔註：膝の裏〕が曲がっている」

---

<sup>76</sup> 小川忠太郎（1993）『剣道講話』，体育とスポーツ出版，p.212.

<sup>77</sup> 同上，p.212.

<sup>78</sup> 同上，p.212.

<sup>79</sup>と「当てさえすればいい試合」<sup>80</sup>に見られるという。理由は「左足が曲がると丹田の力が抜け」<sup>81</sup>、「腹の力が抜けると腰がのび」<sup>82</sup>、「アゴがでる」<sup>83</sup>と述べ、臍の曲がりや姿勢全体の崩れを示すと捉えている。一方、近は、当たれば良しとするのではなく、正しい「姿勢、構え」<sup>84</sup>から「遠間で気を充実させ、気で勝って」<sup>85</sup>、相手の「気を捉えて捨てて打ち」<sup>86</sup>、“残心”の備わった“一本”を出すことを求める。残心（打突後、相手の反撃に即、応じられる身と気の構え）<sup>87</sup>とは刀法と心法の両面を持ち合わせた技法<sup>88</sup>である。残心は姿勢つまり打突後の構えと態度（気構え）であり、近もまた剣理剣道の立場にいたることがわかる。他方、田原は、無駄打ちは“当てさえすればよい”という無駄打ちを戒め、間合の攻防と打突の機会の重要性を主張している。また、田原は現状について剣道の指導は「当てる剣道」<sup>89</sup>が主流になっていると批判し、「無駄打ちの

---

<sup>79</sup> 同上， p. 232.

<sup>80</sup> 同上， p. 233.

<sup>81</sup> 同上， p. 233.

<sup>82</sup> 同上， p. 233.

<sup>83</sup> 同上， p. 233.

<sup>84</sup> 近光正（2017）『剣道時代』，4月号，体育とスポーツ出版，p. 57.

<sup>85</sup> 同上， p. 57.

<sup>86</sup> 同上， p. 57.

<sup>87</sup> 全日本剣道連盟（2000）『剣道和英辞典』，全日本剣道連盟，p. 114.

<sup>88</sup> 松本敏夫（1994）『剣道時代』，4月号，体育とスポーツ出版，pp. 11-12.

<sup>89</sup> 田原弘徳（2017）『剣道時代』，10月号，体育とスポーツ出版，p. 124.

無い」<sup>90</sup>、「充実した気迫」<sup>91</sup>、「気品のある、美しい剣道」<sup>92</sup>を目指すべきだという。以上、あてっこ剣道に対する高段者の意識は、不正な姿勢で、無駄打ちをし、気品と美しさを欠いた現代剣道にあると理解される。

心法の観点について剣理剣道を構成する要素は平常心にあり、“打ちたい、打たれたくないを優先”する態度は“剣道の質”を劣化するとされた(前述)。この論点について、小川は、当てさえすればいいとする「試合はだめ」<sup>93</sup>と批判し、「良い試合、悪い試合」<sup>94</sup>を分けるのは、「心が正しいか正しくないか」<sup>95</sup>だという。つまり、あてっこ剣道は勝利への執着心を持つ剣道とされる。とすれば、その批判は“勝利の質”の問題となり、勝利の成否は個人の価値観に還元される。剣理剣道の立場では、勝敗に執着せず、崩れない姿勢で間合の攻防から打突の機会を作り、必然的に有効打突(一本)をとった場合が正しい勝ち方であるから、あてっこ剣道の不正な勝ち方とは、勝敗にこだわり、姿勢を崩して無駄打ちを量産し、偶然にも有効打突(一本)をとった場合となる。さて、近や田原は、正しい打突を形成する技法要素として「気の充実」<sup>96</sup>を挙げる。剣理剣道では心が乱れていない状態と重なり、前述した有効打突の

---

<sup>90</sup> 同上, p.125.

<sup>91</sup> 同上, p.125.

<sup>92</sup> 同上, p.125.

<sup>93</sup> 小川忠太郎(1993)『剣道講話』, 体育とスポーツ出版, p.170.

<sup>94</sup> 同上, p.170.

<sup>95</sup> 同上, p.170.

<sup>96</sup> 気とは身心の働きを充実・調和させるためのエネルギーと定義される。(全日本剣道連盟, 2000, 『剣道和英辞典』, 全日本剣道連盟, p.54).

成就によって確認できる．以上からあてっこ剣道は，執着心を持ち，気の充実を伴わない，平常心を欠く現代剣道として認識されていることがわかる．

以上 3 名の有力な剣理剣道家によるあてっこ剣道批判を検討したが，その内容は第 3 章で剣理剣道を参考にして示したあてっこ剣道（姿勢を乱し，即，攻防に移れない無理・無駄のある動きや心の在り方によって機能美と結びつかず，品格を養成しない剣道）と同一であることが確認された．結局，それは“剣の理法”（剣理）の欠如体だということのである．

## 2. 剣理剣道に対する疑問

あてっこ剣道に対する言説批判が繰り返されているにもかかわらず，あてっこ剣道は現代の剣道における競技規則には反していない．そのため，なぜ試合・稽古であてっこ剣道をしてはいけないのかといった趣旨の疑問がある．本節ではインターネット上のコメント 2 例を検討し，さらに，あてっこ剣道と批判された剣道家の意見を検討する．



## (1) インターネット上の意見

使用する参考サイトは以下である。

「OKWAVE」<sup>97</sup>（2000年開設）は登録すれば誰でも自由に質問と回答ができる。質問数は累計約3608万件，毎月約3100万人が訪れる。

「Yahoo 知恵袋」<sup>98</sup>（2005年開設）は上記と同様に質問・回答サイトである。質問数は累計約1億8千万件，毎月約4200万人が訪れる。

### ① あてっこ剣道者 A の疑問 (2012)

引き技や突きや逆胴を軽視する風潮に疑問を感じております。例えば，町道場等に於いてこれらの技を先生方との稽古中に使う事は，邪剣，無礼であると言った風潮は無いでしょうか。先日ある道場で稽古させて頂いた際，私は先生方に積極的に技を仕掛けました。合気を外し，竹刀を撃ち落とし，突きを繰り出し，引き技も逆胴も打ちました。お相手戴いた先生からは、『君の剣道は暴力だ，正しい剣道をしなさい。高段者の剣道を目指すべきだ』とお叱りを受けました。中段に構えてゆっくり気を練り合って面ばかりを打つ，鏝迫り合いでの駆け引きや引き技を用いる事無く『互いの無言の合意』で間合いを切って構え直す…それが正しい剣道だとおっしゃいました。私に打ち込まれた方が言うべき言葉でしょうか。では，私の『暴力』に屈した先

---

<sup>97</sup> <https://okwave.jp/>（2018，2，12 閲覧）

<sup>98</sup> <https://chiebukuro.yahoo.co.jp/?fr=common-navi>（2018，2，12 閲覧）

生の剣道は，武道としての真価をいかほどお持ちでしょうか．踏み込みもしないで『おめえ～ん』とその場打ち，まともに打ててもいないのに自己満足な残心を取る老人剣道が高段者の剣道とは…．この様な先生方は少なくないと感じます．格式にあぐらをかいて積極性や多様性を否定し，精神面にこだわり過ぎて，理屈先行の剣道になっている気がします．胸突きが禁止されたり，開始線が引かれたり，ルールも様々な変容をして来ましたが，ルール内での技の多様性を認めない風潮であれば，武道としてもスポーツとしても衰退すると思います．当てっこ剣道がいけないと言われておりますが，当てる為の技術，当てさせない為の技術を競うのが剣道です．もちろん，軽い打ちその他不十分な打突は一本と認める必要はありませんが，稽古であれ試合であれ審査であれ，立ち合うのに特定の概念にだけとらわれるのはいかなるものでしょうか<sup>99</sup>

## ② あてっこ剣道者 B の疑問 (2013)

私は5才から中3まで剣道をしていました．私の道場は基本に厳しく礼儀にも厳しい道場でしたが大会に行くほど剣道って不公平な競技だといつも思っていました．強い道場は正しく振りかぶらない腕を前に出す打ち方で，先生はあれはスポーツだ！当てっこ剣道だとよく言ってましたし皮を切れても骨は切れんみたいな．私は道場の剣道と試合の剣道を使い分けていましたが（基本の剣道と当てっこ

---

<sup>99</sup> 同上．（2018，2，12 閲覧）

剣道の間（ぐらいな）よく皆の前でお前の剣道は我流だ等と叱られました。私にとっては剣道ってなんなんだろうと思いましたが、日々嫌いになり辞めたんです<sup>100</sup>

表 10 批判とそれに対する疑問

人物	高段者（剣理剣道）のあてっこ剣道批判	あてっこ剣道者 A・B の剣理剣道に対する疑問
批判・それに対する疑問	批判の論点	批判に対する疑問
刀法	○正しく振りかぶらず打つ→皮しか斬れない→不正な剣道（質問者 B の師範） ○不正な姿勢（小川） ○無駄討ちをする（田原）	積極性やルール内での技の多様性を否定しているのではないかという疑問。 ○鏝迫り合いでの駆け引きや引き技なし。突きや逆胴を軽視ゆっくり気を練り合って面ばかり打つ。 ○踏み込みをしないでおめえ～んとその場打ち。
心法	○気の充実を伴わない、心が乱れた剣道。（小川・近・田原）	精神面にこだわり過ぎて、理屈先行の剣道になってしまっているのではないかと

<sup>100</sup> 同上。（2018，2，12 閲覧）

	○勝利のみへ執着心を持つ（小川）	いう疑問．
剣道観	“剣の理法”の修錬による人間形成	当てる為の技術，当てさせない為の技術を競うのが剣道

表 8 は 2 人の意見を 2 つに切り分け 4 つの観点で整理した．表 8 の左欄には，3 名の剣道高段者が語っていた批判内容とあてっこ剣道者 B が語る剣理剣道指導者のあてっこ剣道に対する批判の論点を合わせて記した．右欄にはあてっこ剣道者 A の剣理剣道への疑問を掲げた．

左欄の内容は剣理剣道高段者の不正なかたちを表現しており，そこから逆に同高段者が刀による正しい振りかぶり，姿勢，打突の機会，平常心等を強調していることがわかる．右欄の内容からは同高段者が面打ちを重視し，その場打ちが多く，動きが少なく，また技に多様性のない点がわかる．現段階でわずかに 2 例しか見られないのは，疑問に対する回答者の一人が，「質問者のように疑問を持つ人間が素直にそれを言い出せない環境が問題である」<sup>101</sup>と述べているように，指導される立場にある者には剣道界の権威者が主唱する剣理剣道に対する批判が難しいからであろう．

一方，あてっこ剣道者 A は彼らのやり方を積極性と多様性の排除として疑問を持っている．その帰着点は，剣道高段者においては刀法・心法が“剣道の理念”に謳われる剣道観（“無執

<sup>101</sup> <https://okwave.jp/qa/q7580935.html> （2018， 2， 12 閲覧）

着心”をもつ人間形成)へと方向付けられるのに対し、あてっこ剣道者 A はそこへの飛躍を抑制して、あくまでも競技における“当てる為・当てさせない為”の技術の次元で考えている点にある。

次に、あてっこ剣道という批判を受けながら優れた実績を残した恵土孝吉による 1975 年以降の意見を検討する。

## (2) 恵土孝吉の疑問と意見

恵土(中京大学名誉教授)は中京大学在学中、4年連続で全日本剣学生剣道選手権大会の決勝に進出し、1958(昭和33)年、1961(昭和36)年に優勝している。また、全日本剣道選手権では1970(昭和40)年に2位入賞を果たすなど全国レベルの大会で高い実績を持つ。その恵土は「いろいろなところから自分の剣道はあてっこ剣道と批判を受け」<sup>102</sup> ってきた。なぜあてっこ剣道として批判されなくてはならないのか。その理由は恵土の剣道観にある。剣道は有効打突(一本)をとるための技術であり、合目的性を第一義とする。姿勢の維持が先にあるのではなく、たとえ「どんなところでも打てるように、どこからでも打てるように」<sup>103</sup> する。つまり、恵土にとって現代剣道とはどんなに姿勢が乱れても一本をとることができる技術なのであり、剣理剣道が重視する“正しい姿勢”は必ずしも絶対ではないという意味で相対化される。恵土にとって現代剣道の間はあ

---

<sup>102</sup> 恵土氏への聞き取り。2018. 4. 13.

<sup>103</sup> 恵土幸吉(1989)『剣道日本』, 12月号, スキージャーナル, p. 76.

くまでも「競技の世界」<sup>104</sup>（高校生から40歳代までが対象）のものである。「競技の世界」ではあてっこ剣道の技法要素とされる「無駄な打ち」<sup>105</sup>や“姿勢の崩れ”なども有効打突として容認されるべきだという。しかし恵土は剣理剣道を否定するわけではない。明鏡止水の心境で行う品位ある動作の剣道、また「無駄な打ち」<sup>106</sup>や“姿勢の崩れ”のない品格ある動作や平常心が求められる剣道を、50歳代以降の剣道家が行う「修養の世界」<sup>107</sup>のものとして認めている。

以上、恵土の意見は、A,Bらあてっこ剣道と批判される弱い立場の人々が語り難かった意見を代弁して強力に反論しているといえよう。

さて、本章の考察を通して、あてっこ剣道の主張を以下の点に要約する。①あてっこ剣道でも競技規則上は違背性がない、②あてっこ剣道は現代剣道に内在する積極性つまりダイナミックな動作を持つ、③規則内において技の多様性を持つ。①は適法性の主張、②と③は現代剣道の実践者に動機づけを与える“面白さ”、“楽しさ”である。これらが“剣道の理念”制定(1975)以降、あてっこ剣道がいまだに根強く残っている要因と考えられる。また、現代剣道の一本は審判員3名が瞬間的に彼らの主観で判定するため、あてっこ剣道的な打突を一本とする考え方の形成に少なからず影響していると考えられる。つまり、これらの意見は現代剣道のルールにプラスされるかたちで打突の

---

<sup>104</sup> 恵土孝吉（1993）『全日本学生剣道連盟四十周年記念史』、全日本学生剣道連盟、p. 329.

<sup>105</sup> 同上、P. 329.

<sup>106</sup> 同上、P. 329.

<sup>107</sup> 同上、P. 329.

判定に作用し，“剣の理法”（剣理）の欠如体であるあてっこ剣道的な打突を有効とするのである。しかし恵土の剣道観で見たように，2つの剣道を融和させる可能性は残されていると思われる。

## 第五節 あてっこ剣道の是正に関する議論

### 1. 大塚忠義と木寺英史の理論

“剣道の理念”制定後の1995（平成7）年，大塚はあてっこ剣道を克服するために“剣道の理念”こそ見直すべきという意見を記している。加えて2014（平成26）年には，木寺によって“剣道の理念”が機能していないと指摘された。両氏が“剣道の理念”のなかで問題としたのは竹刀を刀の代用とする考え方であった。

大塚は竹刀での打ち合いを切り合いと想定するには無理があるという。その理由は「竹刀を刀と違って，そう思った時に想起される諸々の態度や緊張感，意識の問題や思い込みで解決しなければならないという，そういう思想を確保」<sup>108</sup>し，“技術を正そうとした”点にあるという。彼は刀の技法と思想をそのまま現代剣道に入れた“真剣思想”ではない思想の作成を剣道界の課題とすべき<sup>109</sup>とし，晩年には課題解決のため“有効打突”に着目してその見直し案を提示した。大塚は「第三者に

---

<sup>108</sup> 大塚忠義（1995）『日本剣道の思想』，窓社，p.91.

<sup>109</sup> 同上，p.56.

よる審判と試合規則」<sup>110</sup>が「竹刀剣道と真剣剣道」<sup>111</sup>の異な  
った世界を培ったとし、試合審判規則に注目したのである。有効  
打突には打突の質を追求する「文化的特質」<sup>112</sup>が表現されて  
いるが、“剣道の理念”制定後、“有効打突”の改訂によって  
評価に「斬れたかどうか」<sup>113</sup>の基準が入り込んだため、見直し  
が必要だという。大塚の主張は真剣を前提とする思想に対して、  
あてっこ剣道の技術主義思想を“文化的特質”として深めよう  
とする主張であったともいえる。

大塚は“竹刀剣道”が培った思想と技法をもとに新たな規則  
を提示している。そのテーマは「相手に打たさず、相手を崩し  
て、そして美しく打つこと」<sup>114</sup>である。

以下、四つの有効打突に関する基準と時間、勝利本数、反則  
を示した。①「正確、強度、崩しの三条件の中で正確性と他の  
条件の1つを伴う打突を有効打突とする」<sup>115</sup>、②「正確、強  
度、崩しの三条件をすべて伴う確実な打突を圧倒打突（仮称）  
とする」<sup>116</sup>、③「試合の勝負決着は、圧倒打突一本、または先  
登〔註：ママ〕の有効打突二本で勝ちとする。制限時間は七分」  
<sup>117</sup>、④「反則を二回行えば、相手方に有効打突一本を与える。

---

<sup>110</sup> 大塚忠義（2005）『剣士に告ぐ：日本剣道の未来のために』、窓  
社、p. 4.

<sup>111</sup> 同上、p. 4.

<sup>112</sup> 同上、p. 62.

<sup>113</sup> 同上、p. 62.

<sup>114</sup> 同上、p. 92.

<sup>115</sup> 同上、p. 92.

<sup>116</sup> 同上、p. 92.

<sup>117</sup> 同上、p. 92.



ただし、判定制の場合を除き、一回のみの反則（マイナス 0.5 本）による失点については勝敗の判定には用いない<sup>118</sup>。大塚は“正確，強度，崩し”の三条件を基準として有効打突よりも高いレベルにある打突を“圧倒打突”として設定し，“真剣思想”を乗り越えようとしたのである。

大塚の影響を受けた木寺は、現代剣道が「日本刀での技術から離れて独自の技術を生み出している」<sup>119</sup>とし、剣理剣道のもつ矛盾を突いた。しかしその思想を全面的に否定せず、「竹刀〔註：打突〕の合理性を維持」<sup>120</sup>し、「日本刀の伝統性を保持した打突技術」<sup>121</sup>について具体的な提唱をしている。半面、木寺は“剣道の理念”が剣道界において機能していない原因を次のように指摘した。それは①技の変質という「実体」<sup>122</sup>を，“剣の理法”の修錬で「観念的」<sup>123</sup>に解決しようとしたこと，②「日本刀代用論の前提となっている観念としての日本刀」<sup>124</sup>が「現在ではほとんど機能」<sup>125</sup>していないことにある。

木寺は帯刀が許可された「維新以前は、実体としての日本刀が存在し、木刀も竹刀も観念的」<sup>126</sup>には日本刀であり、「観念としての日本刀が機能」<sup>127</sup>していたとする。また、「実体とし

---

<sup>118</sup> 同上， p. 92.

<sup>119</sup> 木寺英史（2014）『日本刀を超えて』，スキージャーナル， p. 18.

<sup>120</sup> 同上， p. 5.

<sup>121</sup> 同上， p. 5.

<sup>122</sup> 木寺氏への問い合わせ（2018. 3. 1）によると“実態”の誤り。

<sup>123</sup> 木寺英史（2014）『日本刀を超えて』，スキージャーナル， p. 68.

<sup>124</sup> 同上， p. 68.

<sup>125</sup> 同上， p. 68.

<sup>126</sup> 同上， p. 66.

<sup>127</sup> 同上， p. 67.

ての日本刀が失われた維新以後も、観念としての日本刀は存在」<sup>128</sup>していたという。しかし、「戦後、[註：体育・]スポーツとして再出発した」<sup>129</sup>現代剣道では「観念としての日本刀は消失」<sup>130</sup>したとする。ここから木寺は剣道特有の合理的な打突を行う方法として、日本刀を用いていた時代の「歩行形態」<sup>131</sup>（体幹がねじれない、同側の肩と腰が同期する動作）<sup>132</sup>による打突動作の提起を試みている。これは近・現代剣道の持つ刀や刃筋の観念を捨てる一方、近世の身体動作を入れて竹刀を前提とする剣道技術に伝統性を植える試み<sup>133</sup>といえる。

このように大塚と木寺は、竹刀を刀と想定することに批判的であるが、現代剣道が刀の技法と思想を柱にしてきた事実立ち、それを全て捨て去るべきとは述べていない。大塚の批判は、刀の想定によって「醜い殺し合いも妥当化」<sup>134</sup>されること、また、刀を持ったことのない人は「刀による美しい斬り方」<sup>135</sup>を理解できないことを指摘し、刀を想定せずとも良い打突ができる規則の改正を提案したのである。この提案は剣理という観念的思想を捨て去り、技術による科学的な解決を志向しようとしている。一方、木寺は、現代剣道の評価は「結果性技術」<sup>136</sup>（打

---

<sup>128</sup> 同上， p. 67.

<sup>129</sup> 同上， p. 67.

<sup>130</sup> 同上， p. 67.

<sup>131</sup> 同上， p. 180.

<sup>132</sup> 同上， p. 177.

<sup>133</sup> 同上， p. 183.

<sup>134</sup> 大塚忠義（1996）『剣道時代』，4月号，スキージャーナル，p. 23.

<sup>135</sup> 同上， p. 23.

<sup>136</sup> 木寺英史（2014）『日本刀を超えて』，スキージャーナル，p. 98.

突時の評価)と「経過性技術」<sup>137</sup>(打突前後の過程評価)を含むとし,“いかに相手を打突するか”という課題を持つ「経過性技術」<sup>138</sup>が「剣道らしさ」<sup>139</sup>の正体であり,刀の技法と思想から継承されたという.それを継承し,合理的な打突動作を行うために近世の歩行形態の導入によって,技術的に解決しようと丹念にして具体性のある提案をしている.

## 2. 大保木輝雄の理論

これに対して大保木は,“剣道の理念”制定者の思想のルーツを辿り,剣理剣道が想定する竹刀操作(打突技法)と日本刀操作(斬撃技法)は似て非なるものである<sup>140</sup>と指摘する.しかしながら,大保木は剣理に込められた刀の技法を支える“機をみる”という思想<sup>141</sup>を共有することによって,剣理剣道とあてっこ剣道の両方に活かすことが可能であると考えた.その思想とは,あてっこ剣道にみられる相手に「打って勝つ」<sup>142</sup>ことではなく,「勝って打つ」<sup>143</sup>(形稽古の精神)ことだとされる.“勝って打つ”とは単に打突前に有利になって打突することではなく,打つべき好機を打突前に把捉することであり,例えば新陰流の十字勝ちあるいは一刀流組太刀の切落しなどの

---

<sup>137</sup> 同上, p. 99.

<sup>138</sup> 同上, p. 99.

<sup>139</sup> 同上, p. 118.

<sup>140</sup> 大保木氏への聞き取り 2018. 3. 23.

<sup>141</sup> 同上.

<sup>142</sup> 同上.

<sup>143</sup> 同上.

形稽古に体现されている<sup>144</sup>という。つまり、形稽古で表現される仕太刀（勝つ側）は「身を捨てて」<sup>145</sup>、一足一刀の間合に打たせに入ること、打太刀（負ける側）が打突する必然的な状況を作り出し、そこに生じる“機をみて”行う「一刀」<sup>146</sup>を体得することを指す。大保木はそれを必然的に正しい刃筋が生れる「身心技法」<sup>147</sup>と定義し、この技法に剣理の核心を見ている。ここから大保木は、“剣の理法”には日本刀での切り合いとは対照的な文化性があるとして大塚、木寺の論と対立した見解を示す一方、この文化性は竹刀でも表現可能であるとして、あてっこ剣道克服への道を示した。

竹刀操作の合理性、美的価値を追求して行く道を示した大塚、木寺に対して、刀法のなかに法則的なものを見て、それを現代の剣道に活かすことを考える両者は、あてっこ剣道克服への二つの道を示したといえる。

---

<sup>144</sup> 大保木輝雄（2017）『武道』、3月号、日本武道館、p.92.

<sup>145</sup> 同上。p.94.

<sup>146</sup> 同上、p.104.

<sup>147</sup> 大保木輝雄（2016）『武道』、6月号、日本武道館、p.68.

## おわりに

本章では、剣道の理念制定以降（1975）を対象とし、当該時期における型の術理と競技スポーツ性の対抗関係を明らかにした。主な成果は以下の通りである。

1) 戦後に剣道の禁止を受けて始まった撓競技は“一点”として数量的に評価する方法をとったため、結果的にあてっこという展開を助長した。その後、1952（昭和 27）年に全剣連が全日本撓競技連盟と合併し、打突（打ち合い）前後の過程とその質をも含めた動作を“一本”として評価する方法をとったが、あてっこ現象は衰えず、1975（昭和 50）年に“剣道の理念”が制定され、その歯止めが強まった。2003（平成 15）年の“剣道指導の心構え”で“剣道の理念”の具体的な方向性を示したが、なお存在を失っていない。

2) “剣道の理念”が制定（1975）されてから 2002（平成 14）年にかけて有効打突の規則は詳細に規定され、結果的にあてっこの的な打突は是正される状況になってきた。ここに、稽古及び試合の実践者たちを剣理剣道へと志向させ、あてっこ剣道を是正しようとする、全剣連の意志と立場を見ることができる。

3) ①剣理剣道とは、正しい姿勢を乱さず、攻防へと容易に移れる無理・無駄のない動きで行い、またそれが機能美と結びついて品格を養成する剣道である。②あてっこ剣道の勝利のみを意識する態度は、心の乱れ、心法の未熟とされ、それが技法に影響して、有効打突の成就が難しい。

4) 小川ら有力な剣理剣道家の言説を分析した結果、上記 3)

と同じ剣理の欠如体であるという帰結を見た。一方、あてっこ剣道の剣理剣道に対する主張は以下の点にある。あてっこ剣道は①競技規則上は違背性がない，②現代剣道に内在する積極的（ダイナミック）な動作を持つ，③規則内において技の多様性を持つ。これらはあてっこ剣道が根強く残存する要因と考えられた。

本章を総括すれば，“剣道の理念”制定後は，それまでの競技スポーツ性を保持しながら次第に型の術理の重要性が再認識されていく時期である。剣理剣道は機能美と結びついた品格と姿勢を乱さず即，攻防に移れるような無理・無駄のない動きで行われる。あてっこ剣道はあくまで競技における積極的で多様な打つ・突く・かわすというスポーツ的技術の次元で行われる。1975（昭和50）年の理念制定以降，二つの剣道が明確となって今日に至る。あてっこ剣道が根強く残存する要因には①競技規則上は違背性がない，②現代剣道に内在する積極的（ダイナミック）な動作を持つ，③規則内において技の多様性を持つことが挙げられる。これに加えて戦後の剣道復活の過程にみられた打突のポイント化の傾向が影響している。剣道研究者らの議論を用いればあてっこ剣道が減少する可能性はあるが，あてっこ剣道は現状では衰えておらず，現代剣道という枠の中で剣理剣道と対抗し，批判にさらされながら今後も併存するであろう。

# 終章

## 第一節 成果

本論文の目的は、明治期から現代に至る競技としての日本剣道の形成過程を探究することを通して、剣道における型の術理と競技スポーツ性との対抗関係の解明することにあつた。主な成果は以下の通りである。

- (1) 江戸中期から後期は型の術理を基本としながらも、結果的に競技スポーツ性の萌芽がみられた時期である。

江戸中期、江戸初期に体系化された形稽古を補完するために竹刀打込稽古が開始されたが、江戸後期には竹刀打込稽古のみを修業する者が増加し、形に示された日本刀の操作法を逸脱する竹刀独自の技術（引き揚げや片手技、踏み込み動作）が見られるようになった。さらに、当該時期は当てさえすればよいとする実態（1822）、勝敗を示す“一本”という言葉（1843）がみられるようになる。

明治期から昭和天覧試合（1929）までは、学生による公明正大な勝利の追求によって競技スポーツ性が次第に台頭し、型の術理が薄れていく時期である。明治初年、剣道は一時衰退したが、旧制中学校の設立に伴い柔道とともに撃剣が校友会などの活動（部活動）として実施された。明治後半、中学校体育教科として“柔術”、“撃剣”が採用され、撃剣における普及の度合いが強くなった。そのため、剣術の流儀を超えた剣道の基礎・基本を示す大日本帝国剣道形（現日本剣道形）が制定された。その後の学生たちの関心は公明正大な勝利の追求を通じて剣道そのものが持つ新たな価値を見いだ



そうとしたことにある。具体的には、明治期から大正期にかけて旧制高校は武士的精神（公正，廉恥，勇猛，剛健などを含む），道具，審判制度，技術の工夫によって公明正大な勝利を追求した。このことが学生剣道の理念（審判の公明性と競技化の追求）形成に一定の貢献を果たした。当該時期の旧制高校における公明正大な勝利の追求は，竹刀操作と刀剣の観念との乖離を生み出しながら，結果的に近代スポーツに類似した競技文化を作り上げていった。そのことが戦後剣道の復活の原動力となり，“あてっこ剣道と剣理剣道”の併存をもたらす契機となった。

(2) 戦争が続いた1930年から日本の敗戦(1945)までは，剣道の型の術理が実戦性の観点から見直されると共に，競技スポーツ性が薄れていく時期である。1937年，国民に戦時意識を徹底させる“国民精神総動員運動実施要綱”が定められた。そのため剣道は，“実戦即応”の技術習得が求められた。その一環として，武徳会は試合を三本勝負から一本勝負に改め，1941年からは日本刀の操作法に適った“斬突”を試合で重視した。こうしたなかで剣道において主流となっていた竹刀操作の実戦性が一部で酷評され，日本刀の操作法に対する関心が高まっていった。

(3) 日本が敗戦して(1945)から剣道の理念制定(1975)までは，戦前に比べて剣道の競技スポーツ性が一気に高まり，それに伴って型の術理は一気に希薄化する時期である。日本は敗戦を迎え，GHQによる思想統制によって，剣道は“日本刀(剣)の観念”を払拭した“体育・スポーツ”として再生し，1952年，全日本剣道連盟が設立された。その後，国

民体育大会への参加も公認され“打突による竹刀剣道”として復活した。しかし、これはやがて姿勢を崩してまでも勝敗にこだわる“当てる技術”（当打）を助長するに至った。当てる技術の助長は、敗戦から1991年まで型の術理を示す日本剣道形が学校教育から下火となったことも影響した。このことを憂いた戦前・戦後を体験している剣道指導者たちは、1975年に“剣道の理念”と“剣道修行の心構え”を制定し、剣道修行に励んだ先人の精神性の継承を願った。

- (4) “剣道の理念”制定後は、それまでの競技スポーツ性を保持しながら次第に型の術理の重要性が再認識されていく時期である。剣理剣道は日本剣道形をベースにし、機能美と結びついた品格と姿勢を乱さず即、攻防に移れるような無理・無駄のない動きで行われる。あてっこ剣道は日本剣道形をベースとせず、あくまで競技における積極的で多様な打つ・突く・かわすというスポーツ的技術の次元で行われる。1975年の理念制定以降、二つの剣道が明確となって今日に至る。あてっこ剣道が根強く残存する要因には①競技規則上は違背性がない、②現代剣道に内在する積極的（ダイナミック）な動作を持つ、③規則内において技の多様性を持つことが挙げられる。これに加えて戦後の剣道復活の過程にみられた打突のポイント化の傾向が影響している。剣道研究者らの議論を用いればあてっこ剣道が減少する可能性はあるが、あてっこ剣道は現状では衰えておらず、現代剣道という枠の中で剣理剣道と対抗し、批判にさらされながら今後も存続するであろう。

このように、競技スポーツ性と型の術理は競技としての剣道の形成過程のなかで対抗しながら今日まで併存してきたのである。

## 第二節 課題

江戸時代に形稽古を補完するために竹刀打ち込み稽古（撃剣）が始まった。竹刀打ち込み稽古があてっこ剣道を生み出すという剣道史の定説は、あてっこ剣道には剣術の目的である“斬る”が“あてる”に変質したこと示している。この変質が剣術に技術的汎用性をもたらし、誰にでも行うことの出来る大衆的な文化として今日に至ったといえる。

将来の剣道の発展を考えると、重要な問題の一つは剣道における試合、昇段審査、稽古の関係を追求することにあると考えられる。そのためには、次の三つの課題が挙げられる。

- ① 競技剣道の形成過程をさらに検討する。
- ② 昇段審査と稽古、試合の関係を明確にする。
- ③ 日本剣道形に示された所作や動きの意味を明確にするために剣術（一刀流や新陰流）の形稽古を探究する。

## 引用・参考文献

- 安藤雄一郎（2017）『剣道日本』，5月号，スキージャーナル．
- 安藤雄一郎（2017）『剣道日本』，9月号，スキージャーナル．
- 一高弥生会（1941）『先輩佐々木保蔵氏追悼号』，一高弥生会．
- 加藤橘夫（1985）『加藤橘夫著作選集』，ベースボールマガジン．
- 関東学生剣道連盟（2002）『関東学生剣道連盟五十周年記念誌』，関東学生剣道連盟．
- 岸野雄三・多和健雄（1972）．『スポーツの技術史：近代日本のスポーツの歩み』，大修館．
- 魚住孝至他（2014）「日本の武道文化の成立基盤-新陰流と一刀流剣術の研究を通じて」，武道・スポーツ科学研究所年報 19．
- 恵土幸吉（1993）『全日本学生剣道連盟四十周年記念史』，全日本学生剣道連盟．
- 源了圓（1989）『型』，創文社．
- 高岡謙治（1980）『剣聖内藤高治』，体育とスポーツ出版．
- 国民新聞運動部編著（2000）『日本野球史』，ミュージアム図書．
- 今村嘉雄（1967）『十九世紀における日本体育の研究』，不味堂書店．
- 今村嘉雄他（1966）『日本武道全集』（全7巻），人物往来

社.

- 今村嘉雄他 (1982) 『日本武道体系』(全 10 巻), 同朋舎出版.
- 根岸信五郎 (1884) 『撃剣指南』, 東京金玉出版.
- 佐々木博嗣 (2003) 『武蔵の剣 剣道二刀流の技と理論』, スキージャーナル.
- 坂上康博 (2016) 「GHQ 占領下における剣道: 規制, 存続, スポーツ化, 芸能化の諸相」(2016), 一橋大学スポーツ研究 (35).
- 坂本太一 (2015) 「剣道における技の体系の変遷過程に関する研究: 竹刀に着目して」日本体育大学スポーツ科学研究 (3).
- 三橋秀三 (1954) 『学校剣道』, 新体育社.
- 三藤芳生 (2015) 『武道』, 4 月号, 日本武道館.
- 三藤芳生 (2016) 『武道』, 6 月号, 日本武道館.
- 三藤芳生 (2017) 『武道』, 1 月, 日本武道館.
- 三藤芳生 (2017) 『武道』, 2 月号, 日本武道館.
- 三藤芳生 (2017) 『武道』, 3 月号, 日本武道館.
- 三藤芳雄 (2016) 『武道』, 6 月号, 日本武道館.
- 三藤芳雄 (2016) 『武道』, 9 月号, 日本武道館.
- 三藤芳雄 (2017) 『武道』, 1 月号, 日本武道館.
- 三藤芳雄 (2017) 『武道』, 3 月号, 日本武道館.
- 三藤芳雄 (2018) 『武道』, 11 月号, 日本武道館.
- 三藤芳雄 (2018) 『武道』, 7 月号, 日本武道館.
- 三藤芳雄 (2019) 『武道』, 7 月号, 日本武道館.
- 早稲田大学スポーツ科学学術院 (2011) 『教養としてのス

ポーツ科学：アクティブ・ライフの創出をめざして』，大修館書店．

- 酒井利信（1986）「現代剣道における打突技術に関する一考察：斬るという技術・意識を中心に」，筑波大学卒業論文・修士論文集．
- 酒井利信（2005）『日本精神史としての刀剣観』，第一書房．
- 寒川恒夫（2014）『日本武道と東洋思想』，平凡社．
- 小川忠太郎（1993）『剣道講話』，体育とスポーツ出版．
- 小沢一雄（1994）『剣道時代』，4月号，体育とスポーツ出版．
- 小沢一雄（1996）『剣道時代』，4月号，スキージャーナル．
- 小沢幸正（1978）「旧制高校剣道と旧制富山高校剣道」，旧制高校史研究，16号．
- 小林伸郎（2017）『剣道時代』，10月号，体育とスポーツ出版．
- 小林伸郎（2017）『剣道時代』，1月号，体育とスポーツ出版．
- 小林伸郎（2017）『剣道時代』，2月号，体育とスポーツ出版．
- 小林伸郎（2017）『剣道時代』，3月号，体育とスポーツ出版．
- 小林伸郎（2017）『剣道時代』，4月号，体育とスポーツ出版．
- 小林伸郎（2017）『剣道時代』，6月号，体育とスポーツ出版．

版.

- 小林伸郎 (2017) 『剣道時代』, 7月号. 体育とスポーツ出版.
- 小林伸郎 (2017) 『剣道時代』, 8月号, 体育とスポーツ出版.
- 小林伸郎 (2017) 『剣道時代』, 9月号, 体育とスポーツ出版.
- 庄司宗光 (1996) 『剣道百年』, 時事通信社.
- 庄子宗光 (1956) 『剣道五十年』, 時事通信社.
- 新田満夫 (1985) 『武徳会誌』 (復刻版), 雄松堂出版.
- 新田満夫 (1985) 『武徳誌』 (復刻版), 雄松堂出版.
- 森川竜一 (1983) 『無刀流秘録 香川善次郎伝』, 香川善次郎伝刊行会.
- 秦郁彦 (2003) 『旧制高校物語』, 文春新書.
- 杉江正敏 (2017) 『写真と記事でたどる武道の近代史』, 日本武道館.
- 菅野覚明 (2004) 『武士道の逆襲』, 講談社現代新書.
- 西山松之助 (1959) 『家元の研究』, 校倉書房.
- 石井邦夫訳註・佚斎樗山 (2014) 『天狗芸術論・猫の妙術』, 講談社.
- 石田和外・吉田一郎 (1980) 『石田和外遺文抄』, 石田恭子.
- 川上栄一 (1940) 『礫荘雑話』, 菁莪書院.
- 浅見裕 (1979) 「体育教材としての剣道に関する研究 (その1): 剣道のスポーツ化関連して」. 岩手大学教育学部研究年報, 39.

- 浅見裕（1979）「体育教材としての剣道に関する研究（その1）：剣道のスポーツ化関連して」岩手大学教育学部研究年報，39.
- 全日本剣道連盟（1978）『全剣連広報』，30号，全日本剣道連盟.
- 全日本剣道連盟（1982）『三十年史』，全日本剣道連盟.
- 全日本剣道連盟（1987）『全剣連広報』，70号，全日本剣道連盟.
- 全日本剣道連盟（2000）『剣道和英辞典』，全日本剣道連盟.
- 全日本剣道連盟（2003）『剣道の歴史』，全日本剣道連盟.
- 全日本剣道連盟（2003）『五十年史』，全日本剣道連盟.
- 全日本剣道連盟（2007）『剣窓』，4月号，全日本剣道連盟.
- 全日本剣道連盟（2008）『剣道指導要領』，全日本剣道連盟.
- 村山輝志・国分国友（1975）『剣道試合審判規定：規定の変遷史』，スキージャーナル.
- 村山輝志（1976）「審判規定の変遷からみた武道（柔・剣道）の性格」武道学研究9.
- 大塚忠義・坂上康博・宇都宮伸二（1990）『のびのび剣道学校』，窓社.
- 大塚忠義（1984）「近代剣道批判 第2部ルール形成過程の考察その1－昭和2年規程以前の剣術の意味と思想性－」，高知大学教育学部研究報告.
- 大塚忠義（1989）「近代剣道批判 第2部：ルール形成過



程の研究その3－虚構的技術の発展と規定の二重構造による軍事的再利用の研究－」，高知大学教育学部研究報告．

- 大塚忠義（1990）「近代剣道批判 第1部：現代剣道の技術をめぐる状況と剣道論」，高知大学教育学部研究報告．
- 大塚忠義（1990）「近代剣道批判 第2部：ルール形成過程の研究その4－現代剣道の理念とルール形成過程の研究－」，高知大学教育学部研究報告．
- 大塚忠義（1995）『日本剣道の思想』，窓社．
- 大塚忠義（1995）『日本剣道の歴史』，窓社．
- 大塚忠義（2005）『剣士に告ぐ：日本剣道の未来のために』，窓社．
- 大野久磨夫（1968）『剣士一代』，日本武教社．
- 第一高等学校（1890－1940）『校友会雑誌』．
- 第一高等学校寄宿寮編（1930）『向陵誌』，第一高等学校寄宿寮．
- 第二高等学校（1893－1947）『尚志會雑誌』．
- 第二高等学校（1911－1935）『同窓会会報』．
- 第二高等学校史編集委員会（1979）『第二高等学校史』，第二高等学校尚志同窓会．
- 第三高等学校（1899－1940）『嶽水會雑誌』．
- 第四高等学校（1895－1940）『北辰會雑誌』．
- 第五高等学校（1891－1948）『龍南會雑誌』．
- 第六高等学校（1902－1916）『校友会會誌』．
- 第六高等学校（1917－1940）『校友会誌』．
- 竹内洋（1999）『学歴貴族の栄光と挫折』，中央公論新社．
- 中村敏雄（1998）『日本文化の独自性』，創文企画．

- 中村民雄（1985）『近代剣道史』，島津書房．
- 中村民雄（1985）『史料 近代剣道史』，島津書房．
- 中村民雄（1991）「武道の技術史研究序説」武道学研究（24）．
- 中村民雄（1994）『剣道辞典 技術と文化の歴史』，島津書房．
- 中村民雄編（2003）『近代剣道書選集』，第五卷所収，本の友社．
- 中嶋哲也（2017）『近代日本の武道論』，国書刊行会．
- 中野竜夏（1989）『剣道日本』，12月号，スキージャーナル．
- 朝日新聞社（1975）『朝日新聞』，1.8，朝日新聞社．
- 長尾進（1982）「剣道における有効打突基準の変遷について：打突部位の問題を中心に」，筑波大学卒業論文・修士論文集．田中美和（1983）「剣道における掛声の効用についての一考察」，筑波大学卒業論文・修士論文集．
- 長尾進（1996）「近世・近代における剣術・剣道の変質過程に関する研究 面技の重視と技術の変容」，明治大学人文科学研究所紀要．
- 日本学校体育研究連合会（1952）『学校体育』，8月，日本学校体育研究連合会．
- 日本経済新聞社（2018）『日本経済新聞』，7月6日，日本経済新聞社．
- 文部科学省（2017）『高等学校学習指導要領解説 保健体育編 体育編』，文部科学省．
- 平川新（2008）『日本の歴史』，12巻，小学館．

- 毎日新聞社（2015）『毎日新聞』，4月26日，毎日新聞社．
- 木寺英史（2014）『日本刀を超えて』，スキージャーナル．
- 矢野裕介（2014）「1900年前後における剣術の体操化過程にみる胴技の変容：小沢卯之助らの武術体操法に着目して」，体育学研究（59）．
- 友添秀則（2009）『現代スポーツ評論 21』，創文企画．
- 立木幸敏（2016）「小野派一刀流における切落の由来について－三重および五点を参考に」，国際武道大学研究紀要（32）．
- 鈴木智也（1996）『剣道日本』，4月号，スキージャーナル．
- 國民思潮社（1918）『国民思潮』，第7巻．
- 渡辺一郎（1971）『明治武道史』，新人物往来社．
- 渡辺一郎（1979）『武道の名著』，東京コピー出版部．
- 渡辺一郎（1980－1988）『近代武道史研究資料集』，筑波大学体育科学系．
- 渡辺一郎（1988）『日本武道学研究：渡邊一郎教授退官記念論集』，島津書房．

【引用 URL】

- 「OKWAVE」 <https://okwave.jp/> (2018, 2, 12 閲覧),
- 「Yahoo 知恵袋」  
<https://chiebukuro.yahoo.co.jp/?fr=common-navi>  
(2018, 2, 12 閲覧)
- 「全日本剣道連盟 HP」 <https://www.kendo.or.jp/>  
(2019, 9, 7 閲覧)

# 資料

## 第一章 戦前における剣道競技の展開：旧制高校を中心に

### 1. 一高『校友会雑誌』における武道関係記事

#### (1) 剣道

年号	著者・タイトル	主な内容	号・ページ
1891	不詳・「撃剣部大会」	撃剣を学ぶことについて	3号・ pp. 42-44
	不詳・「撃剣部規則」	部のルール	9号・ pp. 3-4
	不詳・「撃剣部秋季大会」	試合結果，大会運営の反省	10号・ pp. 33-37
	藍谷時敏・「秋季撃剣大会ヲ記シ并セテ所感ヲ述フ」	大会の感想，撃剣を学ぶことについて	10号・ pp. 38-41
	不詳・「校友会委員会及其の結果」	撃剣部の予算	15号・ pp. 30-31
1893	武骨生・「剣道一斑」	根岸信五郎『撃剣指南』の紹介	23号・ pp. 22-28
	河田景与・「剣術の無形的に必要なことを述ふ」	竹刀をもって行う剣道が精神的に必要な理由	24号・ pp. 15-18
	不詳・「撃剣部第五回大会」	試合結果，試合内容	24号・ pp. 57-62
	不詳・「撃剣部寒稽古」	皆勤者について	24号・ pp. 62-63
	不詳・「撃剣部小集会」	会の実施報告	26号・ pp. 73-74
	不詳・「撃剣部小集会」	試合結果	31号・ pp. 49-47
	根岸信五郎（撃剣部教	試合で有利な竹刀の長さ	32号・

	師)・「竹刀長短の優劣」	について	pp. 15-19
1894	不詳・「撃剣部寒稽古」	寒稽古実施のお知らせ	33号・ pp. 49-50
	不詳・「撃剣部概況」	寒稽古実施報告・撃剣を学ぶことについて	34号・ pp. 60-62
	か, と生・「撃剣部第六回大会」	試合結果, 試合内容	35号・ pp. 69-73
	不詳・「撃剣部小集会」	試合結果	40号・ pp. 93-94
1895	不詳・「撃剣部近況」	寒稽古実施報告	44号・ pp. 73-74
	不詳・「校友会委員会」	撃剣部の予算	44号・ p. 68
	不詳・「第七回撃剣部大会並びに撃剣部慰労親睦会」	大会実施報告, 試合内容, 慰労会実施報告	45号・ pp. 54-58
	不詳・「撃剣部近況」	試合結果, 試合内容	47号・ pp. 58-60
	不詳・「撃剣部報」	試合結果	52号・ pp. 77-78
1896	不詳・「撃剣部寒稽古」	寒稽古実施のお知らせ	53号・ pp. 80-81
	不詳・「撃剣部寒稽古結局」	寒稽古実施報告	54号・ pp. 83-84
	お, み・「第八回撃剣部大会」	試合結果, 試合内容	55号・ pp. 59-66
	講武道人・「劔華餘録」	試合結果, 試合内容	56号・ pp. 20-29
	研刀生・「撃剣部近況」	試合結果, 試合内容	57号・ pp. 76-81
	印東劔侠・「撃剣部	試合結果, 試合内容	58号・

	報」		pp. 64-69
	不詳・「擊劍部近況」	部の現状	59号・ pp. 75-76
	印東劍俠・「擊劍部々報」	試合結果，試合内容	60号・ pp. 52-55
1897	不詳・「擊劍柔道兩部近況」	部の現状	64号・ pp. 92-93
1897	不詳・「擊劍部大會」	試合結果，試合内容	65号・ pp. 75-84
	不詳・「委員會決議ノ事項」	擊劍部の予算	67号・ pp. 65-66
	部員某・「擊劍部報」	試合結果，試合内容，渡邊昇の演説	67号・ pp. 77-81
	駿山生・「擊劍部報並望部員諸士」	劍道を学ぶ理由，試合結果，試合内容	68号・ pp. 64-69
	不詳・「擊劍部報」	試合結果	70号・ pp. 70-72
1898	不詳・「擊劍柔道兩部寒稽古開始」	寒稽古開始のお知らせ	73号・ p. 55
	琵琶法師・「擊劍部紅白勝負の事」	試合結果，試合内容	74号・ pp. 51-62
	不詳・「擊劍部寒稽古」	寒稽古実施報告	74号・ pp. 86-88
	不詳・「擊劍部部報」	擊劍部の現状	75号・ p. 56
	不詳・「委員會及記名式」	擊劍部の予算	76号・ pp. 64-65
	二毛老人・「擊劍部第十回大會記事」	試合結果，試合内容	76号・ pp. 66-74
	沖天子・「擊劍部報」	試合結果，試合内容	77号・ pp. 87-94
	不詳・「擊劍部報」	試合結果，試合内容	78号・



			pp. 76-80
	部員某・「擊劍部報」	擊劍部の現状	79号・ pp. 67-68
	不詳・「擊劍部報」	試合結果	81号・ pp. 58-62
	不詳・「擊劍部報」	試合結果，試合内容	82号・ pp. 80-85
1899	不詳・「擊劍部寒稽古」	寒稽古実施報告	84号・ pp. 75-79
	不詳・「擊劍部武邊會」	試合結果，試合内容	86号・ pp. 80-85
	不詳・「校友會會計報告」	擊劍部の予算	86号・ p. 93
	擊劍部員・「第十一回擊劍部大會記事」	試合結果，試合内容	88号・ pp. 44-62
	部員・「擊劍部員の昇級」	部内の昇級者一覧	88号・ p. 95
	委員・「擊劍部報」	試合結果	91号・ pp. 65-67
	委員・「擊劍部報」	試合結果	92号・ pp. 57-59
1900	委員・「擊劍部紅白勝負記事」	試合結果，試合内容	93号・ pp. 59-61
	不詳・「擊劍部寒稽古」	寒稽古実施報告	95号・ pp. 81-83
	武辺侠・「擊劍部大会概評」	試合結果，試合内容	96号・ pp. 21-37
1900	部員・「擊劍部報」	試合結果，試合内容	97号・ pp. 78-84
	委員・「擊劍部報」	試合結果，試合内容	98号・ pp. 116- 120

	委員・「擊劍部報」	昇級者一覽	99号・ p. 81
	委員・「擊劍部報」	試合結果，試合内容	101号・ pp. 53-60
	三部齊東野人・「擊劍紅白勝負記事」	試合結果，試合内容	102号・ pp. 50-59
1901	委員・「擊劍部報」	寒稽古実施報告	104号・ pp. 93-96
	碧天生・「第十三回擊劍部大會記事」	試合結果，試合内容	106号・ pp. 36-52
	委員・「擊劍部々報」	試合結果，試合内容	108号・ pp. 99-106
	一部委員・「擊劍部小集會記事」	試合結果，試合内容	111号・ pp. 77-81
	武香生・「擊劍部紅白勝負記事」	試合結果，試合内容	112号・ pp. 115-108
1902	委員・「擊劍部報」	寒稽古実施報告	115号・ pp. 56-59
	碧天生・「擊劍部第十四回大會記事」	試合結果，試合内容	116号・ pp. 56-72
	委員・「擊劍部報」	試合結果，試合内容	118号・ pp. 94-101
	不詳・「擊劍部報」	試合結果，試合内容	120号・ pp. 61-66
	不詳・「擊劍部々報」	試合結果，試合内容	122号・ pp. 61-65
	不詳・「擊劍部報」	寒稽古実施報告	125号・ pp. 55-58
1903	不詳・「擊劍部明治三十五年度會計報告」	擊劍部の會計	125号・ pp. 58-60
	不詳・「擊劍部報」	試合結果，試合内容	126号・

			pp. 79
	白龍生・「撃劔部報」	試合結果，試合内容	128号・ pp. 148- 157
	委員・「撃劔部報」	根岸信五郎の代わりに得能関四郎を撃劔部教授に迎える，試合結果，試合内容	131号・ pp. 58-65
1904	不詳・「撃劔部報」	寒稽古実施報告	135号・ pp. 70-72
	桂城生・「撃劔部報」	試合結果，試合内容	136号・ pp. 64-73
	不詳・「撃劔部報」	試合結果，試合内容（二高対交戦），会計報告	137号・ pp. 87-101
1904	不詳・「撃劔部報」	部の現状，試合結果	139号・ pp. 54-59
	不詳・「撃劔部報」	試合結果，試合内容	141号・ pp. 96-102
1905	不詳・「撃劔部報」	試合結果	144号・ pp. 74-75
	不詳・「撃劔部報」	寒稽古実施報告，試合結果，試合内容	145号・ pp. 108- 117
	不詳・「撃劔部報」	試合結果，試合内容	146号・ pp. 74-81
	不詳・「撃劔部報」	試合結果，会計報告	147号・ pp. 80-83
	不詳・「撃劔部報」	試合結果	148号・ pp. 107- 111
	不詳・「撃劔部報」	新入部員の紹介	149号・ pp. 48-50

	不詳・「擊劍部報」	試合結果，試合内容	150号・ pp. 69-73
	不詳・「擊劍部報」	試合結果，試合内容	151号・ pp. 88-92
	不詳・「擊劍部報」	昇級者一覽	152号・ pp. 114- 115
1906	不詳・「擊劍部報」	寒稽古実施報告	155号・ pp. 61-67
	不詳・「擊劍部大會部報」	試合結果，試合内容	157号・ pp. 53-64
	不詳・「擊劍部報」	試合結果，会計報告	158号・ pp. 109- 112
	不詳・「擊劍部報」	試合結果，藍谷時敏の演説	159号・ pp. 54-57
	不詳・「擊劍部報」	昇級者一覽	160号・ p. 96
	不詳・「擊劍部報」	試合結果	161号・ pp. 55-56
	不詳・「擊劍部報」	試合結果	162号・ pp. 77-78
1907	委員・「擊劍部報」	寒稽古実施報告，試合結果，試合内容	165号・ pp. 100- 105
	キシ・「擊劍大會」	大会のお知らせ	167号・ p. 49
	委員・「擊劍部報」	試合結果，試合内容	168号・ pp. 77-93
	不詳・「擊劍部部報」	試合結果	172号・ pp. 52-56
1908	不詳・「擊劍部報」	試合結果	173号・

			pp. 49-50
	不詳・「擊劍部報」	寒稽古実施報告，試合結果，試合内容	175号・ pp. 92-99
	不詳・「擊劍部大會」	大会の実施報告	177号・ p. 52
	劍狂生・「第廿回擊劍部大會記事」	試合結果，試合内容	177号・ pp. 60-78
1908	劍狂生・「擊劍部報」	試合結果，試合内容	181号・ pp. 77-82
	黒主翁・「擊劍部報」	試合結果	182号・ pp. 106-109
1909	不詳・「擊劍部々報」	寒稽古実施報告，試合結果	185号・ pp. 77-82
	不詳・「擊劍部報」	試合結果，試合内容	188号・ pp. 63-68
	不詳・「擊劍部部報」	試合結果	189号・ pp. 92-95
	少陵生・「擊劍部報」	試合結果，試合内容	191号・ pp. 63-78
1910	不詳・「擊劍部々報」	試合結果	195号・ pp. 63-66
	不詳・「擊劍部報」	試合結果，試合内容	197号・ pp. 68-80
	不詳・「擊劍部報」	部の現状，試合結果，試合内容	201号・ pp. 43-48
1911	委員・「擊劍部部報」	寒稽古実施報告，試合結果	204号・ pp. 72-76
	不詳・「校友會々計決算報告書」	擊劍部の決算と予算	204号・ pp. 122-123
	不詳・「擊劍部報」	試合結果	207号・

			pp. 79-83
	不詳・「撃剣部々報」	部の現状	209号・ pp. 58-59
	不詳・「撃剣部々報」	試合結果	211号・ pp. 69-71
1912	委員・「撃剣部々報」	寒稽古実施報告	214号・ pp. 63-67
	不詳・「校友会々計決算報告書」	撃剣部の決算と予算	214号・ pp. 98-99
	不詳・「撃剣部報」	試合結果	216号・ pp. 32-36
1913	不詳・「撃剣部報」	寒稽古実施報告，試合結果	225号・ pp. 90-95
	不詳・「撃剣部第二十五回大會記事」	試合結果，試合内容	226号・ pp. 123-131
	不詳・「撃剣部々報」	試合結果，試合内容	231号・ pp. 23-30
1914	不詳・「撃剣部部報」	寒稽古実施報告，試合結果	235号・ pp. 15-22
	禰津・「對二高撃剣試合交渉顛末」	二高との試合不成立	236号・ pp. 60-62
	不詳・「撃剣部部報」	試合結果，試合内容	238号・ pp. 78-84
1915	不詳・「撃剣部部報」	寒稽古実施報告，試合結果	244号・ pp. 39-46
	不詳・「撃剣部部報」	昇級者一覧	246号・ pp. 85-86
	不詳・「撃剣部部報」	試合結果	249号・ pp. 97-101
1916	不詳・「撃剣部々報」	寒稽古実施報告	254号・ pp. 64-65

	不詳・「撃剣部部報」	試合結果	256号・ pp. 93-95
1916	不詳・「撃剣部々報」	試合結果	257号・ pp. 61-63
1917	不詳・「撃剣部々報」	寒稽古実施報告，試合結果	265号・ pp. 25-32
	不詳・「撃剣部部報」	試合結果	268号・ pp. 99-102
1918	不詳・「撃剣部部報」	寒稽古実施報告，試合結果	273号・ pp. 47-52
1919	不詳・「撃剣部々報」	試合結果，試合内容	277号・ pp. 48-59
1922	不詳・「撃剣部報」	彌生會北陸遠征之記	289号・ pp. 100-103
	不詳・「大正十年度第一高等学校校友會々計決算報告書」	撃剣部の決算と予算	289号・ pp. 103-104
1923	不詳・「撃剣部對二高試合顛末」	二高との試合実施報告	292号・ pp. 88-91
1926	不詳・「撃剣部々誌」	寒稽古実施報告，試合結果，試合報告	306号・ pp. 2-8

## (2) 柔道

年号	著者・タイトル	主な内容	号・ページ
1891	不詳・「柔道部紅白試合」	試合実施報告	7号・p. 28
	不詳・「柔道部規則」	部の規則	9号・pp. 2-6
	不詳・「柔道部大會」	試合結果，試合内容	11号・pp. 31-35
1892	不詳・「柔道部大會」	試合結果，試合内容	21号・pp. 23-28

1893	不詳・「柔道部紅白試合」	試合結果, 試合内容	32号・pp.35-37
1894	不詳・「柔道部寒稽古」	寒稽古実施のお知らせ	33号・p.50
	不詳・「柔道部勝負」	寒稽古実施報告	35号・pp.74-75
	不詳・「柔道部大會」	試合実施報告	37号・pp.80-83
1895	不詳・「校友會委員會」	柔道部予算	44号・p.68
	不詳・「柔道部寒稽古の終結」	寒稽古実施報告	44号・p.70
	不詳・「柔道部紅白試合」	試合結果	45号・pp.52-53
	不詳・「柔道部大會」	試合結果, 試合内容	48号・pp.101-105
	不詳・「柔道部月次勝負」	試合結果	51号・pp.84-85
1896	不詳・「柔道部規則改正廣告」	部の規則改正	53号・pp.1-2
	不詳・「柔道部寒稽古結了」	寒稽古実施報告	53号・pp.84-86
	漁長生・「柔道部大會」	試合結果, 試合内容	57号・pp.70-76
	不詳・「柔道部々聲」	試合結果, 試合内容	58号・pp.32-41
	不詳・「柔道部報」	試合結果	60号・pp.56-58
	無念生・「柔道部報」	試合結果, 試合内容	61号・pp.55-60
1897	不詳・「擊劍柔道兩部近況」	擊劍部と柔道部の現状	64号・pp.92-94
	部員・「柔道部々報」	試合結果, 試合内容	65号・pp.86-88
	角喜久治・「柔道」	柔道の歴史と技	66号・pp.8-17



		法	
	不詳・「委員会決議事項」	柔道部予算	67号・p.65
	な,り,生・「柔道部大会」	試合結果,試合内容	67号・pp.67-76
	不詳・「柔道部々報」	柔道部の現状	70号・pp.73-76
	部員・「柔道部月次勝負」	試合結果,試合内容	72号・pp.76-78
1898	不詳・「撃剣柔道兩部寒稽古開始」	寒稽古のお知らせ	73号・p.55
	不詳・「柔道部寒稽古概況」	寒稽古実施報告	74号・pp.88-92
	柔道部選手一同・「謝辞」	校友会に対する柔道部の謝辞	75号・不詳(目次の次ページ)
	不詳・委員会及記名式	柔道部予算	76号・pp.64-65
	不詳・「對第二高等学校柔道紅白勝負」	試合結果,試合内容	76号・pp.80-85
1898	南溟生・「柔道部大会記事」	試合結果,試合内容	77号・pp.78-86
	部員・「柔道部報」	試合結果	80号・pp.63-65
	部員・「柔道部報」	試合結果,試合内容	81号・pp.62-66
1899	部員・「柔道部寒稽古」	寒稽古実施報告	84号・pp.79-82
	柔道部撰手一同・「謝辞」	校友会に対する柔道部の謝辞	86号・不詳(目次の次ページ)
	不詳・「花吹雪」	二高との交渉,試合結果,試合内容	86号・pp.1-43
	不詳・「花吹雪」(第二)	撰手応援に関する注意,柔道部決算報告	87号・pp.1-26

	柔道部員・「柔道部大會記事」	試合結果，試合内容	88号・pp.62-70
	大會記者・「柔道部員の昇進」	昇級者一覧	88号・pp.96-97
	場末・「柔道部報」	部の現状，試合結果	92号・pp.60-67
1900	部員某・「柔道部報」	柔道実施の効果	93号・pp.61-63
	部員・「柔道部寒稽古」	寒稽古実施報告	95号・pp.84-87
	部員・「柔道部々報」	試合結果	96号・pp.76-78
	一部員・「柔道部大會記事」	試合結果，試合内容	97号・pp.30-43
	委員・「柔道部々報」	試合結果	98号・pp.113-116
	部員・「柔道部報」	部の現状	99号・pp.78-81
	委員・「柔道部報」	試合結果	100号・pp.66-68
	委員・「柔道部報」	試合結果，試合内容	101号・pp.60-65
1901	不詳・「柔道寒稽古」	寒稽古実施報告	105号・pp.76-78
	部員・「柔道々部報」	試合結果，試合内容	106号・pp.90-94
	影武者・「柔道部大會記事」	試合結果，試合内容	108号・pp.36-56
	委員・「柔道部記事」	試合結果，試合内容	112号・pp.102-108
1902	部員・「柔道部報」	試合結果，試合内容	114号・pp.101-109
	委員・「柔道部報」	寒稽古実施報告	115号・pp.59-63
	委員・柔道部々報	試合結果，試合内容	116号・pp.80-87
	水葉武者・「柔道部大會記事」	試合結果，試合内容	117号・pp.49-79
	柔道部委員・「仕合に就	試合出場の勧め	118号・pp.101-

	て」		105
	委員・「柔道部報」	試合結果，試合内容	121号・pp.83-88
1903	委員・「柔道部報」	寒稽古実施のお知らせ	124号・pp.56-57
	不詳・「柔道部報」	試合結果，試合内容	131号・pp.65-78
	不詳・「柔道部々報」	試合実施報告 (出稽古)	132号・pp.76-78
1904	不詳・「柔道部々報」	部の現状（柔道は art ではなく， principle)	133号・pp.67-68
	不詳・「柔道部々報」	寒稽古実施報告	135号・pp.76-79
	不詳・「柔道部々報」	試合結果，試合内容	137号・pp.101-115
	不詳・「柔道部報」	柔道部の現状	139号・pp.51-54
	不詳・「柔道部報」	送別会について	141号・pp.75-79
1905	不詳・「柔道部報」	寒稽古実施のお知らせ	143号・pp.86-87
	不詳・「柔道部報」	寒稽古実施報告	146号・pp.92-93
	不詳・「向陵の櫻」（聯合柔道大會）	試合結果，試合内容（高等商業との対抗試合）	146号・pp.1-19
	不詳・「柔道部報」	試合結果，試合内容，会計報告	148号・pp.116-137
	不詳・「柔道部報」	部の現状	149号・pp.45-48
	ロング生・「柔道部紅白勝負記事」	試合結果，試合内容	152号・pp.85-96
1906	柔道部選手一同・「謝辞」	校友会に対する柔道部の謝辞	155号・不詳（目次の次ページ）

	不詳・「柔道部報」[連合試合の記事]	試合結果, 試合内容	156号・pp. 1-16
	不詳・「柔道部報」	寒稽古実施報告	157号・pp. 64-66
	筑紫太郎・「柔道部報」	試合結果, 試合内容	158号・pp. 96-108
	不詳・「柔道部記事」	試合結果, 試合内容	162号・pp. 78-88
1907	委員・「柔道部報」	連合試合中止のお知らせ	164号・pp. 83-85
	プロト生・「柔道部報」	部の現状, 試合結果, 試合内容	168号・pp. 93-103
	不倒生・「柔道部報」	試合結果, 試合内容	171号・pp. 56-63
1908	不詳・「柔道部報」	寒稽古実施報告, 試合結果, 試合内容	176号・pp. 66-74
1908	長生・「柔道部部報」	試合結果, 試合内容	182号・pp. 94-105
1909	不詳・「柔道部々報」	寒稽古実施報告, 試合結果	185号・pp. 68-77
	不詳・「柔道部報」	試合結果	188号・pp. 69-73
1910	鐵冠生・「柔道部々報」	試合結果	194号・pp. 81-82
	不詳・「柔道部々歌」	部の歌	195号・p. 120
	不詳・「柔道部々報」	寒稽古実施報告, 二高との対抗試合会計報告	196号・pp. 99-106
	不詳・「柔道部々報」	試合結果・試合内容(二高との対抗試合)	197号・pp. 58-69
	不詳・「柔道部報」	試合結果, 試合内容	198号・pp. 85-89
	不詳・「柔道部々報」	部の現状, 試合	201号・pp. 41-43

		結果	
1911	不詳・「柔道部報」	寒稽古実施報告，試合結果	206号・pp.84-91
	不詳・「柔道部報」	試合結果	207号・pp.84-85
	不詳・「柔道部報」	試合結果	210号・pp.22-24
	不詳・「柔道部報」	部の現状，試合結果	211号・pp.65-69
1912	不詳・「柔道部報」	試合結果（附属中との対抗試合）	212号・pp.87-88
	不詳・「柔道部々報」	寒稽古実施報告	214号・pp.59-62
	不詳・「校友会々会計決算報告」	柔道部会計	214号・p.98
	不詳・「柔道部報」	試合結果	215号・pp.95-101
	不詳・「柔道部報」	試合結果，試合内容	216号・pp.36-45
1913	不詳・「對第二高學校柔道試合交渉顛末」	二高との試合中止	221号・pp.47-50
	不詳・「柔道部々報」	寒稽古実施報告	223号・pp.97-101
	長州・「第二十二回柔道部々報」	試合結果，試合内容	225号・pp.80-90
	長州生・「柔道部々報」	試合結果，試合内容	226号・pp.116-123
	不詳・「柔道部々報」	試合結果	227号・pp.119-122
1914	小林俊三・永野護「柔道部々報」	試合結果，試合内容（二高との対抗試合）	233号・pp.83-100
	不詳・「柔道部部報」	寒稽古実施報告	235号・pp.42-47
1915	齊藤・「柔道部々報」	試合結果	241号・pp.48-53
	不詳・「柔道部部報」	寒稽古実施報	247号・pp.119-

		告, 試合結果	126
1916	不詳・「柔道部部報」	試合結果, 試合内容	258号・pp.32-36
1917	不詳・「柔道部部報」	試合結果, 試合内容	264号・pp.87-92
1918	不詳・「柔道部部報」	二高との対抗試合決算報告	273号・pp.45-47
1924	不詳・「柔道部部報」	部の現状	300号・pp.2-7

### (3) 弓道

年号	著者・タイトル	主な内容	号・ページ
1891	不詳・「弓術部大會」	試合実施報告	7号・pp.30-31
	不詳・「弓術部規則」	部の規則	9号・p.8
	不詳・「入部案内」	弓術部の入部案内	9号・p.9
	不詳・「弓術部大會」	試合実施報告	12号・pp.46-47
1892	妙月生・「弓矢の考」	弓術の歴史	14号・pp.20-26
1893	不詳・「弓術部報」	試合実施報告	30号・pp.50-52
1894	不詳・「弓術部報」	試合実施報告, 弓術の技法	37号・pp.77-79
	不詳・「校友会委員会」	弓術部予算	44号・p.68
1895	不詳・「弓術部報」	試合結果	44号・pp.71-72
	不詳・「弓術部大會」	試合結果	47号・pp.60-61
	不詳・「弓術部報」	部の現状	51号・pp.85-86
	不詳・「弓術部報」	試合結果	52号・pp.79-80
1896	不詳・「弓術部大會」	試合結果	57号・pp.82-84
	部員・「弓術部員に檄す」	部の在り方	65号・pp.84-85
	不詳・「弓術部大會」	試合結果, 試合内容	68号・pp.69-74
1897	不詳・「弓術部報」	試合結果	71号・pp.64-65
1898	委員・「弓術部報」	部の現状	73号・pp.56-59

	不詳・「弓術部報」	寒稽古実施報告	74号・pp.100-101
	不詳・「弓術部大會」	試合結果, 試合内容	78号・pp.83-86
	不詳・「弓術部」	試合結果, 試合内容	84号・pp.82-85
1899	舊弓術部委員・「前々號各部寒稽古始の記者に答ふ」	寒稽古実施報告	85号・pp.66-67
	部員・「弓術部報」	試合結果, 試合内容	87号・pp.62-66
	部員・「弓術部報」	試合結果, 試合内容	91号・pp.67-71
1900	一部員・「弓術部寒稽古概況」	寒稽古実施報告	95号・pp.83-84
	部員・「弓術部報」	試合結果, 試合内容	97号・pp.84-88
	部員・「弓術部大會記事」	試合結果, 試合内容	98号・pp.43-53
	部員・「弓術部々報」	試合結果, 試合内容	98号・pp.120-124
	弓狂子・「弓術に就て」	弓術の技法	100号・pp.14-21
	一部員・「弓術部報」	試合結果, 試合内容	101号・pp.67-70
1901	一部員・「弓術部寒稽古」	寒稽古実施報告	104号・pp.89-90
1901	不詳・「弓術部大會記事」	試合結果, 試合内容	108号・pp.31-36
	不詳・「弓術部報」	試合結果, 試合内容	108号・pp.86-92
	不詳・「弓術部報」	試合結果, 試合内容	112号・pp.106-108

1902	弓術部委員・「弓術部々報」	寒稽古実施報告	115号・pp.63-66
	は、こ・「弓術部並大會記事」	試合結果，試合内容	117号・pp.79-94
	不詳・「弓術部日誌」	試合実施報告	120号・pp.75-78
1903	不詳・「弓術部報」	寒稽古実施報告	125号・pp.53-55
	不詳・「弓道部出征記」	試合結果，試合内容	127号・pp.78-82
	不詳・「弓術部々報」	試合結果	130号・pp.98-99
	委員・「弓術部々報」	試合結果，試合内容	132号・pp.72-76
1904	委員・「弓術部々報」	試合結果，試合内容	135号・pp.72-76
	委員・「弓術部々報」	試合結果，試合内容，会計報告	137号・pp.82-86
	委員・「弓術部々報」	試合結果	138号・pp.84-85
	委員・「弓術部々報」	試合実施報告	140号・pp.66-67
	不詳・「弓術部々報」	試合結果	142号・pp.79-81
1905	不詳・「弓術部々報」	寒稽古実施報告	145号・pp.105-108
	不詳・「弓術部報」	試合結果	148号・pp.113-116
	不詳・「弓術部々報」	会計報告	149号・p.45
	不詳・「弓術部々報」	試合結果	150号・pp.73-74
	不詳・「弓術部々報」	試合結果，試合内容，寒稽古実施のお知らせ	152号・pp.96-103
1906	不詳・「弓術部々報」	寒稽古実施報告，会計	155号・pp.80-84
	不詳・「弓術部々報」	部の現状	156号・pp.74-75
	不詳・「弓術部々報」	試合結果，試合内	157号・pp.71-75



		容	
	不詳・「弓術部々報」	部の現状	158号・pp.112-113
	不詳・「弓術部々報」	部の現状	159号・pp.59-61
	不詳・「弓術部々報」	部の現状, 試合結果	161号・pp.61-63
	不詳・「弓術部報」	部の現状	162号・pp.66-67
1907	不詳・「弓術部報」	試合結果	163号・pp.55-57
	不詳・「弓術部報」	寒稽古実施報告, 試合結果	165号・pp.110-113
1907	不詳・「弓術部報」	部の現状	166号・p.60
	不詳・「弓術部報」	試合結果	167号・pp.55-57
	不詳・「弓術部報」	部の現状	168号・p.113
1908	不詳・「弓術部報」	部の現状	175号・pp.79-81
	不詳・「弓術部々報」	部の現状	179号・pp.108-109
	不詳・「弓術部々報」	部の現状	180号・pp.70-71
	不詳・「弓術部々報」	部の現状	182号・pp.91-94
1909	不詳・「弓術部々報」	寒稽古実施報告	184号・pp.101-103
	不詳・「弓術部報」	試合実施報告	187号・pp.63-66
	不詳・「弓術部報」	部の現状	190号・pp.99-100
1910	不詳・「弓術部寒稽古」	試合結果, 寒稽古実施報告	195号・pp.75-78
	不詳・「弓術部報」	試合結果	197号・pp.80-82
	不詳・「弓術部報」	試合結果	201号・pp.57-59
1911	不詳・「弓術部報」	試合結果	205号・pp.53-55
	不詳・「弓術部々報」	試合結果	206号・pp.91-92
	委員・「弓術部々報」	試合結果	207号・pp.85-87
	委員・「弓術部々報」	試合結果	211号・pp.71-73

1912	弓術部・「弓術部々報」	寒稽古実施報告	214号・pp. 67-69
	草間俊次郎・「弓術部々報」	試合結果，試合内容	217号・pp. 49-53
1913	弓術部委員・「弓術部々報」	試合結果，試合内容	221号・pp. 57-59
	弓術部・「弓術部々報」	寒稽古実施報告	225号・pp. 104-107
	不詳・「弓術部々報」	試合結果	229号・pp. 59-61
	不詳・「弓術部々報」	部の現状	232号・pp. 125-126
1914	弓術部・「弓術部々報」	寒稽古実施報告	235号・pp. 23-25
1916	不詳・「弓術部部報」	試合結果	256号・pp. 96-98
1918	不詳・「弓術部部報」	寒稽古実施報告，試合結果，試合内容	272号・pp. 64-68
	不詳・弓術部部報	試合結果，試合内容	273号・pp. 40-45
1919	不詳・弓術部部報	試合結果	278号・pp. 44-49
1923	不詳・「弓術部大正十一年略史」	試合結果，試合内容	292号・pp. 107-110
1924	大日方勝・「弓術部京都遠征記」	試合結果，試合内容	299号・pp. 13-16
1925	不詳・「弓術部部報」	試合結果，試合内容	304号・pp. 21-24

## 2. 三高『嶽水會雑誌』における武道関係記事

### (1) 剣道部

年号	著者・タイトル	主な内容	号・ページ
1899	不詳・「撃劔部」	部の現状	1号・p. 80

1901	不詳・「撃剣柔道部記事」	道場の修復，寒稽古実施のお知らせ	9号・pp.73-76
	不詳・「対第四高等学校競技」	四高との対抗戦実施報告	12号・pp.72-73
	不詳・「撃剣柔道部の分離」	撃剣部と柔道部の独立	13号・pp.74-75
1902	不詳・「嶽水會撃剣大會」	試合結果，試合内容	18号・pp.133-136
1903	時實錦海・「撃剣紅白勝負」	試合結果，撃剣について	22号・pp.115-117
1907	緑波生・「撃剣紅白勝負」	四高との対抗戦の試合結果，試合内容	37号・pp.91-96
1908	吉武眞貫・「撃剣部記事」	六高との対抗戦，試合結果，試合内容	40号・pp.87-90
	霞月・「剣道部大會記」	試合結果	40号・p.91
1909	不詳・「剣道部岡山遠征記」	試合結果	43号・pp.109-110
1910	嶽水會理事・「撃剣部報告」	四高の三高侮辱問題	46号・pp.3-4 (付録内ページ数)
	二本杉・「撃剣部々報」	神戸高商との対抗戦，試合結果，試合内容	47号・pp.142-145
1911	不詳・「撃剣部々報」	寒稽古実施報告，大会実施報告	48号・pp.111-112
	不詳・「撃剣部々報」	試合結果	49号・pp.72-73
	不詳・「剣道部々報」	試合結果，試合内容	50号・pp.90-91
1912	不詳・「剣道部報」	試合結果，五高対	51号・pp.108-

		抗戦，六高との対 抗戦交渉結果	114
1912	松生，後生・「剣道 部々報」	部の現状，試合結 果	52号・pp.72-75
1913	不詳・「剣道部々報」	試合結果	55号・pp.96-97
1914	不詳・「剣道部々報」	六高との交渉結 果，試合結果，試 合内容	57号・pp.110- 114
	玉置東岳・「本校對六 高撃剣試合印象記」	六高・井上審判の 不正について	58号・pp.39-42
	勝矢・「剣道部々報」	試合結果，試合内 容	58号・pp.51-56
1915	不詳・「剣道部報」	試合結果，試合内 容	60号・pp.14-20 (「雑報」内のペ ージ数)
	不詳・「剣道部報」	試合結果	61号・p.3(「雑 報」内のページ 数)
1916	横山生・「剣道部々 報」	試合結果，試合内 容	62号・pp.78-80
1917	不詳・「剣道部報」	試合結果，試合内 容	65号・pp.7-10 (「雑報」内のペ ージ数)
	不詳・「剣道部報」	寒稽古実施報告， 試合結果(剣道大 会，対弥生会)	66号・pp.8-9 (「雑報」内のペ ージ数)
1918	不詳・「京大主催全國 高等學校及専門學校劍 道大會出陣の記」	試合結果，試合内 容	68号・pp.3-6 (「雑報」内のペ ージ数)
	不詳・「剣道部報」	試合結果	69号・pp.5-6 (「雑報」内のペ ージ数)

1920	SK 生・「剣道部報」	試合結果，試合内容	74号・pp.11-15 （「部報」内のページ数）
------	-------------	-----------	------------------------------

## (2) 柔道部

年号	著者・タイトル	主な内容	号・ページ
1899	不詳・「柔道寒稽古」	寒稽古実施報告	1号・p.79
1901	不詳・「撃剣柔道部記事」	道場の修復，寒稽古実施のお知らせ	9号・pp.73-76
	不詳・「柔道部記事」	寒稽古実施報告，試合結果，試合内容	10号・pp.67-70
	不詳・「對第四高等學校金澤醬學專門學校聯合有志者柔道紅白試合」	試合結果，試合内容	12号・pp.73-76
	不詳・「撃剣柔道部の分離」	撃剣部と柔道部の独立	13号・pp.74-75
1902	怒口 [字の消失] 生・「武徳裡の決戦」	試合結果，試合内容	17号・pp.94-101
1903	不詳・「柔道部寒稽古及び講道館京都分場勝負」	試合結果，試合内容	22号・pp.113-115
1907	金夢，緑波・「柔道紅白勝負」	四高との対抗戦の試合結果，試合内容	37号・pp.97-105
	不詳・「三高對六高柔道仕合記事」	六高との対抗戦，試合結果，試合内容	37号・pp.111-113
1908	不詳・「柔道大會記事」	試合結果	40号・pp.99-100
1909	ハナ・「柔道部報」	試合結果，試合内容	42号・pp.78-81

		容, 寒稽古実施報告	
	不詳・「柔道部報」	六高との対抗戦, 試合結果, 試合内容	43号・pp. 105-109
1910	不詳・「柔道部報」	試合結果, 試合内容	46号・pp. 97-99
1910	嶽水會理事・「柔道部報告」	四高の三高侮辱問題	46号・pp. 6-7
	頓首・「柔道部報」	四高の三高侮辱問題の経過報告	47号・pp. 139-142
1911	山巖・「柔道部々報」	試合結果, 試合内容	49号・pp. 70-71
1912	不詳・「柔道部報」	対抗試合(五, 六高)の試合結果, 寒稽古実施報告	52号・pp. 77-80
1913	不詳・「柔道部々報」	寒稽古実施報告	55号・pp. 94-96
1914	不詳・「柔道部々報」	試合結果, 試合内容	57号・pp. 98-104
1917	不詳・「柔道部々報」	試合結果	67号・p. 2 (「雑報」内のページ数)
1919	不詳・「柔道部報」	試合結果	72号・pp. 7-8 (「部報」内のページ数)
1920	K・T生・「柔道部部報」	部の現状, 試合結果	75号・pp. 26-27 (「部報」内のページ数)
	T・O・「柔道部々報」	部の現状, 試合結果	76号・pp. 2-3 (「雑報」内のページ数)
1921	盛・「柔道部部報」	部の現状, 試合結	77号・pp. 1-3

		果	(「雑報」内のページ数)
1922	不詳・「柔道部々報」	合宿実施報告, 試合結果	80号・pp.72-76
1923	廣川・「柔道部」	試合結果, 試合内容	83号・pp.76-82
	鎌田・「柔道部報」	試合結果, 試合内容	85号・pp.93-97
1929	鈴木良一・「柔道部々報」	試合結果	101号・pp.13-17 (「部報」内のページ数)
1930	鈴木良一・「柔道部々報」	試合結果	104号・pp.3-5 (「部報」内のページ数)
1931	不詳・「柔道部々報」	試合結果	106号・pp.8-13 (「部報」内のページ数)
1932	不詳・「柔道部々報」	試合結果	109号・pp.11-15 (「部報」内のページ数)

### (3) 弓術部

年号	著者・タイトル	主な内容	号・ページ
1905	再興委員 下斗米秀 二郎・「弓術部報」	射始式について	31号・pp.101- 103
1911	不詳・「弓術部々 報」	部の現状，試合結果	48号・pp.107- 109
1913	不詳・「弓術部部 報」	部の現状	54号・pp.112- 113
	不詳・「弓術部々 報」	試合結果，試合内容	55号・pp.84-87
	不詳・「弓術部歓迎 大會」	部の現状，試合結果	56号・pp.14-15 (「部報」中のペ ージ数)
1914	弓術部・「弓術部 報」	部の現状，試合結果	59号・pp.12-13
1915	不詳・「弓術部報 報」	部の現状，試合結果	61号・pp.5-6 (「部報」中のペ ージ数)
1917	不詳・「弓術部々 報」	部の現状，試合及び 寒稽古実施報告	65号・pp.6-7 (「雑報」内のペ ージ数)
	不詳・「弓術部報」	試合結果	67号・pp.2-3 (「雑報」内のペ ージ数)
1918	不詳・「弓術部報」	試合結果	70号・pp.15-16 (「部報」内のペ ージ数)
1919	不詳・「弓術部報」	試合結果	72号・pp.12-14 (「部報」内のペ ージ数)
1920	不詳・「弓術部報」	試合結果	74号・p.15 (「部報」内のペ



			ージ数)
	不詳・「弓術部部報」	試合結果	75号・pp.23-24 (「部報」内のページ数)
1921	S・S・「弓術部部報」	部の現状, 試合結果	77号・pp.5-6 (「部報」内のページ数)
	松村・「弓術部報」	部の現状	78号・p.3 (「部報」内のページ数)
1926	澤村・「弓道部」	部の現状, 試合結果, 試合内容	95号・pp.28-32 (「部報」内のページ数)
1928	不詳・「弓道部々報」	試合結果	98号・pp.36-38 (「部報」内のページ数)
1930	不詳・「弓道部々報」	試合実施報告	104号・pp.5-6 (「部報」内のページ数)

## 第二 戦前における競技剣道の展開：有効打突を中心に

### 1. 『明治武道史』における有効打突に関する言葉

名前と著作・ 成立年	姿勢	ページ数
撃剣指南・根 岸信五郎・ 1884	「刺撃之法」 中段若クハ下段ノ姿勢ニアツテ、右足ノミ 七寸乃至八寸許ヲ進メ、全體ヲ稍前ニ傾 ケ、左手ヲ以テ竹刀ヲ握リ、五指ヲ上ニ向 ケ敵ノ左方ヲ突キ、其距離敵ニ及バズト思	p. 17

	量スルトキハ、姿勢ヲ乱サズ送り足ヲナシテ敵ニ突入ル。	
	中段或ハ下段之姿勢ニアリテ、敵手ノ構ニ隙アル部分ヲ見認ムルトキ、竹刀ヲ引直スト同時進ンデ両手ヲ表裏ニ突キ込ム。之ヲ諸手刺ト云フ。	同上
體育演武必携・隈元実道・1896	肩へ劍の姿勢に復す [八相の構え]。	p. 324
擊劍體操法・橋本新太郎・1896	構ヒノ姿勢ヲ崩スベカラズ	p. 348
	基本演習ノ全部ヲ習得セシ後モ、姿勢・技癖等ヲ矯正シ、妙用ヲ會得セン	p. 348
	構ヒノ姿勢ヲ執ルニハ、必ズ間合（撃突距離外即チ彼我ノ刀尖接セザル程ノ距離）ノ外ニ於テスベシ。然ラザレバ、敵手ノ奇襲ヲ受クル恐アリ。	p. 358
	[休めの姿勢] 生徒ハ姿勢ニ留意スルコトナク、先ヅ左足ヲ足尖ノ方向出シ、其場ニ立チテ休息ス。	p. 349
	肩刀ノ姿勢 [竹刀を右手で持ち、右肩に立てかけた姿勢] (2回)	p. 351
	精眼ノ姿勢 (19回)	p. 352, p. 353, p. 354
	面へ延び込マントスル姿勢	p. 357
武術體操法・小沢卯之助・1897	氣ヲ附ケノ姿勢 (13回)	p. 369, p. 371, p. 375, p. 377, p. 379,

		p. . 380, p. 381, p. 408, p. 417
	不動ノ姿勢（7回）	p. 371, p. 374, p. 409, p. 421
	面撃ニ同ジキ姿勢ヲ保ツ	p. 382
望月馬太郎・ 講武・1904	他人に犯す事の出来ざる嚴正と云ふは、即姿勢の正しき也。構込の堅固なる也。されば構込と云ふは、演武の姿勢であり、故に姿勢の嚴正なるは、一見他人をしても敬信愛慕の念を起さしむ。抑も姿勢を以て、構込と解する時は、單り武術に而已に留まらず、茶道・生花、及び武官・文官・學校等皆一定の道あり。姿勢禮式之れである。若し其道に在る者にして、獨り規則に背き、勝手氣儘の學動を爲す時は、一見他人の擯斥を受るのみに止まらず、規律として又許さざる處也。	p. 497
	外は外形の雛形に基き、眞正の姿勢を保ち、内に秀達の智能を活動し、無念無想心決定するを肝要とす。	p. 497
	形の上に於ける構込は、前述の通りで足りませんが、嚴正威縮とか、端正洪徳とか、神靈顯妙とかいう云ふ點に至りますと、心の姿勢上より、外形の雛形を形作るの法が有舛。	p. 497
柳多元次郎・ 劍道教範・ 1911	姿勢の注意すべきものを學ぐれば、(イ) 身體は直立不動にして、前後左右に傾かず、姿勢の氣位あること。(ロ) 顔面は仰	p. 687

	がず、俯かず、傾かず、歪まず、額に皺よせず、敵に對して虚心平氣なる事。(ハ) 眼球は動かさず、獨りに瞬せず、郎に敵を見る事。(ニ) 頸椎は直ぐに、両肩を軽く下げ、脊柱を直ぐに、臂を出さず、腰を屈めず。	
	沈着にして、機敏なる動作、嚴肅にして端正なる禮法、自然の姿勢を保つ構備防備、正確なる執刀法、突撃法等を習得して、眞正に勝つべき、道理を會得せむしむるものとす。	p. 687
	不動の姿勢	p. 689
	構備、防備にありては、心、氣、力の三つが、手、足、體等の各部に凝滞なく、心身此に一致して、自然の形容を保つべき、正しき姿勢なるを要す。	p. 690
	[審判心得] 精神修養に重きを置き技術上の勝敗は成べく決せざるを可とす。何となれば、初心の中は只に僥倖の勝のみに汲々として、正確なる刀法、端正なる姿勢は、之が爲めに崩れ、心術鍛錬の方法を忽にし、眞正に勝つべき道理を誤るものあるが故なり。	p. 697

名前と著作・成立年	気勢	ページ数
剣法秘訣・廣瀬眞平・1884	對手英進（ウチス、ミ）ノ気勢（イキオヒ）ニ鋭キトキハ、我単々我ガ身ノ防衛ヲ事トシ、強テ敵ヲ撃チ突カント欲スベカラズ。然ルトキハ、對手自然ニ斯ノ気勢ヲ失ヒ惰氣ヲ生ズルモノユエ、此時ニ乗ジテ鋭ク撃入り、以テ勝ヲ制スベシ。	p. 57

	對手ニ氣勢（イキオヒ）ヲ張ラシムルハ、假令我ガ業優レルモ意外ノ失敗ヲ取り、又對手ノ氣勢ヲ挫クトキハ、我術劣レルモ十分ノ勝利ヲ占め得ルコトアリ。	p. 57
	恐ラクハ最初未熟者ヲ出シテ失敗ヲ取り、大ニ敵ノ勇氣ヲ増シテ藩士ノ氣勢ヲ損ゼジニ因リシコトト考察シ、他流試合ニ氣合ノ關係アルコト	p. 57
	他流試合ノ際ハ敵ヲシテ我技量ヲ測リ知ラシメズ、又少シク畏怖ノ心ヲ起サシメ、以テ其氣勢ヲ挫ク様、自ラ應對學動等ニ注意ヲ盡サンコトヲ要ス。	p. 58
武道教範・隈元実道・1895	道具を着用するに至ては、一に氣勢を助け、二に偶然無為の所為にあらざるを證し、三に一勝一敗を分ち、亂撃を防制するが爲めなりとす。	p. 245
擊劍體操法・橋本新太郎・1896	試合ニ在テハ、一回ノ擊突功ヲ奏セザルモ、其氣勢ヲ變ゼズ	p. 348

## 2. 『武徳誌』における刃筋

### ○ 『武徳誌』（刃筋）

文脈	著者・タイトル	発行年・巻数・ページ数
刀劍の刃筋をも調ぶるの必要ありて是は是非形に依らざる可らず	内藤高治・「劍道初歩（第二回）」[講話]	1907・三卷二篇七号・p. 62
常の稽古にも能く此の刃筋を正すを大切なりとす	同上	同上
初學の時に此の刃筋の事を心得て習學すべし	同上	同上

<p>双筋を正して修學するを以て初學の時尤も大切なる心得とす</p>	<p>内藤高治・「劍道初歩（第三回）」[講話]</p>	<p>1907・三卷二篇八号・p. 48</p>
<p>初學の時に於て姿勢を矯めず双筋を正さず、唯勝たんことをのみ專一とするに於ては無理に體を使うが故に双筋も正確ならず不具の技を演ずるのみならず、苟も武士道の精髓たる劍術を學ぶものに最も貴ぶべき心事の鄙陋を来す恐れあり</p>	<p>同上</p>	<p>同上</p>
<p>所謂太刀の持様、双筋の心得、構へ備への事共其他講武に關する總ての事を能く守りて稽古する</p>	<p>同上</p>	<p>同上</p>
<p>刀の双筋、手の内握方の強弱、間合等の加減の如きは初學の時に能く習ひ置くべし</p>	<p>同上</p>	<p>同上</p>

## 謝辞

本論文「明治期から現代における競技としての剣道の形成過程に関する研究—型の術理と競技スポーツ性との対抗関係を巡って—」の執筆にあたりまして、多くの先生方にご指導を賜り、そして関係者の皆様にご助言やご協力をいただき、厚く御礼申し上げます。

志々田文明先生（早稲田大学）には、これまでの武道に関する研究の系譜を踏まえて、本研究の目的・背景・方法・構成・内容等のご指導をいただきました。リー・トンプソン先生（早稲田大学）には論旨の一貫性等に関する視点からご教示いただきました。川島浩平先生（早稲田大学）には、競技としての剣道の形成過程に関わる全体的な視点からご教示いただきました。

大保木輝雄先生（元埼玉大学）からは実際に論文を執筆する上での詳細で具体的なお指導及び研究発表に関するご指導を継続的にいただきました。斉藤修平先生（文教大学）には研究の意義、独自性、内容等のご指導をいただきました。立木幸敏先生（国際武道大学）には論文の方向性や学会発表についてご指導をいただきました。吉田鞆男先生（吉田道場）、仙土克博先生（吉田道場）には実践的視点からご指導をいただきました。

中村充先生（順天堂大学）、早稲田大学の武道論研究室の皆様には理論と実践の往還に関して様々な面から支えていただきました。また、佐藤栄先生（恵迪館）、渡辺光一先生（学校法人福島高校）には温かく継続的に見守っていただきました。

本論文を提出することができましたのは、多くの先生方や剣術文化を伝承されている皆様、職場の皆様、関係者の皆様のおかげです。あらためて心より感謝申し上げます。

最後に、長い大学院生活をいつも暖かく見守り、そして喝を入れてくれた家族に感謝の気持ちを捧げます。

2020年1月吉日 佐藤 皓也